

児童相談所における家族再統合援助のあり方に関する研究 ～実践事例の収集、分析

子ども家庭福祉研究部	才村純・庄司順一・有村大士
非常勤研究員	板倉孝枝 (京都府立大学大学院)
研修員	根本顕 (神奈川県保健福祉部)
嘱託研究員	安部計彦 (西南学院大学)
東京都児童相談センター	犬塚峰子
厚生労働省児童福祉専門官	太田和男
大阪市中央児童相談所	久保樹里
神奈川県相模原児童相談所	佐久間てる美
嘱託研究員	妹尾洋之 (神奈川県厚木児童相談所)
神戸少年の町	野口啓示
宮城県子ども総合センター	本間博彰

要 約

平成 19 年度児童関連サービス調査研究等事業 (こども未来財団委託研究)「改正児童虐待防止法の円滑な運用に関する基礎研究」(主任研究者:才村純)において児童相談所を対象に実施した家族再統合に向けた保護者援助の実態調査の結果や文献等を踏まえ、保護者援助について先駆的な取り組みを行っている児童相談所や NPO 等を抽出し、所定の調査用紙を配布、記入を求めるとともに、詳細な取り組み内容や課題等を把握するため、必要に応じ当該児童相談所等に対しヒアリングを実施した。これらの先駆的事例に対し考察を加え、実践事例集としてまとめた。

取り組み例としては、コモンセンス・ペアレント・トレーニング、サインズ・オブ・セイフティ・アプローチ、マザー・グループ、児童相談所独自の開発に係る援助手法などである。

キーワード: 家族再統合、児童相談所、保護者援助

A Study on the System for Supporting Family Reintegration in Child Guidance Centers: Gathering and Analysis of Pioneering Practices

Jun Saimura, Junichi Shoji, Taishi Arimura, Takae Itakura, Akira Nemoto, Kazuhiko Abe, Mineko Inuzuka,
Kazuo Ohta, Juri Kubo, Terumi Sakuma, Hiroyuki Seno, Keiji Noguchi, Hiroaki Honma

Abstract : One of the most pressing problems on coping with child abuse cases is how to support the parent who maltreats his/her own child. The various programs about supporting parent are applied tentatively by many organizations such as the Child Guidance Centers and NPOs, but actually they are tried inconsistently and the information is not owned jointly among organizations. So we have got the pioneering practices together and analyzed in order to do for the CGC's appropriate practice.

Keywords : Family reintegration, Child Guidance Center, Parent Support

I 研究の目的

家族再統合に向けた援助の重要性が指摘される中、児童相談所においても家族再統合援助について試行錯誤が重ねられているが、本研究では、児童相談所における家族再統合援助が効果的に実施できるための基本的な課題整理を行うとともに、児童相談所における援助枠組みや援助の方法等について提言を行うことを目的としている。

平成17年度には、児童相談所における家族再統合援助の実態把握を行い、加えて家族再統合援助に関する概念整理、援助体系のモデル化を試みた。平成18年度においても引き続き、児童相談所における援助実態のより詳細な把握を行うとともに、新たに保護者や子どもの特性と援助効果との関係、援助が有効に機能するための要因等について統計的な分析を行った。

3年計画の最終年度に当たる平成19年度には、児童相談所やNPO等による先駆的な援助実践事例を収集・分析することにより、保護者援助のあり方に苦慮している児童相談所の効果的な援助実践に資することとした。

II 研究方法

過去2年間における本チーム研究による調査結果、および平成19年度児童関連サービス調査研究等事業(こども未来財団委託研究)「改正児童虐待防止法の円滑な運用に関する基礎研究」(主任研究者:才村純)において児童相談所を対象に実施した家族再統合に向けた保護者援助の実態調査の結果等を踏まえ、保護者援助について先駆的な取組みを行っている児童相談所やNPO等23ヶ所を抽出し、所定の調査用紙を郵送、1月21日を期限として回答を求めた。

調査票は、家族再統合プログラムについての概要の記述を求めた「アウトライン編」と、家族再統合プログラムについて実際の様子がイメージできる「実際編」で構成した。なお、同一の自治体内で複数の児童相談所において共通して取組まれているプログラムについては、中央児童相談所に回答を求めた。

さらに、詳細な取組み内容や課題等を把握するため、5ヶ所の児童相談所やNPO、児童養護施設に対しヒアリング調査を実施した。回答を得た調査票の内、主なものについて、ヒアリング調査で得た内容を追記するとともに、各プログラムに対する考察(コメント)を加え、実践事例集としてまとめた。

なお、「家族再統合」の概念については関係者間で十分なコンセンサスが得られているとはいえないが、本調査研究では「分離した家族が再び一緒に生活すること(家庭復帰)を示す」と定義し、このことを「調査票記入の手引き」の中でも説明した。

また、家族再統合援助プログラムには、「コモンセンス・ペアレンティング(以下CSP)」「セカンドステップ」

「家族療法」「ファミリー・グループ・カンファレンス」など、既存の理論や援助モデルなどを準拠枠として行われる各種技法を用いた援助があるが、本調査研究では、加えて「独自に工夫している援助技法」「特徴的な援助技法」「うまくいった援助手法」があれば、これらについても回答するよう「調査票記入の手引き」の中で述べた。

III 結果と考察

1. 回答状況

調査票を送付した児童相談所やNPO等23ヶ所のうち、13ヶ所32プログラムについて回答を得た(表1)。

表1 回答を得た機関とプログラム名

児童相談所、NPO等	プログラム名	事例番号
千葉県 君津児童相談所	ペアレント・トレーニング	1
東京都 児童相談センター	家族合同グループ心理療法「おたまじゃくし」	2
	グループ「いいな」(母親グループ)	3
	グループ「やっほー」(父親グループ)	4
神奈川県 相模原児童相談所	家族デイプログラム	5
	家族合同ミーティング	6
	コモンセンス・ペアレンティング(CSP)	7
神奈川県 厚木児童相談所	家族支援のためのプラン	8
	ABE Parenting(精研式ペアレント・トレーニング)	9
	ファミリー・ボンド・インタビュー(FBI)	10
	FGC Modification(ファミリー・グループ・カンファレンス)	11
	あつカン・いいんだよ	12
	合同ミーティング	13
	再統合ヒアリング	14
	保護者グループ	15
三重県 児童相談センター	保護者グループ並行父親カウンセリング	16
	個別的援助(行動療法等)	17
	CAP 児童養護施設プログラム	18
	FSW との連絡会議	19
大阪府 中央子ども家庭センター	MY TREE ペアレンツ・プログラム	20
	神戸少年の町版コモンセンス・ペアレンティング・プログラム	21
	MY TREE ペアレンツ・プログラム	22
高知県 中央児童相談所	CRC ペアレンティング・プログラム	23
	親子合同面接	24
横浜市 中央児童相談所	保護者グループ	25
大阪市 中央児童相談所	お父さん子育て塾	26
	MY TREE ペアレンツ・プログラム	27
	クッション・怒りのコントロールを学ぶ	28
児童養護施設 神戸少年の町	神戸少年の町版コモンセンス・ペアレンティング	29
児童養護施設 岡山 県立玉島学園	コモンセンス・ペアレンティング	30
社会福祉法人 子どもの虐待防止センター	施設 MCG	31
特定非営利活動法人 児童虐待防止協会	大阪方式マザー・グループ	32

注) プログラム名は、回答原文のまま掲載している。

2. 全事例を通じた考察

全事例を通じて明らかになったポイント等について以下に考察する。

(1) 全体的傾向

全体的傾向としては、次のとおりである。

- ①保護者の治療や養育態度の変容を目指す直接的な個別指導は児童相談所職員が児童相談所内で実施、グループ指導は児童相談所外スタッフの参加か外部委託による専門性を加味して児童相談所以外で実施している傾向にある。
- ②援助の枠組み設定自体を目的とするものは、主として家族単位を対象として児童相談所内で実施される傾向にある。
- ③職員やチームへのサポート、方針検討を含むものでは、「12. あつカン」、「17. 施設内 CAP」が注目されるが、それ以外は一般的な機関連携上の協議やケース・カンファレンスに連続している。
- ④児童相談所以外の機関が実施しているグループ指導 31、32 については児童相談所と保護者の緊張・対立的関係が背景にあり、その指導枠組み上の課題が別に存在している可能性がある。
- ⑤父親を対象とした援助は、環境条件上の制約があるのか、限られている（家族単位での援助には含まれるが）。

(2) 実施形態について

実施形態を見てみると、外部委託と児童相談所の職員が行うものの二つに分かれる。外部委託の場合はプログラムを児童相談所が購入するスタイルが多く（MY-TREE）や子ども虐待防止センターの MCG、大阪市のグループ等）、またプログラムに求められる技術も難しいと評価されている。児童相談所の職員が行うものは行動療法を基本にしたものが多く、CSP 等実施がやさしいものが選ばれている傾向が伺える。これらは児童相談所の職員の異動サイクルとも関連していると思われる。短期で異動するため、専門性の積み上げがしにくくなり、難しい技法を習得することが困難なことから、CSP のようなものが好まれるものと考えられる。

さらに、児童相談所の場合、保護者と対立関係にあることが少なくなく、個人の生育歴や深層心理を扱う MY-TREE のようなプログラムは、受講についての保護者の動機づけが得られにくいことも要因と考えられる。

(3) プログラムの内容について

プログラムの内容については、親の治療を目的とするものと、ソーシャルワークの枠組み設定（援助を受けることの動機付けを含む）を目的とするものの二つに分けられる。親の治療を目的とするのは、親グループを基本とする MCG や MY-TREE であったり、また CSP も親の治療（行動の変容）を目的とする。ソーシャルワークの枠組みを設定するものとしては、SoSA（Signs of Safety

Approach）や厚木のプログラムのようにストレングスに注目するアプローチ等である。このように見ると、千葉県君津児童相談所の事例のように、枠組みを SoSA でつくり、治療として CSP を導入するというのは理想的だと言えよう。

(4) プログラムの実施件数について

ほとんどのプログラムが実施の数や参加者の人数が少なくなっている。このことは、ほとんどのプログラムがパイロットスタディ的に行われている段階であることを物語っているといえる。

また、外部委託に関しては、単年度での事業となっているものが多いように感じられるが、このことは、「試みにやってみた。そこから考えよう」という段階であることを示すものと思われる。ここで必要なのは評価であり、効果が少ないプログラムを淘汰していく過程である。福祉行政の財源が厳しいことを考慮すると、費用対効果は重要なものと考えられる。

いずれにしろ、今後は種々のプログラムの有効性等について検証する作業が必要と考えられる。

(5) 実施場所やファシリテーターの選定について

プログラムの実施場所については、児童相談所と児童相談所以外とに分かれるが、東京都児童相談センターや子どもの虐待防止センター、横浜市中央児童相談所などの取組みのように、敢えて児童相談所以外の場所を選定する例も少なくない。また、横浜市中央児童相談所のように、児童相談所以外の第三者をファシリテーターに選定するなど、親子分離を図った児童相談所への保護者の心理的反発などを考慮していることは注目に値する。機能が児童相談所に集中しているわが国の制度下にあっては、直接か間接（業務委託）かは別として、実施主体は児童相談所にならざるを得ないが、少なくとも場所を児童相談所以外に選定したり、第三者のファシリテーターを選定することにより、プログラムの実施の場が、親にとって支持的・共感的なものであることを印象づけることは、極めて有効な措置と考えられる。

なお、神奈川県相模原児童相談所の家族デイプログラムのように、家族交流の促進を図るため、児童養護施設の家族交流室の和室や台所を活用して、家族団樂ごっこをシミュレートしているが、興味深い。

(6) プログラムの実施に当たっての基本的な要件

いずれの保護者援助のためのプログラムも、基本的に児童相談所の相談活動の一環に位置づけられる。児童相談所職員が実施する場合はもちろん、外部委託されるプログラムにおいても、そのプログラムが実施される上での相談援助の流れと位置づけが重要な要素を構成する。どの保護者に、いつ、どんなタイミングで、何をどのように児童相談所が提示するのかによって、たとえ内容的

に同じプログラムであったとしても、保護者の受け止めは大いに違って来るだろうし、結果としての効果、位置づけにも大いに影響することが予測される。

従って、我々が調査し情報収集したプログラムは、それぞれのプログラム自体が持っている特性や適性と共に、そのプログラムが児童相談所のどういう指導・援助の流れの中で選ばれ、保護者に提示・紹介され、実施に入っていくのか、またその実施経過をどのように児童相談所の指導・援助と並行してモニターされ、評価され、統合されていくのか、そして、あるプログラムの終結はどのように児童相談所の指導・援助につながれ、フォローされていくのかなどが、個々のプログラムの現実的な効果、評価としては切り離せない要素となる。つまり、総合的・長期的観点からのケースマネジメントが不可欠となる。このことは児童相談所が直接援助を行う場合は無論のこと、外部に委託した後も、児童相談所によるケースマネジメントが不可欠であることを意味する。

なお、援助の流れには以下のような要素が含まれている必要があると考えられる。

- ①プログラム対象者の選定に係る保護者・家族のアセスメントと指導・援助方針の策定
- ②プログラム側の特性、適性、運用上の条件
- ③①と②を合わせての実際のプログラムの設定と対象者の選定
- ④保護者への提示、紹介と保護者側の反応
- ⑤プログラム開始のための調整
- ⑥プログラム実施中の児童相談所の指導援助体制
- ⑦プログラム実施経過のモニター、評価と連携
- ⑧プログラム終結にあたってのプログラム実施者の評価
- ⑨プログラム実施中の児童相談所の指導援助の評価
- ⑩⑧と⑨を合わせての児童相談所の指導・援助への統合のための調整
- ⑪プログラム終結にあたっての保護者自身へのフィードバック
- ⑫児童相談所の指導援助とプログラムのアフターケア

今回の調査ではその全てを明らかに把握したわけではないし、またその実施・運用においてはかなり流動的に変化と工夫が重ねられている現実がうかがわれるが、我々が把握し得た先駆的事例について以下に紹介することにする。

(7) 情報共有とプライバシー保護

先述したように、保護者援助プログラムは児童相談所のケースマネジメントのもとに実施されることになるが、児童相談所がこれを適切に行うには、援助の進捗状況を常に把握しておく必要がある。このため、援助業務を外部委託した場合、児童相談所は委託先から援助の進捗状況についての定期的あるいは必要に応じた情報提供を求めることになろうが、児童相談所に情報提供することが当該援助業務を受託している機関と保護者との援助関係

に支障をきたす場合がある。当研究班でも、児童相談所は委託業務に対する責任を負っているわけであるから、委託先から援助の進捗状況を当然求めるべきであり、援助の開始に当たって保護者にもこのことへの理解を取り付けるべきであるとする意見がある一方、保護者が援助者に心を開き、本音を語ってくれるなど効果的な治療的援助を行うには、児童相談所に見張られていない「安全な場所」が必要であり、援助の進捗状況や保護者の状況等を伝えるべきではない、また保護者の秘密を洩らすのは援助者としての倫理面にも反するといった意見もあり、結論を出すことはできなかった。極めて重要な課題であり、本報告書では問題提起するにとどめたい。

3. 援助事例とこれらに対する考察

以下、今回の調査で把握した援助事例について援助の目的別に掲げるが、必要に応じて末尾に研究班としてのコメントを記し、考察に代える。

なお、表2は、援助事例を目的、実施担当者、実施場所、グループ・個人別、対象者等に基づいて分類したものである。

結 語

虐待事例における保護者援助の重要性が叫ばれる中、児童相談所をはじめ児童養護施設やNPO等において様々な実践が試みられている。しかし、その多くが相互の情報や知見の共有がなされておらず、個々ばらばらに行われているのが実情である。保護者への効果的な援助手法の確立は待たなしの課題である。このため、本研究では、先駆的な取り組みを行っている機関等にその取り組み内容等について所定の調査票に沿ってご記入いただき、補足的にヒアリングを行うとともに、全体的・個別的な考察を加えたものである。

紙数の限りもあり、ご記入いただいたすべての内容を紹介することはできなかった。また、保護者等のプライバシー保護の観点から参考となる多くの内容を割愛せざるを得なかったことをお断りしておく。

本報告書では回答者のご了解のもとに、敢えて機関名を表記させていただいた。効果的な援助のあり方を模索している機関同士で情報や意見の交換をしていただくためである。

なお、強調しておきたいのは、「保護者援助プログラムに王道なし」ということである。「こうすれば必ずうまくいく」というものではなく、ある事例に適用してみてもうまくいったからといって、他の事例でも効果をあげどころか、却って有害な場合もあり得よう。「考察」でも述べたが、同じプログラムでも、事例の性格や援助の段階(stage)によってその効果は大きく異なることはいまでもない。したがって、本報告書は「虎の巻」ではないことをお断りしておきたい。

さらに、保護者援助は、本報告書で紹介した保護者援助プログラムのみならず、生活課題解決のためのソーシャルワーク、カウンセリングなどの心理的援助、家族と子どもを徐々に接近させる行動療法的アプローチである家族再接触プログラムなど多様な業務から成り立っている（注1）。したがって、本報告書で紹介した援助プログラムは保護者援助の一端を担うものであって、保護者援助のすべてでないことはいままでの間もない。

それでも、本報告書で紹介・分析した事例は、保護者援助のあり方について苦慮している児童相談所等にとっては、実践上の大きな示唆を与えるものと考えている。本報告書が、保護者援助の手法を確立するうえでの叩き台になれば幸いである。

なお、主任研究者らは「改正児童虐待防止法の円滑な運用に関する基礎研究」（2007）（注2）において、保護

者援助のためのガイドライン及び措置解除の適否判断のためのチェックリストを作成したが、本報告書と併せて活用していただければ幸甚である。

最後になったが、ご多用の中、調査票への回答やヒアリングへのご協力をいただいた多くの関係機関をはじめ、研究方法や事例に対する分析などで貴重なご助言をいただいた研究協力者の方々に心から御礼申し上げる次第である。

注：

- 1) 才村純『子ども虐待ソーシャルワーク論－制度と実践への考察』、有斐閣、2005
- 2) 才村純他『改正児童虐待防止法の円滑な運用に関する基礎研究』、平成19年度児童関連サービス調査研究等事業（主任研究者：才村純）、財団法人こども未来財団、2007

表2 回答を得た各プログラムについての実施形態（目的、実施担当者、実施場所、グループ・個人、対象者等）による分類

㊦：援助対象者をグループにして実施（実際には母親を対象）

㊧：援助対象者を家族メンバーとして実施（父母・きょうだい 子ども本人を含む）

父：援助対象者として父親を対象として実施

		児相が直接支援担当している						児相が直接支援担当していない。 児相の関与はあってもプログラム参加にあたっては児相だけでなく医療機関、保健所、市町村からの紹介あるいは個人としての参加も含まれる
		児相職員が直接担当実施する		児相職員と外部スタッフが役割分担して実施する		児相以外の機関（施設・外部委託機関等）のスタッフが担当実施する		児相以外の機関スタッフが担当
		児相内実施	児相外実施	児相内実施	児相外実施	児相内実施	児相外実施	児相外実施
直接保護者の治療や養育態度の変容を目的とするもの	カテゴリーA 1 4 ㊦ 7 9 ㊦ 10 ㊦ 16 父 17 21 24	カテゴリーB 5 ㊦		カテゴリーC 2 ㊦ 3 ㊦ 15 ㊦ 25 ㊦		カテゴリーD 23	カテゴリーE 20 ㊦ 22 ㊦ 26 ㊦ 父 27 ㊦ 28 ㊦ 29 30	カテゴリーF 31 ㊦ 32 ㊦
ソーシャルワークの枠組み設定自体を目的とするもの	カテゴリーG 6 ㊦ 8 ㊦ 11 ㊦ 13 ㊦							
職員・チームへのサポート、方針検討を目的に含むもの	カテゴリーH 12 14 19						カテゴリーI 18 ㊦	

事例集：援助プログラム事例（1）

1 直接保護者の治療や養育態度の変容を目的とするもの

【事例番号1：千葉県君津児童相談所】

アウトライン編	
プログラム名	ペアレント・トレーニング
ベースとしている技法	コモンセンス・ペアレンティング
実施主体	児童相談所
対象者	原則として虐待で親子分離中のケースで、交流や再統合を希望している親
個人/グループ人数	個人
体制（係わる職員）	<input checked="" type="checkbox"/> 児童相談所単独 <input type="checkbox"/> 他機関との協働 ・どのような機関ですか？（ ） ・契約の形態は？（ ） ・予算(謝礼等)は？（ ） ・具体的に記入してください
プログラムの概要（基本的な考え方）	虐待で分離したケースで、親が再統合やそのためステップとして面会や帰省を希望した場合に、具体的な子どもへのかかわり方について、児童相談所職員の指導のもとで学んでもらう。
内容（ワーク名/ねらい）	たたいたり、怒鳴ったりせずに子どもをしつける方法を、講義とモデリング(ビデオ)ロールプレイを通じて学ぶ。
回数（開催頻度）	月1～2回
期間（1クール）	6回
開催場所	児童相談所（ケースによっては公共機関を借りることもある）
開催時間（所要時間）	1回、約1時間～1時間30分
期待できる効果	・具体的なプログラムや、6回という回数を提示することで、保護者に先の見通しを持たせやすく、通所の意欲を引き出しやすい。 ・モデリングやロールプレイによって、保護者が行動を変えやすい効果がある。 ・プログラムに通ってくることによって、保護者の変容の意欲をはかたり、向上させたりすることができる。
プログラム適用の時期（選択して下さい・複数回答可）	<input type="checkbox"/> 初期介入時 <input checked="" type="checkbox"/> 一時保護中 <input type="checkbox"/> その他(具体的に記入してください) <input checked="" type="checkbox"/> 施設等措置中 <input checked="" type="checkbox"/> 措置解除後
通常業務時間外(土日、夜間)の実施	ケースによっては有（保護者の都合による）
交通費等の支給等の参加者への配慮	なし（通常の通所指導の枠の中で行なう）
同時に行なうプログラム	S o S A 問題解決のための面接
終了後に行なうプログラム	
導入のきっかけ	・保護者から、分離している子の引取りや交流の希望が出されたとき ・家庭状況が整い、児童相談所・施設・保護者で再統合の方向性が確認されたとき
技法・技術をどこで習得したか	コモンセンス・ペアレンティングのトレーナー養成講座(個人向け・習得にかかる費用は個人負担)
導入に伴う準備（期間、費用等）	・トレーナー養成講座の受講（最低3日間、20000円程度） 設備・備品（ビデオ(DVD)、モニター(TV)）
技術的な難易度（主観で） 100点満点で何点 1(とてもかんたん)～100(非常に難しい)	コメント等あれば記入してください 70点 マニュアルがあるため、比較的簡単だが、ロールプレイの導入などには技術を要する
効果の実感/おすすめ度 100点満点で何点 1(おすすめできない)～100(超おすすめ)	コメント等あれば記入してください 70点 実施したケースが少ないため、効果測定しにくい。中には効果が実感できないケースもある。
課題/苦勞すること（選択して下さい・複数回答可）	<input checked="" type="checkbox"/> 技術的に高度である <input checked="" type="checkbox"/> 予算の確保が困難 <input type="checkbox"/> 所内の理解を得るのが困難 <input type="checkbox"/> 他機関との連携が困難 <input type="checkbox"/> 対象者の選定が困難 <input type="checkbox"/> その他(具体的に記入してください)
向いているケース	保護者の意欲が高く、実際に子どもとのかかわりに苦しんでいたケース。
うまくいくためのポイント	トレーナーのほかにサポーターとして職員が入ること。
備考	

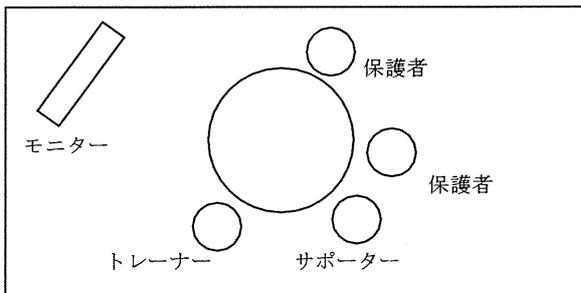
実 際 編

<実績>

	実施回数	参加人数（実人数）	参加人数（延人数）
平成 17 年度	3（1 ケース）	2	6
平成 18 年度	4（2 ケース）	3	6
平成 19 年度（12 月末現在）	7（2 ケース）	3	11

<実施日程>

<実施場所> 児童相談所面接室



<実施内容>

講義・・・ワークシート作成など

↓

モデリング・・・ビデオ、イラスト

↓

ロールプレイ

↓

まとめ

<スタッフの役割>

- ・ トレーナー

講義～終了までの進行

ロールプレイにあたっては、子ども役になり、保護者はトレーナーに向かって言葉がける。

- ・ サポーター

トレーナーをサポート

ロールプレイにあたっては、親に先立ってロールプレイを行なうなど、親のプログラム参加を助ける。

<ケースの概要と導入の過程> 割愛

--ある日の様子--

第3回目「効果的な褒め方」

講義にあわせて、褒め方についてのイラスト配布。褒め方の手順を示したカードを渡し、ビデオを観ながらのモデリング。その後ロールプレイへ。サポーターからプレイをはじめ、導入を助ける。父は、たどたどしいがトレーナーの助けでプレイできる。母は、要領がのみこめず、トレーナーがほぼすべてを言ってあげないとプレイできない様子。次回までに、今回のほめ方を家庭で実践してくるよう、宿題を出して終了。

<特記事項>

<研究班としてのコメント>

コモンセンスペアレンティングは、数多くの児相等で実施されている。保護者が自身の養育に問題意識を持っているケースには非常に大きな効果が期待できる。

【事例番号4：東京都児童相談センター】

アウトライン編	
プログラム名	グループ「やっほー」(父親グループ)
ベースとしている技法	集団精神療法
実施主体	東京都児童相談センター
対象者	虐待で分離中もしくは在宅で指導中の子どもの保護者(虐待者もしくは配偶者) 子どもの年齢は不問
個人/グループ人数	参加は各回3~6名 利用登録者は15~18名
体制(係わる職員)	<p>■児童相談所単独 児相職員1名と非常勤職員2名(精神科医、心理)いずれも男性職員 非常勤職員については報償費で対応し、「やっほー」の他「いいな」「おたまじゃくし」で合わせて年間1000万強の予算措置をしている。</p> <p>□他機関との協働 ・どのような機関ですか? () ・契約の形態は? () ・予算(謝礼等)は? () ・具体的に記入してください ()</p>
プログラムの概要(基本的な考え方)	<p>・3名の職員が順々にファシリテーターとして集団をコントロールするが、一方で、スタッフも参加者と同じ「父親」という立場でグループに参加している(一定程度の自己開示をして)。 ・児相職員も、ケアを主に分担する部署の職員なので直接の怒りの対象である児童相談所との橋渡しをするという機能がある。</p>
内容(ワーク名/ねらい)	女性のグループのように傷つきや感情にスポットをあてるのではなく、男性性に配慮したプログラムとする。個人への働きかけというより、親子関係、家族関係の係りに配慮し支援する。
回数(開催頻度)	H14~H18は月1回 H19年以降 月2回実施
期間(1クール)	特に定めず
開催場所	児相センター ミーティングルーム
開催時間(所要時間)	スタッフミーティング 30~60分、グループ 90分
期待できる効果	<p>・親の孤立感の解消 ・子育てへの自信の回復 ・子育ての認知の歪みへの方向修正 ・子どもの認知の歪みへの方向修正</p> <p>・子どもの理解 ・自己肯定感の獲得 ・関係機関との関係改善</p>
プログラム適用の時期(選択して下さい・複数回答可)	<input type="checkbox"/> 初期介入時 <input checked="" type="checkbox"/> 一時保護中 <input type="checkbox"/> その他(具体的に記入してください) <input checked="" type="checkbox"/> 施設等措置中 <input checked="" type="checkbox"/> 措置解除後
通常業務時間外(土日、夜間)の実施	土曜日
交通費等の支給等の参加者への配慮	なし
同時に行なうプログラム	「いいな」「おたまじゃくし」を適宜
終了後に行なうプログラム	特に定めず
導入のきっかけ	H11子どもの心のケアセンター構想の中から発展してきた
技法・技術をどこで習得したか	実践の場で
導入に伴う準備(期間、費用等)	
技術的な難易度(主観で) 100点満点で何点 1(とてもかんたん)~100(非常に難しい)	<p>コメント等あれば記入してください</p> <p>70点 グループの中でも男性性というか、怒りで表現するしかない人もいるが、そういった感情のコントロールが時に必要</p>
効果の実感/おすすめ度 100点満点で何点 1(おすすめできない)~100(超おすすめ)	<p>コメント等あれば記入してください</p> <p>60点 参加が定着すれば効果あるが、1~2回の参加で脱落する層もいる。また、即目に見える効果を求める保護者の対応にやや苦慮する</p>
課題/苦勞すること(選択して下さい・複数回答可)	<input type="checkbox"/> 技術的に高度である <input type="checkbox"/> 所内の理解を得るのが困難 <input type="checkbox"/> 対象者の選定が困難 <input type="checkbox"/> 予算の確保が困難 <input type="checkbox"/> 他機関との連携が困難 <input type="checkbox"/> その他(具体的に記入してください) 非常勤スタッフへのケース概要の周知など、なかなか時間がとれない
向いているケース	分離中で、「返すための手段」として使うケースが多いが。
うまくいくためのポイント	「高所から物を言うような態度」ととられないこと。ある程度、同じ土俵にのって話すこと。
備考	

実 際 編

<実績>

	実施回数	参加人数（実人数）	参加人数（延人数）
平成17年度	12	10	37+2（個別）
平成18年度	14	14	49+11（個別）
平成19年度（12月末現在）	16	16	56+8（個別）

<実施日程>

- ・毎月第1, 3土曜
10:30~12:00
- ・他、個別面接（2ケース）、夫婦面接（1ケース）を参加者の都合に合わせて行なう。

<実施場所>

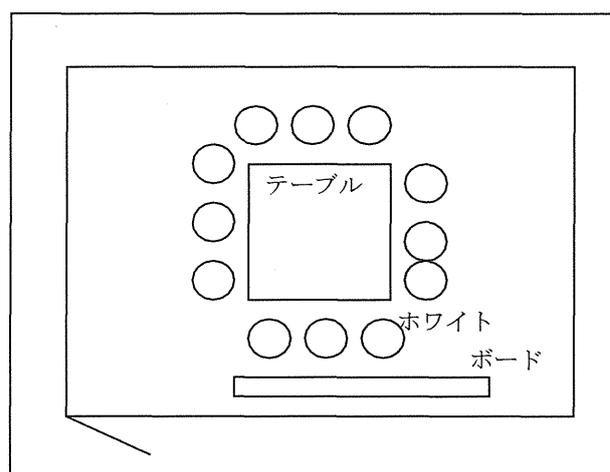
児童相談所センター ミーティングルーム

<実施内容>

- ・近況報告
 - ・当日の課題、話題
 - ・感想
- ひとあたり参加者に話してもらう

<スタッフの役割>

- ・ファシリテーター
 - ・記録
- ・児相スタッフは児童福祉司などとの協議の設定なども行なう



<ケースの概要と導入の過程> 割愛

—ある日の様子—

新しいメンバーが2人いたので、自己紹介を兼ね近況を話す。

“お父さんとしてのメンバーの共通点とそれぞれの独自さ”をファシリテーターが主導して話していく。

最後に参加者にひとあたり感想を話してもらい終了。

<特記事項>

上記参加者、各自社会人として稼働できているレベルである。それぞれ、“体罰を含む厳しいしつけ”を自ら受けてきたメンバーがほとんどながら、大多数は、“昔は子育てはそうだった”“それで自分は道を誤らず、今みたいにちゃんと社会に出てやっていける”と、親を否定して家出をして現在に至っているケースでも“被虐待”とは認めないケースが多い。

【事例番号7：神奈川県相模原児童相談所】

アウトライン編	
プログラム名	コモンセンスペアレンティング (CSP)
ベースとしている技法	コモンセンスペアレンティング (CSP)
実施主体	神奈川県相模原児童相談所
対象者	・虐待により分離中の親で、児童相談所の提示した支援プランの一環として参加に同意した人 ・分離中または在宅の親（または里親）で養育について学びたいという意思のある人 ・里親
個人／グループ人数	個人
体制（係わる職員）	■児童相談所単独 □他機関との協働 ・どのような機関ですか？（ ） ・予算(謝礼等)は？（ ） ・契約の形態は？（ ） ・具体的に記入してください
プログラムの概要 （基本的な考え方）	行動療法の理論背景をもとに、子どもの問題行動を減らし、望ましい行動を効果的に身につけられるスキルの体得を経験的に学習するプログラム。
内容（ワーク名／ねらい）	1 分かりやすいコミュニケーション：プログラムの紹介、自己紹介、しつけについて考える、子どもにしてほしいこと、あいまいな表現ではなく、分かりやすく伝える方法を身につける。 2 良い結果と悪い結果：子どもの望ましい行動を増やし、望ましくない行動を減らす方法を身につける 3 効果的なほめ方：効果的な方法を身につける 4 落ち着くヒント：怒りをマネジメントする方法を身につける 5 子どもの成長と親の役割：子どもの発達を考えながら、親の期待を整理する 6 自分自身をコントロールする教育法：子どもが感情的になって、親に反抗したり、泣き叫んだりするような緊張感が高い状況への対処の方法を身につける （子ども・家族への支援・治療をするためにより抜粋）
回数（開催頻度）	随時
期間（1クール）	6回 1クール（3ヶ月程度）
開催場所	児童相談所の面接室（家族療法室など広めの部屋）
開催時間（所要時間）	1回につき 1時間40分から2時間
期待できる効果	強制的なしつけ（虐待）から、それ以外のしつけ（ほめる、教えるといった肯定的なしつけ）を学ぶことで、子どもとの関係が改善（グッドサイクルが実現）し、最終的には親の自信にもつながっていく。（虐待防止、虐待予防の効果） また、セッションを重ね、その後の感想を聞き取る中で親の子育てへの考え方、子どもへの思い等が共有でき、副次的に児童相談所と親との関係改善にもつながる場合もある。
プログラム適用の時期 （選択して下さい・複数回答可）	□初期介入時 ■施設等措置中 ■一時保護中 □措置解除後 ■その他（具体的に記入してください） 在宅指導中でプログラムへの参加を望んでいる人 里親支援として委託開始時
通常業務時間外（土日、夜間）の実施	通常は勤務時間内だが、親の都合にあわせて実施 夜間、土日の対応もある（例 19:00～21:00）
交通費等の支給等の参加者への配慮	なし
同時に行なうプログラム	
終了後に行なうプログラム	
導入のきっかけ	
技法・技術をどこで習得したか	神戸少年の町 トレーナー養成講座
導入に伴う準備（期間、費用等）	養成講座参加のための費用（受講料・交通費など）
技術的な難易度（主観で） 100点満点で何点 1(とてめかんたん)～100(非常に難しい)	コメント等あれば記入してください <u>30点</u> 教材が充実しており、導入はしやすいが奥が深くやればやるほど難しさも出てくる。点数化は難しいが無理やりつけるとこの点数。
効果の実感／おすすめ度 100点満点で何点 1(おすすめできない)～100(超おすすめ)	コメント等あれば記入してください <u>90点</u> ビデオがあり親にもイメージがしやすい。積極的に参加していない人でも印象に残るようで、やる価値はあり。
課題／苦勞すること （選択して下さい・複数回答可）	□技術的に高度である □予算の確保が困難 □所内の理解を得るのが困難 □他機関との連携が困難 ■対象者の選定が困難 □その他（具体的に記入してください）
向いているケース	子育てに困っているケース 身体的虐待ケース
うまくいくためのポイント	配布用資料をテキストに基づき作成している。
備考	

実際編

<実績>

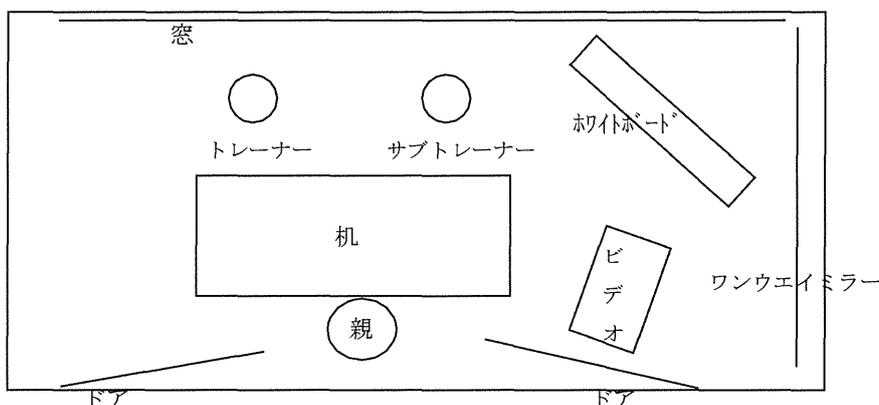
	実施回数	参加人数 (実人数)	参加人数 (延人数)
平成17年度			
平成18年度			
平成19年度 (12月末現在)	6	1 (1)	1 (6)

<実施日程>

18:30 配布資料、ビデオ、ホワイトボード、お茶の用意
 19:00 コモンセンスペアレントトレーニング
 宿題の確認（前回の復習）
 ワーク→講義→ビデオ→講義→ロールプレイ→
 まとめ
 21:00 片付け
 21:10 終了

<実施場所>

児童相談所家族療法室
 (広めの部屋)



<実施内容>

トレーニングマニュアルに沿いながら、全部で6回のセッション（2時間×6回）を行う。トレーナー（進行）、サブトレーナー（記録等）の2名で実施する。

テキスト等（マニュアルを参照に独自に作成）を使いながら、セッションをすすめていく。トレーナー1回の流れはそのセッションによって若干の違いはあるが、概ね次のとおり。復習（10分）→講義（10分）→モデリング（5分）→講義（5分）→モデリング（5分）→講義（5分）→ロールプレイ（25分）→まとめ・宿題の配布（5分）

実際は予定時間をかなり超過している

☆ レッスンに必要な道具

- ・ トレーナーマニュアル
- ・ コモンセンスペアレンティングスキルカード
- ・ 配布資料（テキストと付録、宿題）
- ・ 修了証
- ・ トレーニングビデオ

テキスト以外はトレーナーキットとして養成研修で配布されたもの

<スタッフの役割>

トレーナー：講義

サブトレーナー：トレーナーの補助 記録

<ケースの概要と導入の過程> 割愛

—ある日の様子—

仕事が終わりと、作業着のままバイクで来所。

「お仕事お疲れ様でした…」とお茶をだしながら、しばらくは天気のことなど世間話をする。親からは施設や当所（地区担当）との連絡がスムーズにいけないことや子どもに会えない、情報が少ないことへの不満を訴えるためしばらく話をきく。地区担当に親の気持ちを伝えることとして、セッションに入る。

テキストはトレーナーが読みながら講義をすすめるが、時には親にも読んでもらう。内容のひとつひとつに「家ではこうやっていた」「自分ならこういう」と反応がある。講義の内容に合うエピソードのときには、大いに親をほめる。ビデオはよく見ており、その後のロールプレイも参加。概ね講義の内容にあわせて応えており、本質からははずれることはない。終了までに2時間を越えてしまい、疲れもあるのか目が真っ赤になっているが、トラブルになることもなく終了する。

【事例番号9：神奈川県厚木児童相談所】

アウトライン編	
プログラム名	ABE-Parenting
ベースとしている技法	精研式ペアレントトレーニング
実施主体	神奈川県厚木児童相談所
対象者	幼児から10歳くらいまでのお子さんを持つ親御さん（里親含む）
個人／グループ人数	1人～夫婦（里父母含む）。グループでの実施も可能。
体制（係わる職員）	<input checked="" type="checkbox"/> 児童相談所単独 <input type="checkbox"/> リーダー役とサブリーダー役は親子支援チーム2名で担当。 <input type="checkbox"/> 里親への実施時は、里親対応専門員が親役となり、グループ化を図る。 <input type="checkbox"/> 他機関との協働 ・どのような機関ですか？（ ） ・予算（謝礼等）は？（ ） ・契約の形態は？（ ） ・具体的に記入してください
プログラムの概要（基本的な考え方）	<input type="checkbox"/> 親子関係の悪循環が良い循環になるような支援を志す <input type="checkbox"/> 肯定的な注目（ほめる等）に努めている親をスタッフがほめる⇒親に対するエンパワーメント <input type="checkbox"/> 行動化から言語化への転換 <input type="checkbox"/> 言語化を通じた親の内面の発露 <input type="checkbox"/> 夫婦ないしは支援者との関係性の調整・強化
内容（ワーク名／ねらい）	ペアレントトレーニングの手法を活用した個人／夫婦カウンセリング
回数（開催頻度）	全10回（隔週実施） + 事前ガイダンス + オプション 2回
期間（1クール）	約6ヶ月
開催場所	児童相談所、関係機関相談室等
開催時間（所要時間）	各回60～90分
期待できる効果	<input type="checkbox"/> 子育てスキルの向上 <input type="checkbox"/> にとどまらず、親の内面の取り扱い（カウンセリング効果大） <input type="checkbox"/> にとどまらず、子育て／親子／夫婦関係への直面化（関係性の評価・調整）
プログラム適用の時期（選択して下さい・複数回答可）	<input checked="" type="checkbox"/> 初期介入時 <input checked="" type="checkbox"/> 一時保護中 <input type="checkbox"/> その他(具体的に記入してください) <input checked="" type="checkbox"/> 施設等措置中 <input checked="" type="checkbox"/> 措置解除後
通常業務時間外(土日、夜間)の実施	必要に応じて検討
交通費等の支給等の参加者への配慮	なし
同時に行なうプログラム	特定のものはなし
終了後に行なうプログラム	特定のものはなし
導入のきっかけ	親子支援チームの発足に当たり、具体的な援助技法を求めていたので。
技法・技術をどこで習得したか	まめの木クリニックでの実践を見学、国立精神・神経センター精神保健研究所の研修会等
導入に伴う準備（期間、費用等）	2～3ヶ月、研修会等にかかる費用
技術的な難易度（主観で） 100点満点で何点 1(とともかんたん)～100(非常に難しい)	コメント等あれば記入してください <u>80点</u>
効果の実感／おすすめ度 100点満点で何点 1(おすすめできない)～100(超おすすめ)	コメント等あれば記入してください <u>80点</u>
課題／苦勞すること（選択して下さい・複数回答可）	<input type="checkbox"/> 技術的に高度である <input type="checkbox"/> 所内の理解を得るのが困難 <input type="checkbox"/> 対象者の選定が困難 <input type="checkbox"/> 予算の確保が困難 <input type="checkbox"/> 他機関との連携が困難 <input checked="" type="checkbox"/> その他(具体的に記入してください) 実施に当たっての参加者の意識（モチベーション）をどう高めて行くかが難しい
向いているケース	子どもの行動でイライラしてしまう親 分離後再統合して間もないケース 分離されていないきょうだいケース
うまくいくためのポイント	・モチベーションの維持 ・児童相談所との関係性の維持 ・場の雰囲気
備考	夫婦での参加の方が継続している

＜研究班としてのコメント＞

ペアレントトレーニングは、行動に焦点を当てた技法であるため、保護者が受け入れやすいものである。そのため比較的多くの児童相談所で実施されているが、対象者を夫婦単位で設定しており、しかも夫婦での参加の方が継続していることは注目に値する。母あるいは父どちらか一方に働きかけるよりも、家族内の力動に及ぼす影響が大きいと、援助の効果が現れやすいものと考えられる。

【事例番号10：神奈川県厚木児童相談所】

アウトライン編	
プログラム名	ファミリー・ボンド・インタビュー (FBI)
ベースとしている技法	独自
実施主体	神奈川県厚木児童相談所
対象者	家族関係 (親子関係・夫婦関係) 評価を必要としている家族
個人/グループ人数	保護者および児童
体制 (係わる職員)	<input checked="" type="checkbox"/> 児童相談所単独 <input type="checkbox"/> 他機関との協働 親子支援チーム ・どのような機関ですか? () 児童福祉司 ・契約の形態は? () 児童心理司 ・予算(謝礼等)は? () ・具体的に記入してください
プログラムの概要 (基本的な考え方)	<input type="checkbox"/> 親子関係・夫婦関係・家族関係について、関係性を評価しつつ、再統合に向けた治療教育的な支援を組み立てる。 <input type="checkbox"/> 保護者の内的表象と顕在化している家族間コミュニケーションの双方を観察する。 <input type="checkbox"/> 言語的表出と行動的表出の双方を観察する。
内容 (ワーク名/ねらい)	<input type="checkbox"/> 親子関係 ・養育者の内的表象評価 Working Model of the Child Interview(version4) <input type="checkbox"/> 夫婦関係 ・夫婦関係相互認知評価尺度 「ファミリー・フレーム」 ・子育てコミュニケーション活性化プログラム 「アクションキャッチャー」 <input type="checkbox"/> 家族関係 ・家族成員間関係性協調性評価プログラム 「ファミリー・プレイ」
回数 (開催頻度)	4回以上
期間 (1クール)	1~2ヶ月 (目安)
開催場所	児童相談所、関係機関
開催時間 (所要時間)	60分~120分
期待できる効果	<input type="checkbox"/> 家族・家族関係評価 <input type="checkbox"/> 夫婦関係への直面化と気づき (ただしその後 ABE-Parenting 等へのつながりが必要) <input type="checkbox"/> 夫婦カウンセリングの効果
プログラム適用の時期 (選択して下さい・複数回答可)	<input checked="" type="checkbox"/> 初期介入時 <input checked="" type="checkbox"/> 一時保護中 <input checked="" type="checkbox"/> 施設等措置中 <input checked="" type="checkbox"/> 措置解除後 <input checked="" type="checkbox"/> その他(具体的に記入してください) : Family Preservation 目的の使用もあり
通常業務時間外(土日、夜間)の実施	必要に応じて検討
交通費等の支給等の参加者への配慮	なし
同時に行なうプログラム	特定のものなし
終了後に行なうプログラム	ABE-Parenting、保護者グループ等
導入のきっかけ	児童相談所での支援に結びつけやすい家族アセスメントの必要性に迫られて
技法・技術をどこで習得したか	独自
導入に伴う準備 (期間、費用等)	なし
技術的な難易度 (主観で) 100点満点で何点 1(とてもかんたん)~100(非常に難しい)	コメント等あれば記入してください 80点 まだ開発途上なので何とも言えません。
効果の実感/おすすめ度 100点満点で何点 1(おすすめできない)~100(超おすすめ)	コメント等あれば記入してください 80点 まだ開発途上なので何とも言えません。
課題/苦勞すること (選択して下さい・複数回答可)	<input type="checkbox"/> 技術的に高度である <input type="checkbox"/> 所内の理解を得るのが困難 <input type="checkbox"/> 対象者の選定が困難 <input type="checkbox"/> 予算の確保が困難 <input type="checkbox"/> 他機関との連携が困難 <input checked="" type="checkbox"/> その他(具体的に記入してください) まだ開発途上なので、良くも悪くも変化の余地があります。
向いているケース	ある程度受講意欲が確認できていれば。
うまくいくためのポイント	夫婦関係のエンパワーメント。夫婦関係に緊張感が高い場合は特に注意する。
備考	Working Model of the Child Interview(version4) 以外は、オリジナルプログラムなので、効果については今後検証を重ねる必要があります。

【事例番号16：神奈川県厚木児童相談所】

アウトライン編	
プログラム名	保護者グループ並行父親カウンセリング
ベースとしている技法	特定されず
実施主体	神奈川県厚木児童相談所
対象者	保護者グループに母親が参加している夫婦のパートナー
個人/グループ人数	個別面接
体制(係わる職員)	<input checked="" type="checkbox"/> 児童相談所単独 <input type="checkbox"/> 他機関との協働 親子支援チーム 担当児童福祉司 ・どのような機関ですか? () ・契約の形態は? () ・予算(謝礼等)は? () ・具体的に記入してください
プログラムの概要(基本的な考え方)	<input type="checkbox"/> 個別面接=父親が表出する場の設定を通して ・父親の立場での児童・夫婦・家庭状況の振り返り ・父親の理解の整理と気づきの強化 ・ストレス発散とエンパワーメント
内容(ワーク名/ねらい)	カウンセリング、心理教育的アプローチ、スキルトレーニング
回数(開催頻度)	継続的の設定(回数・頻度はケースに合わせて設定)
期間(1クール)	規定なし
開催場所	児童相談所・児童福祉施設、関係機関・ケース宅(家庭訪問)
開催時間(所要時間)	規定なし
期待できる効果	<input type="checkbox"/> 保護者グループとの連携の中で、再統合を目指す家庭へ多面的に関われる。 <input type="checkbox"/> 父親の変化への寄り添い。 <input type="checkbox"/> 夫婦関係へのアプローチ。
プログラム適用の時期(選択して下さい・複数回答可)	<input checked="" type="checkbox"/> 初期介入時 <input checked="" type="checkbox"/> 一時保護中 <input type="checkbox"/> その他(具体的に記入してください) <input checked="" type="checkbox"/> 施設等措置中 <input checked="" type="checkbox"/> 措置解除後
通常業務時間外(土日、夜間)の実施	必要に応じて検討
交通費等の支給等の参加者への配慮	なし
同時に行なうプログラム	保護者グループ
終了後に行なうプログラム	特定なものなし
導入のきっかけ	保護者グループが現状では対象を母親に限定しており、包括的な家族支援の効果をおねらう上では父親へのアプローチが不可欠であると考えられたため。
技法・技術をどこで習得したか	独自
導入に伴う準備(期間、費用等)	特になし
技術的な難易度(主観で) 100点満点で何点 1(とてもかんたん)～100(非常に難しい)	コメント等あれば記入してください <u>70点</u>
効果の実感/おすすめ度 100点満点で何点 1(おすすめできない)～100(超おすすめ)	コメント等あれば記入してください <u>100点</u> 保護者グループ参加ケースで、統合に向けて変化の見られるケースは、父親カウンセリングが軌道に乗っている場合が多く見られる。 変化が父母間で共鳴し合っている様子が観察されることがよくある。
課題/苦勞すること (選択して下さい・複数回答可)	<input type="checkbox"/> 技術的に高度である <input type="checkbox"/> 所内の理解を得るのが困難 <input type="checkbox"/> 対象者の選定が困難 <input type="checkbox"/> 予算の確保が困難 <input type="checkbox"/> 他機関との連携が困難 <input checked="" type="checkbox"/> その他(具体的に記入してください) 保護者グループほどは枠組みを構造化し難いので、定期的継続的な時間の確保には苦勞する
向いているケース	保護者グループ参加ケース(=再統合に向け交流を始めるor広げて行きたいと思っている保護者)
うまくいくためのポイント	虐待の場合、告知をしていること
備考	父親グループへの移行を模索したい

＜研究班としてのコメント＞

保護者グループ参加者(母親)の配偶者を対象としたプログラムである。家族をトータルに支援する上で必要な取り組みであり、父親と母親それぞれの変化が相乗効果を生む可能性を秘めている。いずれか一方の親への働きかけであると、もう片方の親が変化についていけずに、往々にして取り残されてしまうことがあるのだが、本プログラムは、父親へのフォローを行うことで家族全体の変化を促進すること、あるいは母親の変化を理解することに付き合うという意味合いを持たせている。父母に対して同じ場面で働きかける方法もあるが、それぞれに対して違う場面で働きかけることで、お互いの変化をワンクッションおいて理解することが可能であると思われる。

【事例番号17：三重県児童相談センター】

アウトライン編	
プログラム名	個別的援助
ベースとしている技法	行動療法等
実施主体	主催：児童相談センター
対象者	児童相談所や関与する個々の事例
個人／グループ人数	個人
体制（係わる職員）	（未記入）
プログラムの概要 （基本的な考え方）	<p>本県の地理的状況、人口規模等を考慮すると、再統合のための集団プログラムの実施は容易ではない。また、仮にプログラムが実施できても、導入技術の不足や資源対効果から見て、限られた資源を投入するほどの状況にはないと考えられる。</p> <p>このため、職員の資質を高め、行動療法等のエッセンスを個別的援助に活かすことが現実的かつ効果的と考えている。</p> <p>行動理論を背景としたプログラム（コモンセンスペアレンティングなど）もグループでやることはできるが、グループを集めること自体にエネルギーを費やされてしまうので、現時点ではワーカーなどがスキルや知識を身につける研修の意味合いで活用している。</p>
内容（ワーク名／ねらい）	現状では、十分に取り組みを行っているとは言えず、このような方向性を意識して、研修等を行っていくこととする。
（以下、未記入）	

実 際 編

<実績>

	実施回数	参加人数（実人数）	参加人数（延人数）
平成17年度	15	6人	90
平成18年度	15	5人	75
平成19年度（12月末現在）	15	8人	120

【事例番号21：大阪府子ども家庭センター（6か所）】

アウトライン編	
プログラム名	神戸少年の町版 コモンセンス・ペアレンティング・プログラム
ベースとしている技法	認知行動療法
実施主体	大阪府の6か所の子ども家庭センター
対象者	子どもの問題行動を抑えるのに、強制的なしつけ（暴力等）に依存し、それ以外のしつけの方法が取れず、その強制的なしつけが虐待、特に身体的虐待にまでエスカレートする保護者。
個人／グループ人数	個人
体制（係わる職員）	<p>■児童相談所単独</p> <p>各子ども家庭センターの児童福祉司、児童心理司が単独、もしくは複数で実施。</p> <p>CSPトレーナー養成講座及びスーパービジョンについては、社会福祉法人神戸少年の町（野口啓示氏）に実施を依頼。</p> <p>□他機関との協働：・どのような機関ですか？（ ） ・予算（謝礼等）は？（ ） ・契約の形態は？（ ） ・具体的に記入してください</p>
プログラムの概要（基本的な考え方）	<p>・児童虐待に直接関わる専門職を対象にした神戸少年の町版コモンセンス・ペアレンティング・トレーナー養成講座の修了者が実施する。</p> <p>・虐待の原因を親の精神的な問題に求めず、親と子の有害な相互関係上の問題と捉え、親の虐待行動エスカレーションサイクルをグッドサイクルに変化させることを目的としたプログラム。</p>
内容（ワーク名／ねらい）	<p>以下の9つのモジュールから構成される6回のプログラム。</p> <p>①わかりやすいコミュニケーション（行動の観察と表現）：子どもの行動を抽象的な言葉を使わずに、具体的に表現する方法を身につける。</p> <p>②良い結果・悪い結果（賞・罰）：行動の後の結果（親の対応）に注目し、子どもの良い行動を増やし、子どもの悪い行動を減らす方法を身につける。</p> <p>③効果的な誉め方：効果的に誉める方法を身につける。</p> <p>④予防的教育法：前もって、子どもの言っけさせる方法を身につける。</p> <p>⑤問題行動を正す教育法：子どもの問題行動に介入する方法を身につける。</p> <p>⑥自分自身をコントロールする教育法：子どもが感情的になって反抗したり、泣き叫んだり、すねたりといった親子の緊張が高まる場面での対処方法を身につける。</p> <p>⑦落ち着くヒント（怒りのコントロール法）：怒りをコントロールし、落ち着きを維持する方法を身につける。</p> <p>⑧子どもの発達と親の期待：親の子どもへの期待を整理しつつ、親の過剰な期待（認知の歪み）の修正を図る。</p> <p>⑨問題解決技法：5ステップの意思決定の方法から、具体的な問題解決の方法を身につける。</p>
回数（開催頻度）	月2回ペース
期間（1クール）	2～3ヶ月で終了
開催場所	子ども家庭センター（児童相談所）
開催時間（所要時間）	個別で実施した場合は約1時間
期待できる効果	<p>・プログラムの実施を通じて、子ども家庭センターに反発していた保護者が自分の虐待行為を振り返るなど具体的な話ができるようになる。</p> <p>・親子の行動面に焦点づけることにより、保護者の問題解決志向への変化が促されやすい。</p> <p>・ビデオで子どもへの関わりの良い例、悪い例を視覚的に示されることにより、親が自分の行動を客観視でき、見直さきっかけになる。</p>
プログラム適用の時期（選択して下さい・複数回答可）	<p>■初期介入時 ■一時保護中 □その他（具体的に記入してください）</p> <p>■施設等措置中 ■措置解除後</p>
通常業務時間外（土日、夜間）の実施	なし
交通費等の支給等の参加者への配慮	なし
同時に行なうプログラム	
終了後に行なうプログラム	
導入のきっかけ	虐待を防止するための親支援（教育）プログラムの実施の必要性から各センター職員が自主的にトレーナー養成講座を受講し実施していた。平成19年度から、「大阪府すこやか家族再生応援事業」の一環として、大阪府子ども家庭センターがトレーナー養成講座を実施。
技法・技術をどこで習得したか	児童虐待に直接関わる専門職を対象にした神戸少年の町版コモンセンス・ペアレンティング・トレーナー養成講座
導入に伴う準備（期間、費用等）	トレーナー養成講座の実施
技術的な難易度（主観で） 100点満点で何点 1(とてもかんたん)～100(非常に難しい)	<p>コメント等あれば記入してください</p> <p>80点</p> <p>虐待をしてしまう親への支援を実際に行っているケース担当者が、トレーナー養成講座を受講し具体的な指導法を学び、教材を使いながら実施できる。</p>
効果の実感／おすすめ度 100点満点で何点 1(おすすめできない)～100(超おすすめ)	<p>コメント等あれば記入してください</p> <p>90点</p> <p>プログラムを通じて子ども家庭センターに反発していた保護者が自分の虐待行為を振り返るなど具体的な話ができるようになり、支援の方向が明確になった。</p>
課題／苦勞すること（選択して下さい・複数回答可）	<p>□技術的に高度である □所内の理解を得るのが困難</p> <p>□対象者の選定が困難 □予算の確保が困難 □他機関との連携が困難</p> <p>■その他（具体的に記入してください）：プログラムの準備・実施の時間を確保すること。</p>
向いているケース	「しつけのために叩いた」という保護者に代表される、強制的なしつけ（暴力等）に依存し、それ以外のしつけの方法が取れず身体的虐待にまでエスカレートしてしまった保護者。
うまくいくためのポイント	（実践を積み重ねているところです）
備考	

実 際 編

<実績>

	実施回数	参加人数（実人数）	参加人数（延人数）
平成17年度～平成19年度（12月末現在）	個別に6回	15人	90人

<実施日程>

- ・児童虐待に直接関わる専門職を対象にした神戸少年の町版コモンセンス・ペアレンティング・トレーナー養成講座を修了した各子ども家庭センターの児童福祉司もしくは児童心理司が、担当ケースもしくは当該センターのケースに対して、個別に随時実施。

<実施場所>

- ・各子ども家庭センター

<実施内容>

- ・児童虐待に直接関わる専門職を対象にした神戸少年の町版コモンセンス・ペアレンティング・トレーナー養成講座を修了した各子ども家庭センターの児童福祉司もしくは児童心理司が、担当ケースもしくは当該センターのケースに対して、個別に随時実施。
- ・具体的には、5つのアクティビティ、①復習（前回習ったテーマのまとめ、1回目は導入となる）、②テーマの紹介（その日に取り上げるテーマに対する講義）、③モデリング（主にビデオを用いる。ビデオでは良い例、悪い例などのシーンが収録されており、具体的に学んでいくことが可能となる）、④ロールプレイとディスカッション（参加者同士での練習と話し合い）、⑤まとめ、で構成された、6回のプログラムを実施。

<スタッフの役割>

- ・保護者と、プログラム実施の目的を明確にし、終了するまで保護者のモチベーションを上げ参加できるよう支援する。
- ・6回のプログラムの各回のテーマについて講義を行い、主にビデオ教材を用いて具体的な子どもへの関わりの良い例、悪い例などのシーンを取り上げ、保護者の意見を聴きながら、強制的なしつけから、それ以外のしつけ（誉め、教えるといった肯定的なしつけ）について学べるように理解を促す。
- ・ロールプレイとディスカッションでは、ロールプレイを例示するなど参加者同士でのロールプレイを促し、良い例ができた場合は誉めて強化し、悪い例になったときは修正するなどの介入を行う。

<ケースの概要と導入の過程> 割愛

<特記事項>

<研究班の追記>

- すこやか家族再生支援事業という政策枠の事業費で行なっている事業である。いくつかの事業から成り立っており、一つの事業を2年間試行し、最終的に継続する必要がある事業についてはいくつか重要なものを予算要求していこうという計画である。効果測定についての課題はあるが、今回紹介されたプログラム以外では、「性的虐待への対応」「一時保護児への支援」「非行児のアセスメント」「対応困難保護者の分析」などがある。
- 再統合支援プログラムには、子ども家庭センターが直接行なうものと外部機関に委託するものがある。My TreeとCRCは委託している。コモンセンスペアレンティングは自前で行っている。My Treeなどは、100時間以上の研修を受けた人が条件となるなど専門性が高いため、児童相談所の職員がスキルを獲得するためにそこまでのエネルギーは割けない。また、児童相談所職員ではない人が行うプログラムなので、プログラム受講者の立場からすると被害体験を話しやすいという面もある。
- リスクアセスメントをする立場の人間が支援をする立場に回ると、どうしてもリスクアセスメントが甘くなってしまう。そのため深い支援には携わらない。コモンセンスペアレンティングなどは、一緒にビデオを見ながら、行動レベルの話題で助言や検討が行える。また、同時にアセスメントが行えるという利点もある。
- 再統合プログラムを外部機関に委託するに当たっては、まず児童相談所職員を対象としたプログラム内容等についての研修を実施してもらおう。その後、プログラム受講の候補者を選定し、プログラムを実施する委託機関の実践者と会ってもらおう。そして、納得の上で民民の契約をしてもらおう。実際には、プログラムの実施前や実施中に継続して受講してもらおうための援助が必要である。児童相談所で保護者の面接を行ったり、併行して、子どもに対してセラピーを行ったりしている。
- 児童相談所と委託先との情報交換については、個別に必要があれば随時連絡をしている。また定期的な情報交換の場として、中間、最終報告会を設定し、プログラム終了後の支援等を検討する。
- 委託を受けたプログラムの場合、臨床責任の所在が課題となっている。そのことによって、保護者が精神的に不安定になる、子どもとの関係が悪化する等の問題が発生した場合の対応について。とにかく、保護者が自分の意志で通うことを決めたということが大事。
- 再統合プログラムを委託するというのを考えた場合、まず児童相談所と保護者にはソーシャルワーク関係があって、委託はその上のものである。面会や外泊などは、ソーシャルワークの中で行われている。再統合プログラムを児童相談所独自で行うよりも委託した方が効率がよいという考えもある。リスクアセスメントを行う児童相談所と、保護者支援を行うところが別な方がいいという考えがある。

<研究班としてのコメント>

- 支援プログラムを他機関に委託する場合、そのポイントは2つに分けることができる。一つは、再統合プログラムを児童相談所が独自に行う上での効率性について、もう一つは、保護者支援の構造の問題である。支援プログラムを委託した場合、臨床責任の帰属先という新たな課題について直面することになる。事業を試行した上で効果を勘案し継続するかどうかを決めるということは、どのように効果を表すかということが重要になってくる。

【事例番号24：高知県中央児童相談所】

アウトライン編	
プログラム名	特になし
ベースとしている技法	
実施主体	高知県中央児童相談所
対象者	虐待のため親子分離（施設入所）中のケースで子どもの引取りを希望している親及び分離されている子ども
個人／グループ人数	個人
体制（係わる職員）	<input checked="" type="checkbox"/> 児童相談所単独 担当児童福祉司 担当児童心理司 保健師（ケースにより） <input type="checkbox"/> 他機関との協働 ・どのような機関ですか？ （ ） ・契約の形態は？ （ ） ・予算（謝礼等）は？ （ ） ・具体的に記入してください
プログラムの概要（基本的な考え方）	・親子分離はよりよい親子関係を構築していくための新たなスタートである、という共通認識をスタッフで持つ。 ・保護者を責めたりするのではなく、児童相談所はよりよい親子関係構築のため、子育て支援を行なっていこうとしていることを理解してもらう。
内容（ワーク名／ねらい）	・個別面接及び親子合同面接の実施。親には自身の養育が虐待行為であったとの認識を求め、改善に向けての行動変容を促していく。 ・子どもには安全で安定した生活環境の提供によりよいコンディションで、親との接触を重ねる中で新しい関係を築いていく。
回数（開催頻度）	月1～2回
期間（1クール）	ケースにより決める
開催場所	児童相談所もしくは施設の面接室
開催時間（所要時間）	1時間程度
期待できる効果	・自身の成育歴や配偶者との関係、これまでの子育てなどを語る中で、問題点に気づく。 ・改善した点をスタッフから認められ評価されることが自信を生み、より前向きな努力につながる。
プログラム適用の時期 （選択して下さい・複数回答可）	<input type="checkbox"/> 初期介入時 <input type="checkbox"/> 一時保護中 <input checked="" type="checkbox"/> 施設等措置中 <input type="checkbox"/> 措置解除後 <input type="checkbox"/> その他（具体的に記入してください）
通常業務時間外（土日、夜間）の実施	原則的には勤務時間内、必要に応じ時間外対応も行なう。
交通費等の支給等の参加者への配慮	なし
（以下、未記入）	

【事例番号5：神奈川県相模原児童相談所】

アウトライン編	
プログラム名	家族ダイプログラム
ベースとしている技法	家族療法
実施主体	神奈川県相模原児童相談所
対象者	虐待により家族分離中のケースで家庭引取りを基本的には希望している親子
個人/グループ人数	個人(ひと家族単位で実施)
体制(係わる職員)	<input type="checkbox"/> 児童相談所単独 <input checked="" type="checkbox"/> 他機関との協働 ・どのような機関ですか? (本児ら入所中の児童養護施設等) ・契約の形態は? (通常の業務連携の中で実施) ・予算(謝礼等)は? (なし) ・具体的に記入してください(児童相談所の再統合等担当の職員2人と施設の子どもの担当職員や主任(計3~4人)で行なっている)
プログラムの概要(基本的な考え方)	①家族で遊ぶ...虐待関係にある親子は家族で遊ぶのが上手ではない。お金を使ったり出かけることでなく、普通の家族の触れ合いをつくるような遊びを職員と一緒にやって行ない、家族の関係を促進する。そのため場所としては施設の和室や台所(他児が混入しない単独の家族交流室)を用いて擬似団欒ごっこをイメージして行なっている。 ②親面接...児童相談所の再統合担当の職員が地域担当福祉司とは異なる立場で再統合に向けて親の気持ちを聞き整理する。
内容(ワーク名/ねらい)	①家族関係のアセスメント...ワークの中に家族療法的なアセスメントを取り入れたアセスメントを行なう(例 合同家族画)。施設職員にも参加してもらい施設で見せる子どもの姿の違いを見てもらい、教えてもらうことで複数違う立場からのアセスメントを行い、家族理解を深める。 ②家族関係の促進...同上 ③親面接...同上
回数(開催頻度)	1回/1~3月
期間(1クール)	必要に応じて設定
開催場所	施設の家族交流室等
開催時間(所要時間)	・プログラム実施時間2時間(親面接+親子遊び) ・事前の準備や事後のカンファレンスを合わせて1時間
期待できる効果	・家族関係の促進 ・家族の資質の発見(児童相談所・施設側) ・再統合に向けての段階的な準備。或いは再統合は難しくても、家族が安定して安全な範囲で関わるができることの保障をする(家族関係の再構築)ことで、家族や子どもの安定につながる(親が無理な再統合を要求しなくなる)。
プログラム適用の時期(選択して下さい・複数回答可)	<input type="checkbox"/> 初期介入時 <input type="checkbox"/> 一時保護中 <input type="checkbox"/> 施設等措置中 <input type="checkbox"/> 措置解除後 <input checked="" type="checkbox"/> その他(具体的に記入してください) ケースバイケース
通常業務時間外(土日、夜間)の実施	休日
交通費等の支給等の参加者への配慮	なし
同時に行なうプログラム	
終了後に行なうプログラム	
導入のきっかけ	
技法・技術をどこで習得したか	実践を通して、或いは他県の児童相談所の実践を参考にして。
導入に伴う準備(期間、費用等)	児童相談所内担当福祉司や心理司、施設職員との打合せ
技術的な難易度(主観で)100点満点で何点1(とてもかんたん)~100(非常に難しい)	コメント等あれば記入してください 60~80点
効果の実感/おすすめ度100点満点で何点1(おすすめできない)~100(超おすすめ)	コメント等あれば記入してください 60~80点
課題/苦勞すること(選択して下さい・複数回答可)	<input type="checkbox"/> 技術的に高度である <input type="checkbox"/> 所内の理解を得るのが困難 <input type="checkbox"/> 対象者の選定が困難 <input type="checkbox"/> 予算の確保が困難 <input type="checkbox"/> 他機関との連携が困難 <input checked="" type="checkbox"/> その他(具体的に記入してください): 手間がかかる。しかし家族の色々なことが見えてくる
向いているケース	現在検証中
うまくいくためのポイント	事前準備を十分に
備考	

実 際 編

<実績>

家族デイプログラム単独では未統計

<実施日程>

略

<実施場所>

施設の家族交流室等（和室や台所）時には施設の園庭

<実施内容>

略

<スタッフの役割>

親と子、児童相談所（担当児童福祉司）と親、施設と親をつなぐ

<ケースの概要と導入の過程>

割愛

【事例番号2：東京都児童相談センター】

アウトライン編	
プログラム名	家族合同グループ心理法“おたまじゃくし” Family Joint Group therapy (FJG)
ベースとしている技法	親/子合同グループ方式(親子グループ+親グループ+子どもグループ)
実施主体	児童相談センター治療指導課
対象者	*被虐待を理由に分離中の子どもとその保護者 ・子どもの年齢は2歳～小6 ・養育が不適切であったと気づいている段階の保護者 ・親への恐怖心が軽減している段階の子ども *在宅の、虐待をしている保護者と子ども
個人/グループ人数	6～8家族
体制(保わる職員)	■児童相談所単独 外部の専門家(ソーシャルワーカー、心理職)と協同 □他機関との協働 ・どのような機関ですか?() ・契約の形態は?() ・予算(謝礼等)は?() ・具体的に記入してください 担当児童相談所とは別の場での実施ではあるが、児童相談所に属している組織という特徴を活かし、担当児相の親指導と密接に連携(定期的な協議、グループの欠欠や親子の状況の報告、役割分担など)して家族機能を高めていく。
プログラムの概要(基本的な考え方)	・家族全体を支え、具体的な行動レベルに治療的・教育的に働きかけ、親や子どもの内に持つ力に自ら気づき、それを強化するような支援。 ・親子グループ(親子遊び療法)と親グループと子どもグループを一体となっていくことにより、親子の愛着関係の改善を目指す。 ・担当児童相談所とは別の場で、民間の専門家と協同したグループでの支援：児童相談所とつなぐ役割もある。
内容(ワーク名/ねらい)	・親子グループ：同じ問題を抱えた親同士で気持ちを分かち合いながら、教育的・認知行動療法的アプローチをする。「認知の歪みへの気づき」「ペアレントトレーニング」「講義」 ・子どもグループ：自由な表現、行動のコントロール力、社会性の向上、「セカンドステップ」「集団活動療法」 ・親子グループ：「親子遊び療法」→愛着関係の改善、自己肯定感の獲得を目指す
回数(開催頻度)	11回(隔週土曜日)
期間(1クール)	6ヶ月
開催場所	児童相談センター
開催時間(所要時間)	プレミーティング 9:15～10:00 子どもグループ 11:00～12:30 15:00～16:30 親子グループ 10:00～11:00 14:00～15:00 アフターミーティング 13:00～14:00 17:00～18:30 親グループ 11:00～12:30 15:00～16:30
期待できる効果	・孤立感からの脱却、エンパワメント、安心感の回復 ・自尊感情の回復 ・子育て技術や知識を習得することにより、子どもへの怒りのコントロールができるようになる ・子どもへの認知の歪みが修正され、子どもの行動特徴を理解し、子どもの立場に立った見方ができるようになる ・親子がお互いを肯定的に眺められるようになり、親子関係(愛着関係)が改善する ・児童相談所や関係機関に助けを求められることができるようになる
プログラム適用の時期(選択して下さい・複数回答可)	■初期介入時 □一時保護中 □その他(具体的に記入してください) ■施設等措置中 ■措置解除後
通常業務時間外(土日、夜間)の実施	あり
交通費等の支給等の参加者への配慮	なし
同時に行なうプログラム	(必要に応じて)父親グループカウンセリング、母親グループカウンセリング、家族カウンセリング
終了後に行なうプログラム	家庭復帰後 「アフターケアのためのグループ心理療法」
導入のきっかけ	
技法・技術をどこで習得したか	実践を通して
導入に伴う準備(期間、費用等)	「虐待問題を抱える保護者と家族に対するケアと援助事業検討委員会」で検討(3ヶ月間)、試行(6ヶ月弱)
技術的な難易度(主観で)	60点 1グループの規模が大きくなると難度が上がる。チームワークが重要
効果の実感/おすすめ度	80点 予防(在宅支援)の段階から、分離家族に対する家庭復帰への支援、家庭復帰後の良好な家族関係の継続への支援の段階まで有効な方法である。家族病理が深い場合は、他の援助を加える必要があるため80点とした。
課題/苦労すること(選択して下さい・複数回答可)	□技術的に高度である ■所内の理解を得るのが困難 □対象者の選定が困難 □予算の確保が困難 □他機関との連携が困難 ■その他(具体的に記入してください) ・虐待のメカニズムの共通理解 ・地域でのケア機関が少ない ・早期の援助(早期発見・分離直後からの親と子どもの治療的援助の開始)
向いているケース	・身体的虐待、心理的虐待事例 ・親子の交流がある程度進んでいて、援助があれば半年から1、2年後に家庭復帰が見込まれるケース(親子の主眼的な対応を学び実践するプログラム) ・DV家族で、父親の虐待で分離した子どもと母との関係改善。 ・発達障害など、子どもの育てにくさが関与している虐待事例
うまくいくためのポイント	・グループが「安心できる居場所」になること ・親子が楽しく遊べること ・チームワーク
備考	・地域での養育の問題を抱える家族への支援にも有効 ・分離しないで家族維持するための支援にも有効 ・家庭復帰後の家族維持のための支援にも有効

実 際 編

<実績>

	実施回数	参加人数 (実人数)	参加人数 (延人数)
平成17年度	48	31家族	199家族(538人)
平成18年度	44	31家族	228家族(590人)
平成19年度 (12月末現在)	32	26家族	140家族(351人)

年間 50~60回 関係者協議、30~40回 個別面接、20~30回 子どもの個別面接

<実施日程>

午前・午後 2グループ実施

午前グループ：在宅家族中心(アフターケアを含む)
午後グループ：分離家族中心

午前		午後	
9:00~9:15	会場設営	14:00~15:00	親子グループ
9:15~10:00	プレミーティング(当日の予定、 役割分担、2週間のケースの動き等)	15:00~16:30	親グループ 子どもグループ
10:00~11:00	親子グループ	17:00~18:30	アフターミーティング
11:00~12:30	親グループ 子どもグループ		
13:00~14:00	アフターミーティング		

<実施場所>

親子グループ	} 児童相談センター研修室	親グループ	児童相談センター面接室
子どもグループ		ミーティング	児童相談センター会議室

<実施内容> 別紙1、2、3 (略)

※ きょうだいの保育も行なっている。

<スタッフの役割>

「グループを安全な場にして、親と子どもの自己評価を高める」

- ・児童相談センター 精神科医 (1)：グループ全体の統括、事前面接を含め、必要に応じた個別対応・個別面接
親及び親子関係のアセスメント
親グループのファシリテーター
- ・児童相談センター 児童心理司 (2)：親子グループ、子どもグループ、親子関係及び子どものアセスメント
担当児童相談所との連絡、親との連絡(お知らせの発送等)関係機関との
連絡協議の設定
- ・外部スタッフ グループ指導員 (1)：親子グループと子どもグループのリーダー
- ・外部スタッフ グループ指導員 (2)：親子グループと子どもグループの活動の提供
- ・外部スタッフ 臨床心理士 (2)：親子グループ、子どもグループ「セカンドステップ」
- ・外部スタッフ ソーシャルワーカー (1)：親グループ「ペアレントトレーニング」リーダー
- ・外部スタッフ 臨床心理士 (1)：親グループ「ペアレントトレーニング」サブリーダー
- ・ボランティア：親子グループ、子どもグループ、きょうだいの保育

<ケースの概要と導入の過程> 割愛

—ある日の様子— 別紙4 (略)

<特記事項>

- ・1クール半年間のプログラムであるが、ケースの必要に応じて、2クール利用する場合もある。分離していて家庭復帰する場合は、アフターケアとして1クール利用することを原則としているので、利用期間は半年~1年半とケースによって違う。
- ・児童相談所の中での実施の利点として、親や親子関係の回復のプロセスを担当福祉司と心理司と共有することで、児童相談所の臨床能力を向上することができる。

【事例番号3：東京都児童相談センター】

アウトライン編	
プログラム名	グループ“いいな”（母親グループ）
ベースとしている技法	MCG
実施主体	東京都児童相談センター治療指導課
対象者	・虐待を行なった保護者およびその配偶者 ・子どもの年齢は不問 ・虐待を否認している段階の保護者も対象
個人／グループ人数	3～6名／回、登録は16名
体制（係わる職員）	■児童相談所単独 非常勤職員1名（民間団体の相談員）と児相職員（家族再統合事業担当の児童心理司）2名で実施。 □他機関との協働 ・どのような機関ですか？（ ） ・契約の形態は？（ ） ・予算（謝礼等）は？（ ） ・具体的に記入してください
プログラムの概要（基本的な考え方）	・ファシリテーターが場の安全を確保しながらグループを進行していく自助的グループ ・民間の専門家がスタッフに加わることで、担当児童相談所とは別の立場で母親を支援し、親子関係の再構築を目指す場を作り出していく。
内容（ワーク名／ねらい）	同じような状況にある参加者が“いいな”の場集まり、守られた空間で自由に話をすることを通じて、①虐待に対する気づきや、自分の本当の気持ち・過去の体験との関係の気づき②自尊感情の回復③家族内の人間関係の変化を目指す。
回数（開催頻度）	2回／月（第1、3金曜日）
期間（1クール）	非限定
開催場所	東京都児童相談センター相談室
開催時間（所要時間）	グループは 13:30～15:00、必要に応じて午前または15時以降に個別面接
期待できる効果	①孤立感の軽減と自尊感情の回復。 ②守られた場の中で、自信や配偶者の虐待と直面し、認めることができるようになる。 ③内面の葛藤や自身の親との体験を振り返り言語化することで、虐待の背景への気づきを促す。 ④参加者同士やスタッフとのやりとりを通じて気づきがより促され、深められていく。 ⑤家庭引取り後も一定期間グループに通い続けることによって、虐待の再発を予防する。 ⑥担当児童相談所を含めた関連機関に対して、母の立場に立った情報提供を行い、よりの確なアセスメント、援助を目指す。
プログラム適用の時期（選択して下さい・複数回答可）	■初期介入時 ■一時保護中 ■施設等措置中 ■措置解除後 ■その他（具体的に記入してください） ざりざり在宅で支援している家族、一時保護後家庭引取りとなった家族も対象。
通常業務時間外（土日、夜間）の実施	なし
交通費等の支給等の参加者への配慮	なし
同時に行なうプログラム	必要に応じて、家族合同グループ（おたまじゃくし）父親グループ（やっほー）家族面接と併行
終了後に行なうプログラム	なし
導入のきっかけ	
技法・技術をどこで習得したか	児童福祉施設、児童相談所、民間相談機関等での実践を通して。他に各種講習会、勉強会等。
導入に伴う準備（期間、費用等）	
技術的な難易度（主観で） 100点満点で何点 1（とてもかんたん）～100（非常に難しい）	コメント等あれば記入してください <u>70点</u> 参加者に受容と共感を示す一方で、子どもを戻して安全かどうかの冷静な洞察が必要。また、口では「子どもを返して」と言っているが、内面では子どもへの強い拒否感、子育てへの強い不安等があることも。出欠状況他、非言語的なメッセージの読み取りも重要。
効果の実感／おすすめ度 100点満点で何点 1（おすすめできない）～100（超おすすめ）	コメント等あれば記入してください <u>60～70点</u> 母親自身の内面の成長に着目すると70点。しかし実際の養育行動、養育態度の変化で見ると60点か。虐待を否認している等重い状態の参加者も多く、効果はケースによって異なる。
課題／苦労すること（選択して下さい・複数回答可）	□技術的に高度である □所内の理解を得るのが困難 □対象者の選定が困難 □予算の確保が困難 □他機関との連携が困難 ■その他（具体的に記入してください） グループとしての暖かさを守りながら、一方で母子の安全を守るための洞察、判断力が求められること。
向いているケース	・母は引取りを希望しているが、関係者は再発を危惧しているケース。 ・配偶者の虐待が疑われているが、両親とも否認しているケース。
うまくいくためのポイント	・担当児童福祉司、養護施設職員等との連携 ・グループスタッフ間の連携と信頼関係
備考	

実 際 編

<実績>

	実施回数	参加人数（実人数）	参加人数（延人数）
平成17年度	24回	5	39
平成18年度	24回	8	63
平成19年度（12月末現在）	18回	12	65

<実施日程>

毎月第1、第3金曜日

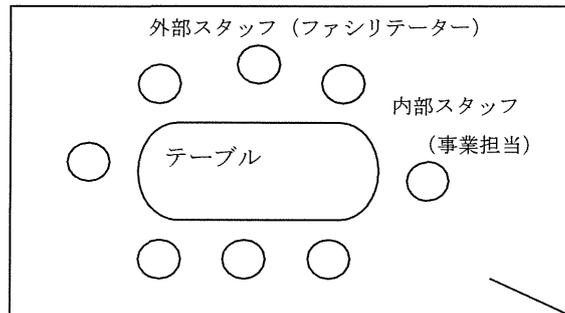
13:30～15:00 グループ

15:00～ アフターミーティング（グループスタッフ3名で）

*必要に応じ、午前またはグループ終了後に個別面接を実施。

<実施場所>

児童相談センターの相談室の一つを使用
（10名程度入れる大きさのもの）



<実施内容>

人の話の批判はしない、ここで聞いたことは外では話さない・・・というルールの下、一人ひとり順番にその時話したいことを話していく。

進行はファシリテーターが行ない、必要に応じて内容を深めるための質問やコメントもはさんでいく。話したくないときはパスすることも可能。

<スタッフの役割>

外部スタッフ（1名）：ファシリテーター

内部スタッフ：家族再統合事業担当児童心理司2名のうち交代で1名が同席。

サブファシリテーターとして、日常の連絡調整、当日の記録を担当。

<ケースの概要と導入の過程> 割愛

ーある日の様子ー

お茶を飲みながらグループ開始。まず、ファシリテーターが最近あったこと、思ったこと等話し、一人ずつ順番に話をしていく。他の参加者が耳を傾ける中、ファシリテーターは、時には質問をしたりコメントをしたり。1周目は「パス」と何も話せなかったDさんも、2周目になると、先週の面会のときの様子をポツリ、ポツリと話し始めている。2周したところで時間になり、この日は終了。参加者が帰った後も、振り返りのアフターミーティングや個別面接であわただしい時間は続いた。

<特記事項>

- ・適宜、関係者協議を実施。担当児童福祉司、担当児童心理司、児童養護施設職員等が集まり、親・子双方の状況、変化の様子等の情報を交換し、方向性や分担の確認を行なっている。
- ・インテーク面接時に、必要な場合には発言内容を担当児童福祉司に伝えることもある旨了承をとっている。

【事例番号15：神奈川県厚木児童相談所】

アウトライン編	
プログラム名	保護者グループ
ベースとしている技法	ファシリテータの経験をもとにした独自プログラム
実施主体	神奈川県厚木児童相談所
対象者	(1)虐待問題を抱えている親子分離ケースで子どもの引き取り希望のある保護者、及び保護者グループによる支援が有効と考えられる保護者。ただし現状では母親のみ。 (2)神奈川県所管5つの児童相談所において関わりのある者
個人/グループ人数	1～7名
体制（係わる職員）	<input type="checkbox"/> 児童相談所単独 <input checked="" type="checkbox"/> 他機関との協働 ・どのような機関ですか？（社会福祉法人子どもの虐待防止センター） ・契約の形態は？（委託契約） ・予算（謝礼等）は？（当所の規定による予算の範囲内） ・具体的に記入してください：虐待専門の民間団体の相談員1名と児童相談所の職員2名（親子支援チーム）が保護者グループ実施場面に同席し、保育が必要な場合には児童相談所の一時保護所職員が保育者として加わる。
プログラムの概要（基本的な考え方）	○虐待にかかる親子関係を改善し、家族を再統合する取り組み ○虐待行為に至ってしまった保護者の内面を取り扱う直接支援チャンネルのひとつ ○ファシリテータが一切の進行を取り仕切り、基本的には参加者の自由なやり取りの場ではない。 ○保護者の話を批判することなく聞く。
内容（ワーク名/ねらい）	○家族支援の視点と、保護者支援チャンネルの確保。 ○対立構造から支援構造への転換
回数（開催頻度）	月2回
期間（1クール）	規定せず。参加者個々の状況に合わせて判断
開催場所	児童相談所外の公共施設
開催時間（所要時間）	10:00～12:30（2時間30分）
期待できる効果	○より社会的場面で受容される体験を味わえること。 ○帰属感を得ることにより、孤立感を緩和すること。 ○集団において肯定的な受けとめがなされる中で、参加者の自尊感情を高めることができること。
プログラム適用の時期（選択して下さい・複数回答可）	<input checked="" type="checkbox"/> 初期介入時 <input checked="" type="checkbox"/> 一時保護中 <input type="checkbox"/> その他（具体的に記入してください） <input checked="" type="checkbox"/> 施設等措置中 <input checked="" type="checkbox"/> 措置解除後
通常業務時間外（土日、夜間）の実施	なし
交通費等の支給等の参加者への配慮	託児（保育）の準備あり
同時に行うプログラム	保護者グループ並行父親カウンセリング
終了後に行うプログラム	特定なものなし
導入のきっかけ	地域県政総合センター県民部の虐待対策総合推進事業に参入
技法・技術をどこで習得したか	児童相談所内に基盤が何も無かったため、民間団体の力を借りて行うこととした。
導入に伴う準備（期間、費用等）	3～4ヶ月；地域県政総合センター県民部への申請・調整、子どもの虐待防止センターとの調整
技術的な難易度（主観で） 100点満点で何点 1(とてもかんたん)～100(非常に難しい)	コメント等あれば記入してください <u>85</u> 点 臆することなく始めることが大切だと思いますが、とても奥が深い取り組みです。
効果の実感/おすすめ度 100点満点で何点 1(おすすめできない)～100(超おすすめ)	コメント等あれば記入してください <u>100</u> 点 これが無ければ、真の意味で再統合は完結しない、とまで感じます。
課題/苦勞すること (選択して下さい・複数回答可)	<input checked="" type="checkbox"/> 技術的に高度である <input type="checkbox"/> 所内の理解を得るのが困難 <input type="checkbox"/> 対象者の選定が困難 <input checked="" type="checkbox"/> 予算の確保が困難 <input type="checkbox"/> 他機関との連携が困難 <input checked="" type="checkbox"/> その他（具体的に記入してください）：参加者が一気には増えない
向いているケース	子どもとの関係を考えてみようかなと思っていて、児童相談所へ訴えている母親（誰でもO.K.である。参加継続できないことで、再統合に向けた意欲や迷いのスクリーニングも出来る）
うまくいくためのポイント	親に全面的に寄り添うが、児童相談所の交渉窓口にはならないこと。
備考	

＜研究班としてのコメント＞

児相と民間団体との協働ということで、保護者援助の構造に工夫が見られている取り組みである。一地域児相の取り組みであるが、県域全体の取り組みになるよう広がり期待したい。また、並行して行うプログラムとして父親に対する面接が設定されており、家族全体に対する支援という観点で行われている。

【事例番号25：横浜市中心児童相談所】

アウトライン編	
プログラム名	保護者グループ
ベースとしている技法	集団精神療法 (MCG)
実施主体	横浜市内の4児童相談所共同実施
対象者	原則として一時保護・施設入所等親子分離中のケースで引き取り希望のある母親
個人/グループ人数	数人
体制 (係わる職員)	<input type="checkbox"/> 児童相談所単独 <input checked="" type="checkbox"/> 他機関との協働 ・どのような機関ですか? (社会福祉法人子どもの虐待防止センター) ・契約の形態は? () ・予算(謝礼等)は? () ・具体的に記入してください: 虐待相談の民間団体「こどもの虐待防止センター」の相談員1名と、4児相の家庭支援担当専任福祉司のうち代表1~2名が行なっている。
プログラムの概要 (基本的な考え方)	児童相談所以外の第三者である専門相談員がファシリテーターをつとめるグループという位置づけにより、児童相談所との関係に課題があるケースにも支援を具現化する。親の立場に立つことを求められるため、直接のケース担当者はグループに参加せず、家庭支援担当専任福祉司が参加し、会場も児童相談所以外で設定する。
内容 (ワーク名/ねらい)	親子分離中の母親がこのグループに参加することによって、守られた安全な場で自由に話をする中で、グループの力をかりながら、親・家族の抱える課題に気づいたり、整理をしたりすることを目的とする。結果として家族再統合、家族関係再構築につながる事が期待される。
回数 (開催頻度)	月2回 (1回ずつ2カ所の会場で)
期間 (1クール)	定めない
開催場所	児童相談所以外の公的機関の面接室
開催時間 (所要時間)	14:00~ ケース、グループの状況によって1時間~1時間半。その後、スタッフミーティング
期待できる効果	・グループでは批判や評価をされないという安心感を母親が抱くことができるので、親支援の場として有効である。 ・参加者やスタッフとのやりとりや、他者の発言に耳を傾けることで、母親自身の気づきが生じることが期待できる。自らの子育てについての振り返りを行い、心の中にある葛藤を言語化するプロセスの中で、母親自身の成育歴における心の傷等未整理の課題が明らかとなり整理へとつながっていく。
プログラム適用の時期 (選択して下さい・複数回答可)	<input type="checkbox"/> 初期介入時 <input checked="" type="checkbox"/> 一時保護中 <input type="checkbox"/> その他(具体的に記入してください) <input checked="" type="checkbox"/> 施設等措置中 <input type="checkbox"/> 措置解除後
通常業務時間外(土日、夜間)の実施	なし
交通費等の支給等の参加者への配慮	なし
同時に行なうプログラム	
終了後に行なうプログラム	
導入のきっかけ	
技法・技術をどこで習得したか	
導入に伴う準備 (期間、費用等)	ファシリテーターとの打ち合わせやケース検討など1年ぐらいの準備期間が必要でした。
技術的な難易度 (主観で) 100点満点で何点 1(とてもかんたん)~100(非常に難しい)	コメント等あれば記入してください ___点
効果の実感/おすすめ度 100点満点で何点 1(おすすめできない)~100(超おすすめ)	コメント等あれば記入してください ___点 まだグループを立ち上げたばかりで、効果については今後の実績の中で明確になってくるものと思われまます。
課題/苦勞すること (選択して下さい・複数回答可)	<input type="checkbox"/> 技術的に高度である <input checked="" type="checkbox"/> 所内の理解を得るのが困難 <input checked="" type="checkbox"/> 対象者の選定が困難 <input type="checkbox"/> 予算の確保が困難 <input type="checkbox"/> 他機関との連携が困難 <input type="checkbox"/> その他(具体的に記入してください)
向いているケース	
うまくいくためのポイント	ケース担当福祉司と十分な情報交換を行ないながらすすめること。
備考	

実 際 編

<実績>

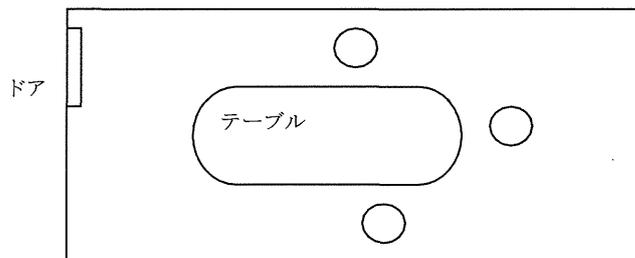
	実施回数	参加人数（実人数）	参加人数（延人数）
平成 17 年度			
平成 18 年度			
平成 19 年度（12 月末現在）	3	1	3

<実施日程>

- 14:00～15:00 グループの時間（参加者、ファシリテーター、家庭支援担当 1 名）
 15:00～ ・当日の振り返り（ファシリテーター、4 児相の家庭支援担当）
 ・今後の候補者についての打合せ、検討（ケース担当福祉司の参加もあり）
 ＊グループ導入のための事前面接をこの時間を実施する場合あり。
 振り返りや打合せについての時間は適宜調整

<実施場所>

児童相談所以外の公的機関の面接室で実施



<実施内容>

グループは月 1 回ずつ 2 つの会場で実施できるよう時間と場を確保している。市のエリアが広く、4 児相共同の事業であるため、どの地域からも参加しやすいよう 2 ヶ所とした。原則月 1 回どちらかの会場に固定で参加することを想定しているが、2 回参加も可としている。

時間はいずれも 1 4 時から。現在、立ち上げたばかりで、参加者 1 名であり、ファシリテーターと 4 所を代表し家庭支援担当ワーカーが 1 名の計 3 名でスタートしたところである。参加をしていない他の 3 所とも情報共有をするため、グループの後全員で集まり、振り返りを行ないながら進めている。

<スタッフの役割>

ファシリテーターは「こどもの虐待防止センター」相談員であり、児童相談所からは連絡・記録係ということで、直接のケース担当者ではなく、家族再統合に関わる部門の「家庭支援担当」専任児童福祉司が参加している。（まだ、参加者が少ないので 4 所を代表し 1 名が参加し、当日の記録を作成して 4 所に配る。また当日グループ後の振り返りには 4 所のスタッフが参加している）ファシリテーターと家庭支援担当は、親をケアする役割から、批判することなくありのままの母親の発言に耳を傾ける。一方、児童相談所担当福祉司にグループの様子を伝え、ケースの援助に生かすことができるよう情報共有につとめることも大切な役割である。

<ケースの概要と導入の過程> 割愛

ーある日の様子ー

母が入室した時、たまたま置かれていた虐待関係の本に目を留め、関心を示したことから、虐待についてかんたんな講義、やりとりを行う。

ファシリテーターから、「前回から今日までにあった事について話をして」と促され、面会時に泣かれてしまいイライラしたこと、どうしたらよいかわからず職員を呼んだことなどを話し、次に現在生活している寮での人間関係の悩みについて話す。一段落したところでファシリテーター、家庭支援担当福祉司が近況を話す。

次に母に順番が回り、肩こりについての悩みが話題になり、ファシリテーターが簡単な体操を教え、皆でやってみる。最後に感想を述べ合い終了。（約 1 時間）

その後この日は、事前面接が一件あり、1 時間かけファシリテーター、家庭支援担当福祉司が話を聞く。

その面接が終了した後、本日のグループ及び事前面接の振り返りを実施。（ここで他児相の家庭支援担当が合流）

次の打合せをして終了。

<特記事項>

<研究班としてのコメント>

始めたばかりの取り組みであるため、定期的な参加者が少なく、グループとして成立しない場合もあるようだが、常態場が用意されているということが参加者にとっては安心感につながるものであるため、しばらくの間は場を確保し場を育てるという意識で行うことが望まれる。

【事例番号23：大阪府中央子ども家庭センター・大阪府岸和田子ども家庭センター】

アウトライン編	
プログラム名	CRC ペアレンティング・プログラム
ベースとしている技法	
実施主体	大阪府中央子ども家庭センター 委託先：NPO チャイルド・リソース・センター
対象者	虐待をしてしまう保護者や子育てに困難を抱える保護者
個人/グループ人数	個人
体制（係わる職員）	<input type="checkbox"/> 児童相談所単独 <input checked="" type="checkbox"/> 他機関との協働 ・どのような機関ですか？（特定非営利活動法人チャイルド・リソース・センター） ・契約の形態は？（委託契約） ・予算（謝礼等）は？（ ） ・具体的に記入してください 子ども家庭センターが受付け、支援中のケースのうち、プログラム対象となる親に対しプログラムを紹介し、受けられるよう支援する。委託先の実践者は事前面接を行い、プログラム参加の目的について、センター担当者とともに確認した後、プログラムを実施。
プログラムの概要（基本的な考え方）	虐待をしてしまう保護者や子育てに困難を抱える保護者が育児に自信を持ち、わが子との適切な関わりを持つことができるよう、親子を支援する。
内容（ワーク名/ねらい）	①子ども家庭センター担当者より状況聴取 ②親子アセスメント2回（親へのインタビュー + 親子遊び場面の観察） ③親プログラム8～10回（親プログラム + 親子交流場面） ④フォロー1回
回数（開催頻度）	毎週（または隔週）で11回実施
期間（1クール）	個別の状況によって期間は異なるが、約5ヶ月間+プログラム終了2ヵ月後のフォロー
開催場所	子ども家庭センター（児童相談所）
開催時間（所要時間）	1時間半～2時間
期待できる効果	・「親子」を対象にしたプログラムであるため、直接親子関係の観察が可能であり、直接的な介入・具体的なモデリングができる。また、親の思い込みや主観的感情がその場で捉えられ、修正しやすい。 ・参加した親のほとんどが自分自身適切な養育を受けた体験がなく、子育てのイメージを持っていない。「子育てに何が必要か」を一緒に考える作業を通して、親が安心して子どもと自分の状態の振り返りができる。具体的な関わり方や知識について知ることができる。
プログラム適用の時期（選択して下さい・複数回答可）	<input type="checkbox"/> 初期介入時 <input type="checkbox"/> 一時保護中 <input type="checkbox"/> その他（具体的に記入してください） <input checked="" type="checkbox"/> 施設等措置中 <input checked="" type="checkbox"/> 措置解除後
通常業務時間外（土日、夜間）の実施	平日の午前、午後のみ実施。
交通費等の支給等の参加者への配慮	子ども家庭センター管轄地域のケースのため、配慮していない。
同時に行うプログラム	子どもを同伴している場合は保育を実施している。（無料）
終了後に行うプログラム	フォロープログラム
導入のきっかけ	すこやか家族再生応援事業の開始
技法・技術をどこで習得したか	さまざまな親支援プログラムの実践から習得
導入に伴う準備（期間、費用等）	事業開始年度のため、契約手続きや子ども家庭センター職員の研修、参加者の募集に5ヶ月ほどかかった。費用は委託料のみ。
技術的な難易度（主観で） 100点満点で何点 1(とてもかんたん)～100(非常に難しい)	コメント等あれば記入してください <u>90点</u> 親子関係をアセスメントするために観察するポイントや視点、親子場面での介入・モデリング技術、親とともに子育てに必要なことを振り返る支援の姿勢等きめ細かな配慮や専門性の点で難易度が高い。
効果の実感/おすすめ度 100点満点で何点 1(おすすめできない)～100(超おすすめ)	コメント等あれば記入してください <u>90点</u> 施設入所ケースの場合、親が面会に行っても子どもにどうかかわってほしいかわからない状況にあったが、プログラムでの親子遊びを通じて、子どもへの関わりができるようになり、子どもの安定もみられた。
課題/苦勞すること（選択して下さい・複数回答可）	<input type="checkbox"/> 技術的に高度である <input type="checkbox"/> 所内の理解を得るのが困難 <input type="checkbox"/> 対象者の選定が困難 <input checked="" type="checkbox"/> 予算の確保が困難 <input type="checkbox"/> 他機関との連携が困難 <input type="checkbox"/> その他（具体的に記入してください）
向いているケース	自分自身が適切な養育の体験を持たないなど自分の子育てに自信がなく、虐待をしてしまう保護者や子育てに困難を抱える保護者
うまくいくためのポイント	子ども家庭センター担当者がプログラム内容に合った保護者に対し、プログラムを受けられるよう支援し、受ける目的を共有すること。
備考	

実 際 編

<実績>

	実施回数	参加人数（実人数）	参加人数（延人数）
平成 17 年度			
平成 18 年度			
平成 19 年度（12 月末現在）		親 10 人 子ども 14 人	192 人

<実施日程>

- 1 回の流れ ① 親子交流（親子遊び）⇒ 親プログラム（子どもは保育を実施）
 もしくは
 ② 親プログラム（子どもは保育実施）⇒ 親子交流（親子でおやつ）

<実施場所>

子ども家庭センターの面接室及びプレイルーム
 乳児院面会室

<実施内容>

- ① 子ども家庭センター担当者とプログラム実践者とケース協議
- ② 親子アセスメント 2 回（親へのインタビュー及び親子遊び場面の観察）
- ③ 親プログラム 8 回～10 回
 - ・親プログラム（体験の振り返り・ミニレクチャー・ロールプレイ・次回までのチャレンジ）
 - ・親子交流場面（モデリング・フィードバック・親子をつなぐ）
- ④ フォロー 1 回

<スタッフの役割>

- プログラムを実践するスタッフは、特定非営利活動法人のファミリー・ソーシャルワーカーであり、以下の役割を担う。
- ・親子アセスメントでは、親へのインタビューや親子遊び場面の観察を通じ、親の子どもへのかかわり方や子どもへの理解について把握する。
 - ・親プログラムでは、親自身が課題と感じているテーマについて話し合い、一緒に「子育てに必要なことは何か」を考える作業を通じて親が安心して子どもと自分の状態を振り返りができるよう支援する。親子交流場面では、直接親子に介入し、具体的なモデリングを行い、その場で親の思い込みを修正する根拠や主観的感情を捉え、フィードバックする。
 - ・フォローの面接では、プログラムで得られた気づきや体験の定着を促す。
 - ・プログラム実施中に子ども家庭センター担当者と協議し、必要な支援について役割分担を行う。

<ケースの概要と導入の過程> 割愛

<特記事項>

【事例番号20：三重県児童相談センター】

アウトライン編	
プログラム名	MY TREE ペアレンツ・プログラム
ベースとしている技法	同上
実施主体	主催：児童相談センター、実施主体：エンパワメントみえ
対象者	児童相談所や市町が関与する事例については、個別に勧奨する。 新聞社への資料提供、市町保健センター等へのポスター掲示により、広く参加者を募集する。
個人/グループ人数	10人まで
体制（係わる職員）	<input type="checkbox"/> 児童相談所単独 <input checked="" type="checkbox"/> 他機関との協働 ・どのような機関ですか？（エンパワメントみえ） ・契約の形態は？（特に契約書は交わしていない。） ・予算（謝礼等）は？ （1日15,000円×ファシリテーター3名×プログラム等回数、旅費は別途） ・具体的に記入してください：エンパワメントみえのファシリテーター3名が実施する。プログラム間のフォローや託児のスタッフについては、児童相談センターが行う。
プログラムの概要（基本的な考え方）	別添報告書参照
内容（ワーク名/ねらい）	別添報告書参照
回数（開催頻度）	
期間（1クール）	
開催場所	（児童相談所ではない県庁舎の和室等）
開催時間（所要時間）	別添報告書参照
期待できる効果	別添報告書参照
プログラム適用の時期 （選択して下さい・複数回答可）	<input type="checkbox"/> 初期介入時 <input type="checkbox"/> 一時保護中 <input type="checkbox"/> その他(具体的に記入してください) <input type="checkbox"/> 施設等措置中 <input type="checkbox"/> 措置解除後
通常業務時間外(土日、夜間)の実施	なし
交通費等の支給等の参加者への配慮	なし
同時に行うプログラム	関与事例については、個別援助を行う。
終了後に行うプログラム	関与事例については、個別援助を行う。
導入のきっかけ	
技法・技術をどこで習得したか	職員は必要ない
導入に伴う準備（期間、費用等）	9月～12月に実施しているが、参加者募集やリユニオンを含めれば年間を通して実施しているに等しい。 費用 約100万円（職員経費を除く）
技術的な難易度（主観で） 100点満点で何点 1(とともかんたん)～100(非常に難しい)	コメント等あれば記入してください <u>30点</u> 県内1会場での開催は、参加者集約に困難が多い。児童相談所関与事例をプログラムに導く動機付けの技術が不足している。
効果の実感/おすすめ度 100点満点で何点 1(おすすめできない)～100(超おすすめ)	コメント等あれば記入してください <u>60点</u> 対象者が多様で、一概には言えない。現状では、動機付けが不足しており、プログラム後半へのしわ寄せ感がある。
課題/苦勞すること （選択して下さい・複数回答可）	<input type="checkbox"/> 技術的に高度である <input type="checkbox"/> 予算の確保が困難 <input type="checkbox"/> 所内の理解を得るのが困難 <input type="checkbox"/> 他機関との連携が困難 <input type="checkbox"/> 対象者の選定が困難 <input type="checkbox"/> その他(具体的に記入してください) 上記、採点のコメントに記載のとおり。
向いているケース	分析できていない
うまくいくためのポイント	どのようなタイプの事例に、どのような勧奨、動機付けが効果的だったのか、参加後はどうか、修了後はどうか、など事例を積み上げ分析する必要性を感じる。
備考	

<研究班の追記>

○再統合支援プログラムについては、グループを組織できる規模の児童相談所ではないので基本的には個別対応になっている。その中でMY TREEは児童相談センターが広く呼び開けて参加者を募り、民間団体の協力により行なっているグループのプログラムである。対象者としては児童相談所のケースは一部いるものの、在宅の方の子育て支援レベルというケースが多い。しかし、次年度からは施設措置児童の保護者を対象とした取り組みに変えていく計画である。ただ、MY TREEが再統合プログラムとして有効であるかの検証はできていない。

MY TREEはプログラム自体も実施方法もしっかりと決められているため、受講者にとっての負担は大きい。具体的には1週間に1度の頻度で15回前後通うことが必要である。また、実践者がスーパーヴァイズを受けることも必須であるため、現時点では実践可能なエリアに限界がある。

○行動理論を背景としたプログラム(コモンセンスペアレンティングなど)もグループでやることはできるが、グループを集めること自体にエネルギーを費やされてしまうので、現時点ではワーカーなどがスキルや知識を身につける研修の意味合いで活用している。

○三重県の場合、NPOとの関係は児童福祉の分野に限らず比較的進んでいる。基本的な考えで合意できる場合は今後も一緒に行なっていく思いはある。

<研究班としてのコメント>

○ケースマネジメントを児童相談所が行なう中で、一つの再統合支援プログラムは単独で存在するのではなく、保護者支援の潮流があり、その流れの中で存在するという位置づけが必要と思われる。保護者支援という「地」にある一つの「図」というイメージの中で行なわれることが重要と思われる。各々のプログラムが効果的に機能するためにも、次のサービスにつなげる取り組みにすることが課題と思われる。

MY TREEペアレンツ プログラム報告書

エンパワメントみえ

はじめに

MY TREE ペアレンツ プログラム（以下マイツリー）は、平成17年度から三重県と市民団体（エンパワメントみえ）との協働事業として行なっている。

本年は2年目にあたり、昨年度の経験を活かし、より質の高いプログラムの提供を心がけた。

虐待をする親の多くは、さまざまな傷つき体験、低い自己肯定感、孤立などさまざまな問題を抱えていることが多い。

そのため親に対しては、親自身の心のケア、自己肯定感、より良い人間関係作りなどにも配慮されたプログラムが必要である。

このプログラムへの参加が、親側から子どもへの虐待を防止できることの一つになるであろう。

I. MY TREE ペアレンツ プログラムとは

MY TREE ペアレンツ プログラム（以下マイツリー）は、子育てに困難さを感じている親、子どもに体罰を行なってしまう親、子どもの心と体にダメージをあたえてしまっていると感じている親のための「回復支援プログラム」である。

マイツリーは、2001年に森田ゆり氏（エンパワメント・センター主宰）によって開発され、1年半の試行実践の後、2003年から近畿圏でプログラムがスタートした。2006年度には三重、大阪の6グループにより実施された。

1 プログラムの目的

このプログラムの目的は、①セルフケア ②問題解決 があげられている。具体的には、参加者が：

- ・安心して、自分、子ども、家庭の問題を語れる帰属できる場を持つ。
- ・呼吸法、リラクゼーション、簡単な気功、太極拳動作などを学ぶことによって、身体、思考、感情のハーモニーと自己コントロール法を得る
- ・自分について新しい気づきを得る。
- ・子どもが内に持たたくさんの力に気がつく。
- ・子どもにダメージを与える子育ての習慣（体罰、脅し、いじめ、侮辱、過剰な期待、過剰な保護）を脱学習する。
- ・体罰に代わるしつけの方法、コツ、アイデアを学び、練習する。
- ・感情表現、コミュニケーションスキルを学び、練習する。
- ・虐待、体罰による子どもへの関わりを意識的に終止する。

2 プログラム構成

このプログラムは、13～15回のセッション（三重県は、15回）と、3ヵ月後、6ヵ月後にリユニオン（同窓会）が行なわれる。（図1参照）

プログラム実施時間は1回につき2時間半を必要とし、「まなびのワーク」「じぶんをトーク」「フォロータイム」の3部構成になっている。

(1) 「まなびのワーク」(50～60分)

ファシリテーターの進行で「しつけと体罰」、「気持ちの本」（いずれも森田ゆり著・童話館出版）のテキストを使い、「体罰はなぜいけないのか」、「体罰に代わる方法」や「聴き方・話し方」などを具体的に学ぶ。

また、毎回宿題を課すが、強制ではない。

「まなびのワーク」は、3つのパートに分けることができる。

a) アイスブレイク

参加者の緊張を解きほぐすための、短いゲームや簡単なテーマについて話し合いをする。特に初めの頃は、参加者の緊張は最大であるため、簡単な課題をゆっくりと行なう必要がある。

b) リラクゼーション

アイスブレイク終了後、全員でおお向けに寝て（部屋は和室を使用）リラクゼーションを行なう。ゆったりとした音楽を流し、ファシリテーターの指導で、丹田呼吸、イメージワーク、エネルギーボールなど15分くらい行なう。最初の頃は、リラクゼーションに対して極度に緊張したり、リラクゼーション自体を拒否する参加者もいた。しかし、呼吸法などの要領がつかめてくると、緊張が高まったとき、怒りが湧き上がったときなど自主的に呼吸法を行ない、感情のコントロールに役立っていた。

c) まなびのワーク

テキストを使い、その日の課題にそってファシリテーターが進めていく。テキストを参考にしながら、実際に参加者が体験した同じ場面について話し合ったり、どのように行動するのがより良い結果を得ることができるか、など

を学んでいく。

(2) 「じぶんをトーク」(60~70分)

参加者が自由に自分について語る。その日行なった課題、自分の悩み、感じていることなどを自由に話してもらう。その際、ファシリテーターはタイマーを使い、時間を等分にして参加者に話してもらう。このとき、参加者が一方的に話すのではなく、ファシリテーターが適切なコメントを返していく。

(3) 「フォロータイム」(30分)

「まなびのワーク」で理解が十分でなかったり、「じぶんをトーク」で話し足りない、話せなかったと感じたりした場合、また相談のある場合に残って話をする時間としている。

(4) 「緊急電話相談先」

緊急連絡先は参加者がこれまで関わりのあった市町の相談機関、児童相談センター、信頼できる民間の電話相談を紹介した。

エンパワメントみえでは、個人との依存関係にならないために、相談は受け付けないことを原則としている。

(5) 個人カウンセリング

参加者の中には、個人的にカウンセリングを受けている人もいた。個人的に受けることに制限はない。

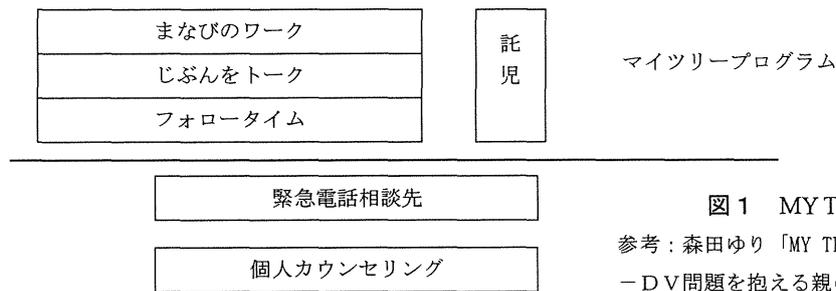


図1 MY TREEペアレンツプログラム
参考：森田ゆり「MY TREEペアレンツプログラム-子どもの虐待-
-DV問題を抱える親の回復支援-」子どもの虐待とネグレクト

3 目的と約束事

参加者全員がマイツリープログラムを安心して受け、より効果を高めるために、①目的をはっきり明示し、②約束事(ルール)を決めた。

目的は、「I-1プログラムの目的」を簡潔に紙に書き、参加者の見えるところに貼っておき、毎回セッションの最初に参加者と確認した。

約束事は、以下のとおりである。(目的と同様に壁に貼った)

「尊重」 あなたのどのような発言も尊重する。そしてあなたも他の人を尊重すること。

「守秘」 ここで話されたことは、この部屋の外へは持ち出さない。

例外が2点。より良いアドバイスをするため、個人が特定できないよう配慮し、スーパーバイザーの森田ゆりに助言を求めることがある。また、あなたと家族だけで子どもの安全が守れないと判断したとき、あなたに児童相談センターに相談することを勧め、そのための力になる。

「正直」 自分の気持ちに正直に「Iメッセージ」で話す。

「出席」 休まないで参加する。

「時間」 限られた時間なので、時間は守る。



～子育てに苦しさを感じている親のための～

MY TREE ペアレンツ・プログラム

「子育てにしんどさを感じている」「気がつけば子どもをたたいている」「子どもを無視してしまう」

「このままではどうなってしまうのかとても不安」そんなあなたを大切に作るプログラムです。

少人数での語り合いを中心とした、支え合いのグループです。

参加者の秘密は厳守されます。安心してご参加ください。お待ちしております。

日時・内容(木曜日 1時半～4時フォロータイム30分含む) + リユニオン(同窓会)

1	2006年	9月7日	顔合わせ
2		14日	安心な出会いの場：目的、約束事、身体ほぐし
3		21日	安心な出会いの場：私の木
4		28日	わたしのエンパワメント
5		10月5日	親と子のエンパワメント
6		12日	気持ちを聴く
7		19日	気持ちを語る
8		26日	体罰の6つの問題
9		11月2日	感情のコントロール
10		9日	<中間面接>
11		16日	やってみよう新しいしつけの方法
12		30日	自己肯定間：否定的ひとり言の排除
13		12月7日	自分をほめる、子どもをほめる
14		14日	母親らしさ 父親らしさ
15		21日	MY TREE
16	2007年	3月15日	3ヶ月後リユニオン
17		6月14日	6ヵ月後リユニオン

場所：三重県津庁舎（JR・近鉄津駅から徒歩15分/バス5分 近鉄江戸橋駅から徒歩10分）
 人数：10名
 費用：受講費無料 託児費無料（事前に申し込んでください）締切：7月20日（木）
 申し込み先：郵送/〒511-8799 桑名郵便局止め エンパワメントみえ（7/1～7/20）
 電話/090-6071-7690（留守電の場合、お名前、連絡先をお知らせください）
 テキスト：「しつけと体罰」「気持ちの本」（いずれも森田ゆり著 童話館出版）
 主催：三重県〔協働〕
 実施団体：エンパワメントみえ<MY TREE ペアレンツ プログラムは、森田ゆり氏によって開発され、100時間のトレーニングを受けたスタッフが提供します>

II. 参加者について

対象者は、重篤な精神疾患はないが、子育て不安、孤立、生きること全般への自信のなさ、伴侶との関係の悪さ、未解決の傷つき体験などを背景に子どもを虐待している人。また、虐待行為の認識が本人にあるなしに関わらず、援助を受けることに拒否的でない、もしくは、何らかの強制力のもとでは拒否的でない人としている。

また、対象外としては、①社会経済的な問題により家庭生活全般が破綻している例、②深刻な精神疾患があり入院が必要とされている例、③支援に対して非常に攻撃的、暴力的である例、④性虐待の加害者、としている。

1 募集方法

募集については、2006年4月に2日間、2会場で児童相談センター主催で保健師を対象に、マイツリーについての説明と報告、募集の呼びかけをした。その後、三重県下の公共施設に実施内容を印刷したチラシを置いた。また、新聞各紙で募集を呼びかけた。（下表参照）

マイツリープログラム開催までのスケジュール（2006年）

月日	内容
4.12	マイツリー説明会開始
18	市町村保健師を対象に松阪市、四日市市で説明会を開催
6.中旬	広報：市町村、保健センター、県庁記者クラブ、桑名市NPO活動ニュース、まちのかわら版(桑名市)、CAPNA(愛知県)、NHK津放送局
7.20	第1回申し込み締切。引き続き呼びかけ募集は行う。
8.初旬	電話スクリーニング
8.中旬	面接
8.下旬	参加者決定
9.7	プログラム開始

(1) 参加申し込み状況

	県内	県外	計
問い合わせ	9名	2名	11名
参加申し込み	8名	0名	8名
電話スクリーニング	8名	0名	8名
面接	7名	0名	7名
参加決定	8名	0名	8名
最終参加者	5名	0名	5名

- a) 電話スクリーニング：参加の申し込みを電話で受けた後、参加の意思、家庭環境、子どもの年齢などを尋ねる電話をし、プログラム参加可能かどうかをスクリーニング〔所定の用紙を使用）する。そして面接の約束をする。
- b) 面接：もう一度、参加の確認、参加を決めた理由などを聞く。スクリーニングと面接によって、参加者を決定する。

(2) 出席状況（2006年）

月日	出席者	欠席者	欠席理由	託児
9.7	5名	3名	1名が参加取りやめ	2名
14	4名	3名		3名
21	4名	3名		2名
28	4名	3名		3名
10.5	5名	0名	2名が参加取りやめ	3名
12	4名	1名		2名
19	5名	0名		3名
26	4名	1名		3名
11.2	4名	1名		3名
9	5名	0名		3名
16	5名	0名		3名
30	5名	0名		3名
12.7	4名	1名		2名
14	4名	1名		2名
21	4名	1名		2名
3.15	3名	2名		2名

(3) 参加者への配慮

個人名は明かさない。「マイツリーネーム」というプログラム時のみ使う名前を各自考えてもらい、プログラム期間中使用する。抗うつ剤などを服用している参加者もいるので、開催時間は午後にし、プログラム開催中は、自由にお茶が飲めるようにした。欠席をした場合は、次回30分早く来てもらい、補習をする。

Ⅲ. 託児について

安心して参加してもらうために、託児を設けた。児童相談センターより保育士が1～2名派遣された。また、託児の人数によっては養護教諭有資格者をサポートとして依頼した。託児については、1対1を確保し、保育士と子ども、母親との信頼関係を築くことができた。保育士にも、毎回の事後ミーティングに参加してもらい、子どもの様子、母親の子どもへの接し方などの報告をもらった。専門家に子どもを見てもらえる安心感、子どもへの適切な働きかけは参加者の大きな安心となった。

Ⅳ. プログラム実施団体について

このプログラムは、三重県児童相談センターとエンパワメントみえの協働事業として行なわれた。なお、プログラムの進行は、エンパワメントみえのスタッフ3名で行なったが、毎回セッション終了後に、託児スタッフ、エンパワメントみえのスタッフ等とで、その日の振り返り、気づいた点などについて、プライバシーに配慮しながらミーティングを行なった。

Ⅴ. ファシリテーターについて

マイツリーのプログラムは、「MY TREEペアレンツ プログラム」実践者養成講座他、100時間以上の研修を受けたファシリテーターが実施する。毎回、複数〔2～3名〕のスタッフで記録をとり、直後にフィードバックを行なった。また、プログラム実施中は、森田ゆり氏による参加者へのコメント研修、全体スーパービジョン、グループ別スーパービジョンなどの研修を行なっている。

VI. 中間面接

参加者とは9回目に、個別に中間面接を行なう。この面接の目的は、参加者がプログラムをどう受け止めているかを把握して、これからのグループにおける実践者からその人へのかかわりに役立てる。面接は、参加者一人に対して実践者一人で行なう。このとき、質問事項はあらかじめ決まっており、そのフォームに従って進めていく。面接の際の主な意見を以下に記す。これらの意見は、昨年度とほぼ同じであった。参加者全員が、「安心の場を得た」と評価していた。参加者全員が、何らかの良い変化を感じている。自分自身の変化が遅い事に焦りを感じている。みんなは出来ているのに、自分は出来ないと不安を感じることもある。託児に関しては、「子どもたちが楽しみにしている」、「子どもが良く変わった」など、利用者の非常に高い評価を得た。

VII. 終了後アンケート

プログラム終了後2週間以内に、参加者にアンケートを取る。アンケートはプログラム最終回に参加者に渡し、郵送してもらおう。なお、アンケートについては、匿名で事業報告などに使用することの同意を得ている。

アンケート結果（抜粋）

1. MY TREEペアレンツプログラムへの参加によって、あなたの生活にドメスティック・バイオレンスのような変化が生まれましたか？あなた自身のこと、子どもさんとの関係についてお聞かせください。

【I. 子どもとの関係】

- ・口で言います。暴言にならぬよう。私はこんなに困っているんだ、こんなに思っているんだ、と。声を大にして（←大声ではない）言うときがふえた。
- ・これからも、今まで教えていただいたことを思い出し、勉強していきたいです。

【II. 自己肯定感】

- ・今は、昔と比べると、少しは自分のことも大切に思って、行動していると思うし、子どもの意見も聞いて、見守る子育てをしようと努力しています。

【III. 孤立感】

- ・自分自身の努力で本音を語れる親友を近くに作っていきたい。

【IV. 感情調整】

- ・子どもはストレート、直球を受け止めてばかりでしんどいかも…。
- ・これは本当にむずかしいです。

【V. コミュニケーションのスキル】

- ・主人には助けを求めることができるが、それ以外にできないのが少々辛いです。
- ・自分の気持ちを言葉で伝えることができるようになった。

【VI. セルフケア】

- ・子どもにあたってしまう原因が子ども以外にあることがわかるようになった。

【VII. 問題解決】

- ・子どもをおじいちゃん、おばあちゃんに預けることなんて考えたこともなく、一人でがんばってきた。無認可のところには預けたが、安心なんてしてなかった。いつも何かおきるのでとは考えていた。一人で必死になって、意地になって子育てしてきたみたい。ふー、しんど。
2. MY TREEペアレンツプログラムに参加したことは、あなたにとってどんな意味がありましたか？参加してよかったこと、あなたが得たものはなんですか？
- ・自分に気がついた。何に対して怒っているのわかりました。
 - ・自分を認めるということ。
 - ・子どもを受け入れる気持ちになった。
 - ・同じようなことで悩んでいる人が他にもいるということ。
 - ・自分の気持ちを自分の言葉で表現する習慣。
 - ・子どもとの関係でとてもとてもたいへんな時期がありました。そのときは、子どもが原因と思っていました。けど、MY TREEに参加したおかげで本当の原因がわかり、とても心が楽になった。気づけたことに本当に心より感謝しています。
3. 最後まで参加できたのはなぜでしょうか。
- ・母親のような場所（どんな意見も尊重される）で、息がぬけたこと。
 - ・場が暖かいものであったので頑張ろうとおもった。

- ・自分をさがしたかった。みつけたかったから。なかなかみつからなかったから。今もみつからない。家族と話をすることで少しずつ少しずつみつかるかな？どうかな？
 - ・少しでも変わりたいと思ったから。これからの人生をどう生きるのかを立ち止まって考えなきゃいけないと切に思ったから。それからスタッフの方たちのお人柄かな。
4. ワークの中で、あなたが心に残った場面や、覚えておきたい言葉はありましたか？
- ・全てです。
 - ・まあまあの母親
 - ・まあまあの母親が一番、最良の母親
 - ・条件なしの信頼
 - ・焦らずに見守る大胆さ
5. これからのあなたの課題は、何だと思いますか？
- ・物事を否定的、悲観的にとらえないようにすること。
 - ・子どもと向き合いつつも、まあまあの母親で子育てをする。
 - ・家族の中のストレス要因
6. ほかに、なにか伝えたいことがありましたら、自由にお書きください。
- ・最終日はどうなることやらと、前日からドキドキでした。
 - ・心に残ったことのみが「大切なこと」。忘れてしまうようなことはそれだけのこと。でも、このワークはかなり心のこりました。本当です。
 - ・私は強いたくましさを持った MY TREE ペアレンツ(尊重、共感、正直)みたいな母親になりたいと思っています。

今回のアンケートは、1の部分の記述部分が非常に少なく、言葉による本人の変化がわかりにくいのが残念だった。しかし、評価を数字で申告している部分では、プログラム開始前と後ではすべての数値で同じか良い数値に変化していた。しかし、2からのアンケートに関しては積極的に記述が見られた。

もうひとつ注目すべき点は、テキスト「しつけと体罰」の中に出てくる『最良の母親とは、まあまあの母親である』（児童精神科医ドナルド・ウィニコット）共感する参加者が多く、この部分がプログラム中参加者側からよく話題にでてきた。なおこのアンケート結果は、3ヵ月後のリユニオンで参加者全員に配布した。

VIII. 3ヵ月後リユニオン

リユニオンとはマイツリー終了後、3ヵ月後と6ヵ月後に行なう同窓会のことである。今回3ヵ月後のリユニオンでは、1人が都合により欠席、1名が夫の転勤のため欠席となった。プログラム修了することにより、不安を訴える参加者もいたが、無事に参加することができた。今までの経過を互いに報告しあい、次回6ヵ月後リユニオンとして、6月の再開を約束した。

VIII. 6ヵ月後リユニオン

18年度のリユニオンは6月のためまだ報告はできないが、前年度の6ヵ月後リユニオンについて報告する。

3ヶ月と同様、これには決められた課題はなく、参加者が再び顔を合わせ、プログラム終了後の自分のこと、新しく始めたこと、新たな悩みなど、お茶を飲みながら報告をする。時間は2時間程度を目安としている。6ヶ月経つと、それぞれが子どもとの関係も改善され、新たな生活を送るようになっていた。そこには「セルフケア」と「問題解決」を無意識のうちに使っていることが、参加者の報告によって感じられた。

IX. 考察

三重県でマイツリーを開催したのは昨年度に続き2年目であった。そこで、昨年度の課題等を振り返り、今回プログラム開催にあたり出てきた評価される点、課題について考察したい。

1 参加者募集について

募集の難しさは、昨年度の経験から覚悟はあった。本年度も各方面の協力を受けながら参加者を募った。

参加は自らの意思で行なうことが条件であり、プログラムの効果を高めるためには必要不可欠となっている。そのため、参加を促す場合には事前にプログラムの詳しい説明が必要となる。今回も、プログラムの開催日を勘違いし、参加できなくなった参加者がいた。保育園のチラシを見て参加を決めた母親もいたので、今後も保育園、幼稚園での募集に留意する。

2 開催場所について

昨年度から引き続き、津市内の交通の便の良い場所を会場にした。県内各地から通いやすい、参加の秘密が守れる、リラクゼーションができる十分なスペース、15 回続けて借りられる、託児室が声の聞こえない程度に離れているという条件をほぼ満たしている。

3 協働の意義

児童相談センター等からの紹介による参加者については必要な場合に限り情報を交換できたという利点があった。(もちろん、それ以外の参加者については守秘のルールを厳守)

また、三重県が主催という点で、プログラムへの信頼度が高くなったといえる。実践は専門の市民活動団体ということから参加者は安心できたであろう。もうひとつ特記すべき点は、参加者の緊急時の相談先として児童相談センターがあるということが、実践者側でも安心して紹介できることである。

4 参加者の中途退会について

今回、3名の退会者がいた。理由としては、「子どものケガの通院とプログラム参加が両立できない」、「月一回の開催だと思っていた」など。参加決定の前に説明をしたつもりであったが、不十分であったと思われる。今後はこのようなことがないように、さらにプログラムの説明に注意をしたい。

5 その他

プログラムを終了した参加者には、「修了書」とスーベニールを渡している。これは、プログラムを修了したという記念の意味もあるが、何かあったときにこの品を見て、「15回がんばったんだ」という気持ちを思い出してもらおうこと。それと同時に、自分が学んだことを思い出してもらうためである。なお、「修了書」については、プログラムでは特に義務づけられてはいない。

おわりに

今回参加者が少なく、「グループダイナミクスが起きるかどうか」にファシリテーターの関心が集中した。中盤までは大きな動きは見られず、参加者それぞれが自分の問題と向き合い、課題を見つけていくというスタイルだった。しかし、中間面接を終えてから、突然グループダイナミクスが起きた。内に向いていた関心が、他者の発言、体験にも関心を寄せると同時に、自分の問題を「違う視点に立って考える」ということができるようになると、参加者の著しい変化が見られるようになった。このことより、ひとつずつプログラムをこなし、参加者の個々の力をつけることにより、たとえそのグループが少人数であっても、グループダイナミクスは期待できると推測される。

[引用・参考文献]

- 森田ゆり, MY TREE ペアレンツ プログラム実践者養成講座テキスト, ASSIST, 2004
 森田ゆり, しつけと体罰, 童話館出版, 2003
 森田ゆり, ドメスティック・バイオレンス: 愛が暴力に変わるとき, 小学館, 2001
 森田ゆり, 子どもの虐待とネグレクト, 6 ; 83-89 2004
 G・ヘンドリックス+R・ウィルズ(手塚郁恵訳), センタリング・ブック, 春秋社, 1990
 ウィリアム・フェズラー (井辻朱美訳), イメージ・ワークブック, VOICE, 1992
 高田明和, 「病は気から」の科学, BLUE BACKS, 1989
 田中美津, いのちのイメージトレーニング, 筑摩書房, 1996
 ディーパック・チョプラ(秘田涼子訳, 上野圭一監訳), クォンタム・ヒーリング, 春秋社, 1990
 堀井恵, 子ども、親子、夫婦の問題を解決する, 東洋出版, 1999

【事例番号22：大阪府子ども家庭センター（6か所）】

アウトライン編	
プログラム名	MY TREE ペアレンツ・プログラム
ベースとしている技法	エンパワメント、ホーリスティック、ソマティックなアプローチ
実施主体	大阪府中央子ども家庭センター 委託先：特定非営利活動法人 子育て運動えん
対象者	意思疎通が困難なほどの重篤な精神疾患や、入院を要する緊急な状況にはないが、子育て不安、孤立、生きること全般への自信のなさ、伴侶との関係の悪さ、PTSD症状、未解決の傷つき体験などを背景に子どもを虐待、ネグレクトしている。虐待行為の認識が本人にあるなしに関わらず、援助を受けることに拒否的でない人。（参加者の性別は混在させない。子育て不安はあるが、虐待していない親は対象としない。）
個人／グループ人数	10人前後の親（子どもを同伴する場合は無料保育を提供）
体制（係わる職員）	<input type="checkbox"/> 児童相談所単独 <input checked="" type="checkbox"/> 他機関との協働 ・どのような機関ですか？（特定非営利活動法人 子育て運動えん） ・契約の形態は？（委託契約） ・予算（謝礼等）は？（ ） ・具体的に記入してください 子ども家庭センターが受付け、支援中のケースのうち、プログラムの対象となる親に対し紹介し、受講できるよう支援する。委託先団体は、事前面接を行い、受講意思を確認した後、プログラムを実施する。
プログラムの概要（基本的な考え方）	子どもを虐待している親を対象とした、少人数の固定メンバーによる15回のグループミーティング。「まなびのワーク」と「じぶんをトーク」を通して自分と子どもをより深く知り、受け入れていく過程をすすみながら、不適切なしつけの習慣を脱学習し、子どもへの関わりを変えていくことを意図した、第3次防止（被害者、加害者の治療と家族の回復）の回復支援プログラム。
内容（ワーク名／ねらい）	まなびのワーク：グループの力動を起こす参加型学習をファシリテーターが進める。 じぶんをトーク：時間を等分にして、いくつかの約束事を守りながら参加者が自分のことについて語る。ファシリテーターが適切なコメントを適切な時に短く返すことで変化を促進する。 フォロータイトム：希望者またはファシリテーターが必要と感じた人に対し、会合直後、個別に話をきく時間。 プログラム開発者のスーパービジョンを受けながら実施する。
回数（開催頻度）	毎週（または隔週）同一の曜日と時刻、場所で、15回提供される。
期間（1クール）	4ヶ月間 + 3ヵ月後リユニオン（同窓会）
開催場所	公的機関の貸室
開催時間（所要時間）	2時間半
期待できる効果	「セルフケア」と「問題解決力」をつけることにより、子どもへの虐待を終始する。 具体的には、参加者がプログラムへの参加を通して、「安心して自分、子ども、家庭の問題を語ることができる場を持つ」「自分について新しい気づきを得る」「子どもが内に持つさまざまな力に気づく視点を得る」「感情表現、コミュニケーションスキルを学ぶ」「体罰に代わるしつけの方法を学ぶ」ことにより、自分と子どもの存在の大切さへの気づきを深めながら、子どもを力づくで思い通りにしようとする習慣を変えていけるようになり、虐待、体罰による子どもへの関わりをやめることができる。
プログラム適用の時期（選択して下さい・複数回答可）	<input checked="" type="checkbox"/> 初期介入時 <input checked="" type="checkbox"/> 一時保護中 <input type="checkbox"/> その他（具体的に記入してください） <input checked="" type="checkbox"/> 施設等措置中 <input checked="" type="checkbox"/> 措置解除後
通常業務時間外（土日、夜間）の実施	プログラムは平日の昼間であるが、参加者からファシリテーターへの緊急連絡については休日夜間も連絡できる。
交通費等の支給等の参加者への配慮	参加者の家庭状況によって配慮している。
同時に行なうプログラム	子どもを同伴している場合は無料保育を提供している。
終了後に行なうプログラム	リユニオン（同窓会）
導入のきっかけ	すこやか家族再生応援事業の開始
技法・技術をどこで習得したか	森田ゆり氏の開発したプログラムを実践するファシリテーター養成講座にて習得。
導入に伴う準備（期間、費用等）	事業開始年度のため、契約手続きや参加者の募集に5ヶ月ほどかかった。費用は委託料のみ。
技術的な難易度（主観で）	コメント等あれば記入してください
100点満点で何点	90点
1(とてもかんたん)～100(非常に難しい)	徹底した尊重、エンパワメントにもとづいたグループの力動の活用、ファシリテーション・スキル、コメント力の技術は、徹底したスーパービジョンにもとづくものとする。
効果の実感／おすすめ度	コメント等あれば記入してください
100点満点で何点	90点
1(おすすめできない)～100(超おすすめ)	孤立し、未解決の傷つき体験をもち、生きることに対する自信のない参加者が、自分と子どもを尊重するようになる変化は大きい。
課題／苦勞すること（選択して下さい・複数回答可）	<input type="checkbox"/> 技術的に高度である <input checked="" type="checkbox"/> 所内の理解を得るのが困難 <input checked="" type="checkbox"/> 対象者の選定が困難 <input checked="" type="checkbox"/> 予算の確保が困難 <input type="checkbox"/> 他機関との連携が困難 <input type="checkbox"/> その他（具体的に記入してください）
向いているケース	生きることへの自信のなさが周囲とのコミュニケーションをさまざまに、選択肢をせばめていた親（実際には、チラシのコメントを呼んで受講を希望する親）
うまくいくためのポイント	プログラムを受講するまでの過程で、さまざまな課題が解決できるよう具体的に支援すること。

実 際 編

<実績>

	実施回数	参加人数（実人数）	参加人数（延人数）
平成17年度			
平成18年度			
平成19年度 （12月末現在）	15回	5人 （プラス4人）	67人 （プラス32人）

<実施日程>

13:30～16:00 プログラム実施（同伴する子どもについては保育を実施）

1時間 まなびのワーク

1時間 じぶんをトーク

30分 個人フォロータイム

16:00～

ファシリテーターのミーティング

プログラム実施期間中に数回子ども家庭センター担当者とのミーティングを実施

<実施場所>

子ども家庭センター（児童相談所）以外の公的機関の和室を使って実施。

<実施内容>

- ・まなびのワーク：ファシリテーターの進行による参加型の学習。
- ・じぶんをトーク：時間を等分にして、いくつかの約束事を守りながら参加者が自分のことについて語る。
- ・フォロータイム：希望者またはファシリテーターが必要と感じた人に対し、会合直後、個別に話をきく時間。

<スタッフの役割>

ファシリテーターは、森田ゆり氏の開発したプログラムを実践するファシリテーター養成講座を修了しているNPO法人のスタッフが担当。参加前の初期面接は、児童相談所ワーカーから紹介後、ファシリテーターが担当する。参加型の学習となる「まなびのワーク」では、ペアでの語りやアクティビティを取入れ、繰り返し段階的に進行する。時間を等分にして、いくつかの約束事を守りながら参加者が自分のことについて語る「じぶんをトーク」では、個々の語りの後に、主として語り終えた当人と他の参加者の気づきを引き出し、グループエンパワメントを促進させる目的で、ごく短い適切なコメントを発信する。また、希望者またはファシリテーターが必要と感じた人に対し、会合直後、個別に話をきく。プログラム中頃の「気持ちを語る」が終了し、次の回から「体罰の6つの問題性」に入る際に、参加者全員の個別面接を行う。積み重ねのワークなので欠席がないように、適時電話入れや必要な場合は送迎など、出席に結びつけることも大きな役割。欠席時は翌週開始時刻よりも早く来てもらい補講で対応する。

<ケースの概要と導入の過程> 割愛

<特記事項>

<研究班のコメント>

- プログラムは児童相談所以外の公的機関の和室を活用しているが、①強権機能を持つ児童相談所とは距離を置く、②くつろげる雰囲気づくりという点で参考となる。

【事例番号26：大阪市中央児童相談所】

アウトライン編	
プログラム名	お父さん子育て塾
ベースとしている技法	認知行動療法、ナラティブセラピーなど
実施主体	立命館大学院との共同研究
対象者	虐待をしてしまった、子どもとうまくいかないなど子育てに悩みを持つ父
個人/グループ人数	10人まで
体制（係わる職員）	<input type="checkbox"/> 児童相談所単独 <input checked="" type="checkbox"/> 他機関との協働 ・どのような機関ですか？（立命館大学院） ・契約の形態は？（研究助成金） ・予算（謝礼等）は？（研究段階のためなし） ・具体的に記入してください
プログラムの概要（基本的な考え方）	男性ばかりのグループに男性のファシリテータがグループを進行するワークを通して、男性がブロックしている感情表現や、自分の弱みに気づくことや、子どもの立場にたつとどう感じるのかに気づき、効果的なコミュニケーションの取り方を学ぶなどのサポートをしていく
内容（ワーク名/ねらい）	感情に気づく 感情を受け入れる 行動の問題点への気づき 行動を変える 非暴力的人間関係を理解する 非暴力的人間関係を実践する
回数（開催頻度）	月2回 土曜日 午後実施 平成18年10月からから20年度までが研究期間
期間（1クール）	
開催場所	大阪市立の児童福祉施設のプレイルーム
開催時間（所要時間）	午後1時半から3時半（2時間）
期待できる効果	男性が感情表現を曝る、怒鳴るという方法ではなく、言葉で表すことを可能にする 子どもとのコミュニケーション力が向上する 虐待が起こる構造に気づく
プログラム適用の時期（選択して下さい・複数回答可）	<input type="checkbox"/> 初期介入時 <input type="checkbox"/> 一時保護中 <input type="checkbox"/> 施設等措置中 <input type="checkbox"/> 措置解除後 <input type="checkbox"/> その他（具体的に記入してください）：さまざまな時期で紹介している
通常業務時間外（土日、夜間）の実施	土曜午後
交通費等の支給等の参加者への配慮	なし
同時に行なうプログラム	個人カウンセリングを併用している人あり
終了後に行なうプログラム	
導入のきっかけ	男性向けのプログラムを探していたところで、DV加害男性のグループを知り、ファシリテータである立命館大学院の教員にお願いをした
技法・技術をどこで習得したか	ファシリテータがオーストラリアやアメリカの男性へのアプローチを学んでいた
導入に伴う準備（期間、費用等）	大学院 教員との連絡調整
技術的な難易度（主観で） 100点満点で何点 1(とてもかんたん)～100(非常に難しい)	コメント等あれば記入してください <u>90点</u> 男性を対象にしたグループのファシリテートと、そのなかにさまざまなワークが入っているものであり、習得はなかなか難しい
効果の実感/おすすめ度 100点満点で何点 1(おすすめできない)～100(超おすすめ)	コメント等あれば記入してください <u>90点</u> 男性に対するプログラムは少ないので、もし参加が継続すれば、効果はかなりのものであると考える
課題/苦勞すること (選択して下さい・複数回答可)	<input checked="" type="checkbox"/> 技術的に高度である <input type="checkbox"/> 所内の理解を得るのが困難 <input checked="" type="checkbox"/> 対象者の選定が困難 <input type="checkbox"/> 予算の確保が困難 <input type="checkbox"/> 他機関との連携が困難 <input checked="" type="checkbox"/> その他（具体的に記入してください） 現在のファシリテータ以外でできる人がいない。 土曜でも仕事の人が多いうえ、勧めてもなかなか参加まで至らない。
向いているケース	父親で行動を変えるために何かしたいという人 今の状態がよくないと気づいている人
うまくいくためのポイント	
備考	共同研究段階で、今後事業化していくかを検討中。 児相とは別で行っているということを参加者には伝えている。

実 際 編

<実績>

お父さん子育て塾

	実施回数	参加人数 (実人数)	参加人数 (延人数)
平成17年度			
平成18年度	12回	22名	
平成19年度 (12月末現在)	18回	7名	

<実施日程>

ちらしを参照。

<実施場所>

大阪市立の児童福祉施設のプレイルームを利用

<実施内容>

3名の男性のファシリテーターと参加者
「感情カード」を使った感情に気づくワークなど

<スタッフの役割>

ワークのファシリテート、スタッフの考え方や経験を話す
こともある
記録の役割

<ケースの概要と導入の過程> 割愛

—ある日の様子—
グループには、見相職員は同席しておらず、一定の独立を
保っているの、記入できず

<特記事項>

資 料 編

父親の子育て進化論！！子育てについて語って見たら、お父さん！！

お父さん子育て塾

～子育て上手な父親になりませんか？～

父親の子育てについて考えてみませんか？ 父親が子育てに向き合う時代、より父親の育児参加を豊かなものにするために、『こうすればもっとうまくいく子育て』父親のためのパワーアップ講座です。「父親の子育て」について男同士で語りあってみませんか？ 自分育てから始める父親の子育て講座です。参加者の秘密は厳守されます。ぜひご参加ください。お待ちしております。

日時：2007年10月13日～2008年3月15日

土曜日 午後1時30分から3時30分

会場：大阪市立児童院

(大阪市西区立売堀4丁目10番18号 阿波座センタービル2F)

日程表

第1回目	10月13日	第7回目	1月12日
第2回目	10月20日	第8回目	1月26日
第3回目	11月10日	第9回目	2月2日
第4回目	11月17日	第10回目	2月16日
第5回目	12月8日	第11回目	3月1日
第6回目	12月22日	第12回目	3月15日



地下鉄 阿波座駅4番出口 東へ徒歩1分

定員：10名程度 (定員になり次第締め切ります)

申込方法：児童相談所の担当者までご連絡下さい 電話 (06) 6797-6520

開始後の連絡先：児童院 TEL：(06) 6531-9000 担当 宮井

【事例番号27：大阪中央児童相談所】

アウトライン編	
プログラム名	MY TREE ペアレンツ・プログラム
ベースとしている技法	森田ゆり氏が開発したもの
実施主体	NPO法人 子育て運動 えん に委託
対象者	虐待をしまっているが、なんとかそれをやめたいと思っている母
個人/グループ人数	グループ 10人
体制（係わる職員） ファシリテーターが 3名 グループ中の保育スタッフ 3名	<p>■他機関との協働</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どのような機関ですか？（子ども関係のNPO） ・契約の形態は？（委託） ・予算(謝礼等)は？（約133万円） ・具体的に記入してください
プログラムの概要（基本的な考え方）	「セルフケア」と「問題解決力」を回復することで、虐待行動の終止を目的とする
内容（ワーク名/ねらい）	<まなびのワーク>と<じぶんをトーク>からなる2時間と<個別フォロータイム>
回数（開催頻度）	14回のグループは週1回のペースで約3ヶ月間続けて行われる。その後、3ヶ月後にふれかえりとして1回のミーティングがある。
期間（1クール）	3ヶ月 + 1回
開催場所	児童相談所以外の大阪市内の公共機関の和室
開催時間（所要時間）	午後1時半から4時
期待できる効果	
プログラム適用の時期 (選択して下さい・複数回答可)	<input type="checkbox"/> 初期介入時 <input type="checkbox"/> 一時保護中 <input type="checkbox"/> 施設等措置中 <input type="checkbox"/> 措置解除後 <input type="checkbox"/> その他(具体的に記入してください)
通常業務時間外(土日、夜間)の実施	平日 火曜午後に実施
交通費等の支給等の参加者への配慮	なし
同時に行なうプログラム	個人カウンセリングを受けている保護者は、同時に実施
終了後に行なうプログラム	
導入のきっかけ	3年前から地域レベルで行われていたものを見相で取り入れることになった
技法・技術をどこで習得したか	森田ゆり氏のもとで技法を習得したファシリテーターにお願いしている
導入に伴う準備（期間、費用等）	委託契約、NPOとの連絡調整
技術的な難易度（主観で） 100点満点で何点 1(とてもかんたん)~100(非常に難しい)	<p>コメント等あれば記入してください</p> <p><u>85</u> 点</p> <p>ファシリテーターはこのプログラム実施にあたり、全力で対応している。</p>
効果の実感/おすすめ度 100点満点で何点 1(おすすめできない)~100(超おすすめ)	<p>コメント等あれば記入してください</p> <p><u>70</u> 点</p> <p>開催が年1回なので、結びつけるタイミングが難しい</p>
課題/苦勞すること (選択して下さい・複数回答可)	<input type="checkbox"/> 技術的に高度である <input type="checkbox"/> 所内の理解を得るのが困難 <input checked="" type="checkbox"/> 対象者の選定が困難 <input checked="" type="checkbox"/> 予算の確保が困難 <input type="checkbox"/> 他機関との連携が困難 <input type="checkbox"/> その他(具体的に記入してください)
向いているケース	親自身がこれではいけないという思いを持っており、変わりたいと希望している。過去の被虐待歴などから、自分を嫌だと思っている人。
うまくいくためのポイント	見相とNPOの連絡調整
備考	


 実際編

<実績> MY TREE ペアレンツ・プログラム

	実施回数	参加人数(実人数)	参加人数(延人数)
平成17年度			
平成18年度	1回(15回)	7	
平成19年度(12月末現在)	1回(15回)	10	

<実施日程>

ちらしを参照。

<実施場所>

公共機関の和室を使用。

子どもの保育は近くの保育所に併設されている地域子育て支援センターで実施。

<実施内容>

保育の必要な人は、保育場所に子どもを預ける手続きをする。

プログラム終了後、子どもを迎えに行き、スタッフから子どもの様子を聞く。

約10人の親 + 3人のファシリテーター毎週または隔週で15回

<まなびのワーク>と<じぶんをトーク>からなる2時間と<個別フォロータイム>

<スタッフの役割>

まなびのワーク時には、説明と親と子の役割を演じて示す、じぶんをトーク時には参加者の発言を通じて、グループをファシリテーションしていく、記録をとる役割もあり

<ケースの概要と導入の過程> 割愛

—ある日の様子—

グループには、児相職員は同席しておらず、一定の独立を保っているので、書けない

<研究班としてのコメント>

民間の相談支援機関との協働での実施であるが、児童相談所からプログラム実施機関へ上手に橋渡しすることが大きなポイントとなろう。その際、参加者のモチベーションを持続させることもプログラムの効果に大きく影響するものと思われる。

【事例番号28：大阪市中央児童相談所】

アウトライン編	
プログラム名	クッション-怒りのコントロールを学ぶ
ベースとしている技法	認知行動療法
実施主体	民間相談機関 セラピスト
対象者	カッとなって子どもを怒鳴ってしまう、たたいてしまうことに悩んでいる母
個人/グループ人数	グループ 10人まで
体制(係わる職員)	<p>■他機関との協働</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どのような機関ですか? (民間の心理相談機関のセラピスト) ・契約の形態は? (報償費) ・予算(謝礼等)は? (1回 半日8100円) ・具体的に記入してください
プログラムの概要(基本的な考え方)	コントロールされない親の怒りや体罰が子どもに及ぼす否定的影響について学び、怒りについて学ぶ。怒りをコントロールする方法を学ぶ。
内容(ワーク名/ねらい)	<ul style="list-style-type: none"> ・怒りについて学ぶ ・怒りをコントロールする方法を学ぶ ・怒りを強める思考について考えてみましょう ・怒りを強める思考を別の思考に置き換えてみましょう ・怒りの前提条件に対処しましょう ・怒りを引き起こす状況を変えましょう ・怒りの感情に対処しましょう ・怒りの行動に対処しましょう ・怒りをぶつけてしまったら、謝りましょう
回数(開催頻度)	年間3回 実施
期間(1クール)	2週間に1度、8回(4ヶ月間)開催
開催場所	児相以外の公共機関(保育室あり)
開催時間(所要時間)	午後1時半から4時
期待できる効果	親の子どもへの怒りをコントロールする手助けとなる方法を学び、虐待を防ぐ
プログラム適用の時期(選択して下さい・複数回答可)	<input type="checkbox"/> 初期介入時 <input type="checkbox"/> 一時保護中 <input type="checkbox"/> 施設等措置中 <input type="checkbox"/> 措置解除後 <input type="checkbox"/> その他(継続指導中、子育ての電話相談のなかで、必要性のあると相談員が勧めた人)
通常業務時間外(土日、夜間)の実施	なし
交通費等の支給等の参加者への配慮	なし
同時に行なうプログラム	
終了後に行なうプログラム	
導入のきっかけ	具体的、段階的に子育てに役立つプログラムを探していたため
技法・技術をどこで習得したか	民間セラピストが習得していたもの
導入に伴う準備(期間、費用等)	セラピストへの報償費、保育の有償ボランティアへの謝礼
技術的な難易度(主観で) 100点満点で何点 1(とてもかんたん)~100(非常に難しい)	<p>コメント等あれば記入してください</p> <p><u>60</u>点</p> <p>認知行動療法をベースにした技法とグループワークの力が必要</p>
効果の実感/おすすめ度 100点満点で何点 1(おすすめできない)~100(超おすすめ)	<p>コメント等あれば記入してください</p> <p><u>60</u>点</p> <p>ニーズがあり、実際に使ってみようとする人には効果が高いと思う</p>
課題/苦勞すること(選択して下さい・複数回答可)	<input type="checkbox"/> 技術的に高度である <input type="checkbox"/> 予算の確保が困難 <input type="checkbox"/> 所内の理解を得るのが困難 <input type="checkbox"/> 他機関との連携が困難 <input checked="" type="checkbox"/> 対象者の選定が困難 <input type="checkbox"/> その他(具体的に記入してください)
向いているケース	子どもに怒ってばかりというのが良くないことも分かっている。でも、どうしても怒ってしまう。いったいどうしたらいいのかと悩んでいる親
うまくいくためのポイント	
備考	

実 際 編

<実績> クッション

	実施回数	参加人数 (実人数)	参加人数 (延人数)
平成17年度			
平成18年度	24	9	72
平成19年度 (12月末現在)	18	10	95

1から10

「子どもに切れてしまいそうなとき」というテキストに従って、プログラムを実施
参加者がみな話せるようにファシリテーターが配慮し、グループワークを進行する

<実施日程>

ちらしを参照。

<スタッフの役割>

同上

<実施場所>

公共機関の研修室を使用。

子どもの保育は館内の保育室において実施。

<ケースの概要と導入の過程> 割愛

—ある日の様子—

グループに見相は同席しておらず、一定の独立を保っている。そのため、具体的な様子については記入できない

<実施内容>

保育の必要な人は、入り口で子どもを預ける手続きをする。
ファシリテーター2人と参加者がテーブルを囲んで座る。
前回までに怒りをどの程度コントロールできたかを、数値で示す。

<特記事項>

♪クッショングループご案内♪

子どもについてイライラして叩いてしまう、傷つく言葉を吐いてしまうことはありませんか？
自分の行動が子どもの将来に悪い影響を及ぼしてしまうのではという不安と罪悪感を抱えて悩んでいませんか？ 子どもへの対応が良くないのはわかっている、どうしても変えることができない。そんな場合には、自分の怒りをコントロールする方法を学ぶことが役に立ちます。

このグループでは行動を変えるのに即効性がある認知行動療法を使って、怒りをコントロールすることを目指します。臨床心理士やグループのメンバーと共にキレない子育てを学び、親としての自信を高めていきましょう。

◆ お問い合わせ：大阪市中央児童相談所 06-6797-6520

◆ 場所：子育ていろいろ相談センター 06-6354-4152

2008年度 第1期(4月～7月)の日程

◆ 日時：原則として第2・第4木曜日 14時30分～16時
センターの都合上、変更になることがあります

□ 料金：テキスト代1,000円

「子どもにキレてしまいそうなとき」(三学出版)

□ 対象：子どもにイライラしたり怒りをぶつけてしまって困っている親御さん

□ その他：事前に、児童相談所スタッフとの面接があります。

第1回目 4月10日(木)オリエンテーション

第2回目 4月24日(木)不適切な怒りが子どもに与える影響を学びましょう
リラクゼーションを身につけましょう。

第3回目 5月8日(木)適切な、子どものしつけ、叱り方を学びましょう

第4回目 5月22日(木)怒りを引き起こす状況を変えましょう。

第5回目 6月12日(木)怒りの感情と行動に対処しましょう。

第6回目 6月26日(木)怒りを強める思考に対処しましょう。

第7回目 7月10日(木)怒りの前提条件に対処しましょう。

第8回目 7月24日(木)怒りの後—怒りをぶつけてしまったら。まとめ。



※保育あり(無料)

担当：窪田容子・下地久美子

【☆グループのルール☆】

★ 毎回参加していただける方がよいのですが、参加できない時には、事前にお知らせください

★ グループの信頼・安心感を保つことは非常に重要です。グループの一般的なことについて家族や友達と話すのは構いませんが、プライベートに関する話は話さないようにしてください

★ グループに関することについては外で話し合わずに、グループの中で話し合うようにしましょう

【♪話し合いのルール♪】

♪ 人の話は中断しないで、最後まで聞きましょう。

♪ 自分がどう感じたかを表現することを大切にしましょう。

♪ 自分がしゃべりたくないときは、だまっけていてもかまいません。

♪ 質問は自由ですが、中傷や批判はしないように気をつけましょう。

【事例番号29：神戸少年の町】

アウトライン編	
プログラム名	神戸少年の町版 コモンセンス・ペアレンティング
ベースとしている技法	認知行動療法
実施主体	神戸少年の町
対象者	身体的虐待をする親
個人/グループ人数	個人
体制（係わる職員）	<input type="checkbox"/> 施設・機関単独 <input checked="" type="checkbox"/> 他機関との協働 ・どのような機関ですか？（児童相談所） ・契約の形態は？（児童相談所から親へのカウンセリングに関する委嘱を受ける） ・予算（謝礼等）は？（8000円/1回） ・具体的に記入してください（神戸市児童相談所児童虐待防止保護者カウンセリング事業）
プログラムの概要 （基本的な考え方）	認知行動療法の理論背景をもとに、子どもの問題行動を減らし、望ましい行動を効果的にしつけられるスキルの体得を目標に、ロールプレイやビデオを活用したモデリングによる経験的学習を重視するプログラム
内容（ワーク名/ねらい）	別紙1
回数（開催頻度）	6回1クール（2週間に1回程度）
期間（1クール）	2～3ヶ月
開催場所	神戸少年の町
開催時間（所要時間）	1時間～1時間半
期待できる効果	適切なしつけのスキルを身に付けさせることから、親と子どもの虐待的交流を少なくし、親子の関係を向上させ、子どもの問題行動に教育的に対処できるようになる。
プログラム適用の時期 （選択して下さい・複数回答可）	<input type="checkbox"/> 初期介入時 <input type="checkbox"/> 一時保護中 <input checked="" type="checkbox"/> 施設等措置中 <input type="checkbox"/> 措置解除後 <input checked="" type="checkbox"/> その他（在宅のケースで家族機能の強化が求められるケース）
通常業務時間外（土日、夜間）の実施	利用者に合わせて
交通費等の支給等の参加者への配慮	なし
同時に行なうプログラム	ベビーシッター（保育）
終了後に行なうプログラム	特になし
導入のきっかけ	子どもの引き取り希望されたことをきっかけに育児のしづらさに
技法・技術をどこで習得したか	米国のガールズ&ボーイズタウンで研修を受け、トレーナー養成の許可を持つ野口啓示が神戸少年の町でトレーナー養成講座を行っている
導入に伴う準備（期間、費用等）	トレーナー養成講座を受講する。2万円前後、25時間のトレーニング
技術的な難易度（主観で） 100点満点で何点 1(とてもかんたん)～100(非常に難しい)	コメント等あれば記入してください 20点 ビデオやマニュアルが整備されており、使いやすく、かんたん。
効果の実感/おすすめ度 100点満点で何点 1(おすすめできない)～100(超おすすめ)	コメント等あれば記入してください 90点 科学的手法により効果が実証されている。また、トレーニングを受けた受講者の実施率は高い。
課題/苦勞すること （選択して下さい・複数回答可）	<input type="checkbox"/> 技術的に高度である <input type="checkbox"/> 所内の理解を得るのが困難 <input type="checkbox"/> 対象者の選定が困難 <input type="checkbox"/> 予算の確保が困難 <input type="checkbox"/> 他機関との連携が困難 <input checked="" type="checkbox"/> その他(具体的に記入してください) 野口が行なったリサーチ*によれば、(1)ケースの動機付けの問題(2)組織的な問題(3)トレーナーの自信の有無が実施に影響を与える要因としてあがった。 *野口啓示、直島克樹(2007) 「児童虐待の家族再統合のための親教育支援プログラムの開発とその普及に関する研究-M-D&D研究の第4フェーズ(普及と訴え)の実証的研究」『子ども家庭福祉学』
向いているケース	身体的虐待ケースで、自分のしつけのやり方を変えたいというケース
うまくいくためのポイント	動機付けを高める導入。 親のしんどさへの共感、問題解決志向 児童相談所との連携（特にケースマネジメントと最終責任は児童相談所で）
備考	


 実 際 編

<実績>

	実施回数	参加人数 (実人数)	参加人数 (延人数)
平成 17 年度	3	3	20
平成 18 年度	0	0	0
平成 19 年度 (12 月末現在)	1	1	10

<実施日程> 略

<実施場所>

<実施内容>

<スタッフの役割>

<ケースの概要と導入の過程> 割愛

-ある日の様子- 略

<特記事項>

直接的に行なっている再統合支援プログラムは、神戸市児童相談所児童虐待防止保護者カウンセリング事業に基づくものである。児童相談所が保護者指導の枠組みを明確にした上で(福祉司指導等)、支援プログラムを受け持っている。

その他、児童相談所職員等を対象にコモンセンスペアレンティングトレーナー養成講座を開催している。保護者支援の技量を提供しているのだが、本来児童相談所が担うべき機能を肩代わりしているという認識である。児童相談所の児童心理司の方々がスキルを積み上げ、再統合支援に力を入れてほしい。

プログラムは6回セットで考案されたもので、効果も検証されている。しかし、児童相談所での臨床では必ずしも6回フルで実施できるとは限らない。プログラムの要点をкаいつまんで実施するという使い方がされることもあるが、そのような使い方であっても効果は期待できる。

<研究班の追記>

- 親支援プログラムを実施する主体はあくまでも児童相談所であり、支援プログラムの実施は児童相談所の委託を受けて行なっている。したがって、ケースについての責任は児童相談所が持っている。
- 直接的に行なっている再統合支援プログラムは、神戸市児童相談所児童虐待防止保護者カウンセリング事業に基づくものである。児童相談所が保護者指導の枠組みを明確にした上で(福祉司指導等)、支援プログラムを受け持っている。
 その他、児童相談所職員等を対象にコモンセンスペアレンティングトレーナー養成講座を開催している。保護者支援の技量を提供しているのだが、本来児童相談所が担うべき機能を肩代わりしているという認識である。児童相談所の児童心理司がスキルを積み上げ、再統合支援に力を入れてほしいとの期待を少年の町としては持っている。
- プログラムは6回セットで考案されたもので、効果も検証されている。しかし、児童相談所での臨床では必ずしも6回フルで実施できるとは限らない。プログラムの要点をкаいつまんで実施するという使い方がされることもあるが、そのような使い方であっても効果は期待できる。

【事例番号30：児童養護施設 岡山県立玉島学園】

アウトライン編	
プログラム名	
ベースとしている技法	コモンセンス・ペアレンティング
実施主体	本園
対象者	虐待をした等で、どのように子育てをすればよいのか悩んでいる親
個人/グループ人数	個人
体制（係わる職員）	<input checked="" type="checkbox"/> 施設・機関単独 <input type="checkbox"/> 他機関との協働 ・どのような機関ですか？（ ） ・予算（謝礼等）は？（ ） ・契約の形態は？（ ） ・具体的に記入してください
プログラムの概要 （基本的な考え方）	①わかりやすいコミュニケーション ②よい結果・悪い結果 ③効果的な誉めかた ④予防的教育法 ④問題行動を正す教育法 ⑤自分自身をコントロールする教育法
内容（ワーク名/ねらい）	・レビュー ・講義 ・モデリング ・ロールプレイ ・まとめ
回数（開催頻度）	2～3週間に1度
期間（1クール）	3ヶ月
開催場所	本園内
開催時間（所要時間）	参加者の都合のつく時間帯で1時間～2時間
期待できる効果	・子どもと関わる時の技術の向上 ・暴力に頼らない子育ての技術の取得 ・親自身がイライラしたときに落ち着く方法を身に付けられる ・子どもに対して悪いところを指摘するのではなく、良いところを認めていくことの大切さを認識できる。
プログラム適用の時期 （選択して下さい・複数回答可）	<input type="checkbox"/> 初期介入時 <input type="checkbox"/> 一時保護中 <input type="checkbox"/> その他(具体的に記入してください) <input checked="" type="checkbox"/> 施設等措置中 <input checked="" type="checkbox"/> 措置解除後
通常業務時間外(土日、夜間)の実施	なし
交通費等の支給等の参加者への配慮	なし
同時に行なうプログラム	
終了後に行なうプログラム	
導入のきっかけ	
技法・技術をどこで習得したか	神戸少年の町 野口先生より
導入に伴う準備（期間、費用等）	
技術的な難易度（主観で） 100点満点で何点 1(とてめかんたん)～100(非常に難しい)	コメント等あれば記入してください <u>20</u> 点
効果の実感/おすすめ度 100点満点で何点 1(おすすめできない)～100(超おすすめ)	コメント等あれば記入してください <u>80</u> 点
課題/苦勞すること （選択して下さい・複数回答可）	<input type="checkbox"/> 技術的に高度である <input type="checkbox"/> 予算の確保が困難 <input checked="" type="checkbox"/> 所内の理解を得るのが困難 <input type="checkbox"/> 他機関との連携が困難 <input checked="" type="checkbox"/> 対象者の選定が困難 <input type="checkbox"/> その他(具体的に記入してください)
向いているケース	子育てに悩んでいる親で、子どもへの接し方を学びたいと思っている親
うまくいくためのポイント	本園は、CSPのトレーナーの資格を取得した職員が3名おり、対応の相談実施のときに協力ができること
備考	退園後に実施するときには、子どもは園内で他児と過ごすようにする

実 際 編

<実績>

	実施回数	参加人数（実人数）	参加人数（延人数）
平成17年度	0	0	0
平成18年度	9	2	2
平成19年度（12月末現在）	0	0	0

表のほか、内部研修として職員5名に実施

<実施日程>

保護者の都合にあわせて実施

<実施場所>

園内のテレビのある部屋を利用
ユニットの居室等

<実施内容>

前記のようなプログラムにそって実施

<スタッフの役割>

スタッフ1名が担当。他のスタッフは、保護者が参加しやすいように導入部分での参加。雰囲気づくりのための配慮をする。

<ケースの概要と導入の過程> 割愛

ーある日の様子ー

保護者は、ロールプレイにも積極的に参加。モデリングのシーンを見て「自分の家でもよくあるシーンだ」と言われたり、「でも、こんなに上手いかないよね、〇〇の場合は、この後、こんな反応が返ってくる」と言われる。

具体的なシーンを見ながら、自分たちの生活に重ねて一緒に解決策を探していった。

<特記事項>

- ・かかわりの難しい保護者が増え、施設側としては親の悩みの聞き役であったり、なかなか親子のかかわり方について学ぶというところまではいかない。いろいろな保護者に提示をしてみたが1～2回であれば良いかもしれないが、6～7回で3ヶ月となると、親との関係・親の意欲が継続しないと難しいと思われる。
- ・在宅で頑張っているケースについてはかなり意義があるものと思われるが、施設としてアフターケアとしてどこまでやれるのかという難しさも感じている。
- ・まずは、施設内職員への研修としての活用をしている。

<研究班としてのコメント>

保護者支援を兎相ではなく児童養護施設で行う場合、参加者のモチベーションが効果に大きく影響を及ぼす。本プログラムへの参加が保護者の意思に任されているのであれば、モチベーションをいかに持続させるかということが最大の課題になる。

【事例番号31：社会福祉法人子どもの虐待防止センター】

アウトライン編	
プログラム名	施設MCG
ベースとしている技法	集団精神療法（MCG）
実施主体	子どもの虐待防止センター
対象者	虐待などのため親子分離中の母親で、自分自身のケアを求めている人
個人／グループ人数	（現在は）4人
体制（係わる職員）	<input checked="" type="checkbox"/> 団体単独 2人 <input type="checkbox"/> 他機関との協働 ・どのような機関ですか？（ ） ・予算（謝礼等）は？（ ） ・契約の形態は？（ ） ・具体的に記入してください
プログラムの概要 （基本的な考え方）	・セルフヘルプグループのように当事者のみのグループではなく、第三者（相談員）がファシリテーターを務める自発的グループである。 ・民間団体の相談員2人（1人がメインもう1人がサブ）が参加者の話を批判することなく聞く。参加者は民間団体であることで、安心感を持っている。（行政に対しては不信感を持っている人も多い）
内容（ワーク名／ねらい）	虐待母などの否定的なレッテルを貼られ、傷つき、孤立感を感じている母親が対等な関係で迎えられ、自分の気持ちを話し、同じような仲間と出会えることで、孤立感が癒され自尊感情が回復し、子どもとの関係が良い方向に変化していく。
回数（開催頻度）	月1回 （あわせて週1回やっている一般のMCGを利用することが可能、半分の人が利用している）
期間（1クール）	非限定
開催場所	当団体ミーティングルーム（別の階に専用ミーティングルームあり）
開催時間（所要時間）	14:00～15:30 グループ 15:30～16:30 クールダウンのためのお茶の時間
期待できる効果	・孤独感が癒され、自尊感情が高まる ・子どもとの関係修復に向けて前向きに努力できるようになる
プログラム適用の時期 （選択して下さい・複数回答可）	<input type="checkbox"/> 初期介入時（ <input checked="" type="checkbox"/> 一時保護中） <input checked="" type="checkbox"/> 施設等措置中（ <input checked="" type="checkbox"/> 措置解除後） <input type="checkbox"/> その他（具体的に記入してください）：基本的には施設措置中
通常業務時間外（土日、夜間）の実施	なし
交通費等の支給等の参加者への配慮	なし
同時に行なうプログラム	通常のMCG、電話相談
終了後に行なうプログラム	通常のMCG、電話相談
導入のきっかけ	電話相談、ホームページ、パンフレット（病院等においてもらった）
技法・技術をどこで習得したか	実践を通して（虐待専門の民間団体）
導入に伴う準備（期間、費用等）	先行して行っていたMCGが準備になっている
技術的な難易度（主観で） 100点満点で何点 1（とてもかんたん）～100（非常に難しい）	コメント等あれば記入してください ____点 やり方はシンプル（母親たちの苦しさ寄り添う）だからこそ難しいかもしれない
効果の実感／おすすめ度 100点満点で何点 1（おすすめできない）～100（超おすすめ）	コメント等あれば記入してください ____点 確かな手ごたえを感じている
課題／苦勞すること （選択して下さい・複数回答可）	<input type="checkbox"/> 技術的に高度である <input type="checkbox"/> 所内の理解を得るのが困難 <input type="checkbox"/> 対象者の選定が困難 <input type="checkbox"/> 予算の確保が困難 <input type="checkbox"/> 他機関との連携が困難 <input checked="" type="checkbox"/> その他（具体的に記入してください）：導入（いかに参加してもらおうか）
向いているケース	母自身が自分のケアを求めているが、行政には心を開けないケース
うまくいくためのポイント	紹介者自身が、本人と信頼関係を作れている
備考	

実 際 編

<実績>

	実施回数	参加人数 (実人数)	参加人数 (延人数)
平成17年度	10回	6名	15名
平成18年度	11回	4名	24名
平成19年度 (12月末現在)	8回 (11回を予定)	4名	24名

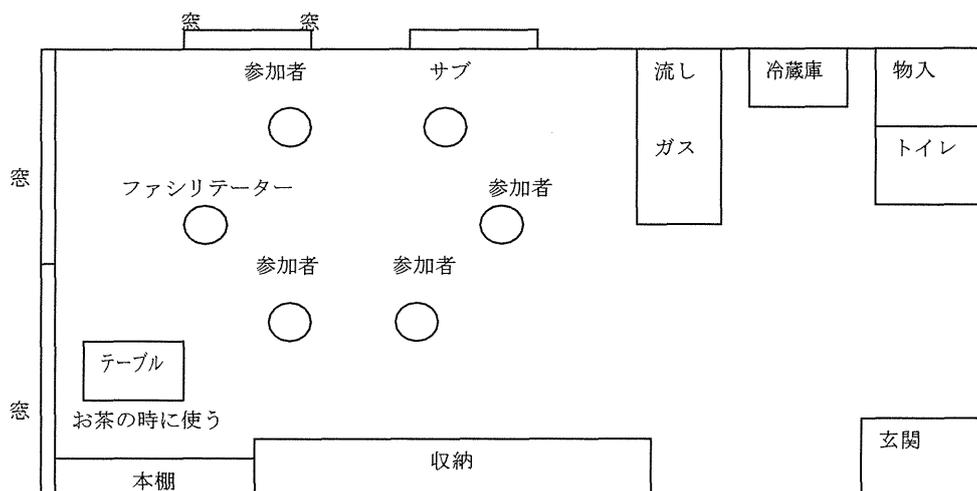
2000年(平成12年)から、毎月第3火曜日に実施
8月はお休み、17年度は定例日が祭日のため10回となる

<実施日程>

- 14:00~15:30 グループミーティング
- 15:30~16:30 参加者のティータイム(クールダウン、情報交換 etc)
- 16:30~17:00 担当者によるふりかえり

<実施場所>

子どもの虐待防止センターのミーティング専用ルーム
(マンションの一室を確保し、直接出入りできるようにしている)



<実施内容>

- ・グループカウンセリング：毎月第3火曜日 14:00~15:30 と定例日を決めて、たとえ、参加者がいないと思われるときでも待っている。内容は基本的には記載例と同じ。
- ・ティータイム：ミーティングのほうでは、基本的にはやりとりをしないので、ここで互いの情報交換をしたり、相談員のほうからアドバイスをしたりしている。また、お茶を出し、日ごろの孤独をねぎらうときもなっている。
- ・アフターミーティング：相談員それぞれが気付いたことを分かち合い、また、記録を書く。

<スタッフの役割>

ファシリテーターは、施設MCGのすべてに責任を負って進行している。サブの相談員は、会場準備等具体的な部分を担当しながら、参加した母親の声に耳を傾ける。

<ケースの概要と導入の過程>

参加者	プログラムへの導入	ケースの状況	ケース展開
①精神障害 <input type="checkbox"/> 人格障害 <input type="checkbox"/> 知的障害 <input type="checkbox"/> 被虐待 <input type="checkbox"/> 該当なし <input type="checkbox"/>	グループ開始時より参加。来たり来なかつたりの時期を経て現在は継続して参加		
②精神障害 <input type="checkbox"/> 人格障害 <input type="checkbox"/> 知的障害 <input type="checkbox"/> 被虐待 <input type="checkbox"/> 該当なし <input type="checkbox"/>	2年前より参加。Dr. 休職のため、この場への参加を Dr. から勧められて参加		
③精神障害 <input type="checkbox"/> 人格障害 <input type="checkbox"/> 知的障害 <input type="checkbox"/> 被虐待 <input type="checkbox"/> 該当なし <input type="checkbox"/>	2年前より参加。数年前より参加の意志あったが、来られず、ようやく参加。		
④精神障害 <input type="checkbox"/> 人格障害 <input type="checkbox"/> 知的障害 <input type="checkbox"/> 被虐待 <input type="checkbox"/> 該当なし <input type="checkbox"/>	半年前より参加。児童相談所との関係悪く、孤立して追い込まれていた。民間の援助を求めて参加。		

—ある日の様子—

○月○日 3名参加

(やりとりは略)

それぞれやりきれない気持ちを抱えている母たちが、自分の気持ちを話し、互いに共感し、さらに自分自身の抱えている問題を深く見つめていた。(自分の親との関係、子どもへの虐待 etc)

<特記事項>

誰かに行かされる場ではなく、母自身が自分の意思で参加するというのが特徴。今まで、虐待母などのレッテルを貼られ、誰からも理解してもらえないと感じ、心を閉じていた母親たちが、心を開いて自分のつらさを話し、同じような母たちと出会い、孤独をいやされていく。その結果、子どもとの関係、援助者との関係も変化していく。

今まで参加してきた母親たちの多くは、引き取りにいたって場を去っていった。(個別で、その後も継続的に援助しているケースが多い)

現在、参加している母親たちは、問題が深刻で、引取りには至っていない母親たち。しかし、この場に参加することで、母親個人の生き方、子どもとの関係などそれぞれ変化をしている。

難しいのは導入のしかた。児童相談所の紹介だとなかなかつながらない。「医療機関(精神科)にパンフレットが置いてあり、それを見て本人の意志で・・・」というような形は比較的つながりやすい。施設の職員との連携も課題だと思うが。

<研究班の追記>

- 最初は普通のMCGからはじまったが、在宅ケースの母に混じって、分離ケースも少なくなかった。施設に預けていることのつらさや、不満は話せない、ということで、2000年6月に分離ケースの母親だけが集まる機会を設けた。経過の中でグループメンバーの中にも再統合に至った人とまだ入所中という人もでてきた。再統合に至らず長期に参加する人の居場所になってきたという経緯がある。立ち上げた当初のグループとは異なり、現在は再統合には至らないケースをフォローをする意味合いが強くなっている。
- 分離ケースなので当然児童相談所の関与はあるが、グループへの参加は自発的に来る人のほうが多く、またそのほうが継続している。児相が紹介してくるケースもあるが、結果的にうまくいかず定着しなかった。MCGの性格は強制的なものではないので、児童相談所からの強い紹介があつたとしても定着するとは限らない。
- グループに参加している母が、スタッフに対し、ネットワーク会議に参加してほしいという要望がある。母親自身にはMCGに参加して自分を取り戻してきたという思いがあり、児相が評価している自分と今の自分は違うという認識がある。スタッフがネットワーク会議に参加することで、母親に対する認識が変わり、地域で見守り、支援していく方向に変わっていったケースもある。

<研究班としてのコメント>

- 本プログラムは、グループの時間(ティータイムも含む)に加えて、電話相談という個別のフォローも重要な役割を果たしている。内面に焦点を当てるグループミーティング、クールダウンをはかるティータイム、そして個別対応(電話相談)がセットになっているため、より効果的に機能するものと考えられる。
- 児童相談所(公的機関)と子どもの虐待防止センター(民間)との役割分担は大きなテーマである。児童相談所が親支援のすべてを担わなければいけないということではなく、家族を取り巻く支援体制をコーディネートすることが求められている。
- グループ参加者(母親)にパートナーがいる場合、母親に変化があればパートナー(父親)にも影響が及ぶ。母親はグループでフォローできるが父親へのフォローはどこかで担う必要がある。内面を話すためには父親は個別の方がふさわしいのかもしれない。母は変わっていくが、父は置いて行かれた感じになりがちである。父親としても、自分も話す場がほしいという思いを持つだろう。理解のある父親でも母親が変化していく経過の中で、夫婦間がうまくいかなくなる場合があるので、父親に対するケアも同時に考える必要があると思われる。

【事例番号32：非営利特定法人 児童虐待防止協会】

アウトライン編	
プログラム名	大阪方式マザーグループ
ベースとしている技法	セルフヘルプ・グループ、集団精神療法
実施主体	保健所・保健センター
対象者	主に母子保健活動の中で子育て困難を訴える、あるいは保健師が養育に問題ありと感じるケース（母親とその子ども）。中でも他の育児支援につながらないケース。但し、虐待が進行し、ソーシャルワークを先行させる必要のあるケースは除外。いわゆる、1、5次～2次予防のケース
個人/グループ人数	7～8組まで
体制（係わる職員）	<input type="checkbox"/> 団体単独 <input checked="" type="checkbox"/> 他機関との協働 ・どのような機関ですか？（保健所・保健センター） ・契約の形態は？（市町村によって契約形態が異なる。協働事業、スーパーバイザー要請、スタッフ派遣委託） ・予算（謝礼等）は？（それぞれの市町村が組んだ予算により協会へ振込み） ・具体的に記入してください：協会との契約形態は様々であるが、協会へはスーパーバイザー的役割を期待されている。係わる職員は、保健師はもとより、家児相、心理職、子ども支援センターなど、関係機関スタッフを出来るだけ巻き込む形で実施。
プログラムの概要（基本的な考え方）	〔 1クール8～10セッションの短期グループ 途中参加は認めないクローズのグループ 〕 母親と子どもを分離し、その双方に関わり、早期の母子関係の好転を図る。 母親グループ …基本的にフリートーク。 ファシリテーターとコ・ファシリテーターが2～3名入り、進行役を勤める。 子どもグループ …子ども2人に対してスタッフ1人以上を配置し、治療的な関わりをすることで大人への信頼感を育てる。 形態：1時間自由遊びの中で、個々のケースに丁寧に関わる。 30分おやつ、手遊びなどで現実感を持たせて終了。 毎回スタッフ全員で丁寧なカンファレンスを数時間かけて行う。そのことで全員がケースの動きを的確に認識して次の回に臨む。
内容（ワーク名/ねらい）	安心感・安全感・安堵感を感じられるグループ作りを心がける。 母親グループ …具体的には ・セルフヘルプグループに見られるグループの約束事（①グループ内の出来事を他言しない②他人の話最後まで尊重して聞く③グループ期間中個人的な付き合いはしないなど）を徹底させる。 ・集団精神療法でいわれるところのグループ内で動く心理機制をスタッフは出来るだけ把握し、傷ついたままの帰宅を避ける努力をする。 ・ファシリテーターは意図的に自己洞察を深める働きかけをしない。 ・スタッフ全員で、来所から帰宅までの間、温かく接し、ホッとする空間を作ることで欠席者を減らす努力をする。 子どもグループ …「保育」にならぬように配慮 子どもの遊びを誘導しない。あくまで子どもの自発的な動きや気持ちに寄り添う。子どものその時々々の気持ちを読み取り、必要に応じてそれをことばにしていく。 ねらい 閉じこもりがちな対人関係の下手な人たちに、「傷つかずに仲間に入る」という体験をさせる。子どもには大人への基本的な信頼感を育てる。（母親への愛着のきっかけを作る）
回数（開催頻度）	月2回
期間（1クール）	8回～10回
開催場所	保健所・保健センター、子育て支援センター
開催時間（所要時間）	午前10時半～11時半（1時間半）
期待できる効果	・孤立の解消 ・本音を吐露しても傷つかない体験をすることで、担当者との間でも本音で語れるようになり、関係が深まる。 ・ケース担当者にSOSを出せるようになる ・他の育児支援につながる ・母と子に並行して関わることで、母子双方に変化が見られ、母子関係好転のきっかけとなる。 ・2クール、3クールと継続したケースは、治療的效果が得られる。 ・スタッフにとって、ケースの全容が明確になり、的確に次の処遇を決められる。ケースを見る目が育つ。

プログラム適用の時期 (選択して下さい・複数回答可)	<input type="checkbox"/> 初期介入時 <input type="checkbox"/> 一時保護中 <input type="checkbox"/> 施設等措置中 <input type="checkbox"/> 措置解除後 <input checked="" type="checkbox"/> その他(具体的に記入してください) ケース発見後、担当者がある程度介入し他の育児支援や資源につながらないと判断した時。
通常業務時間外(土日、夜間)の実施	なし
交通費等の支給等の参加者への配慮	なし
同時に行なうプログラム	プログラムとしてはないが常に担当者との連携を図り、必要に応じてソーシャルワーク的関わりを並行する。
終了後に行なうプログラム	地域の資源へ処遇。ケースによっては、2クール、3クールと継続。
導入のきっかけ	母親の訴え。保健師の発見。
技法・技術をどこで習得したか	各市町村の保健師と共に作り上げてきた。
導入に伴う準備(期間、費用等)	保健師が個々に抱えているケースを出し合い、丁寧な事例検討をしながら、選定を行う。
技術的な難易度(主観で) 100点満点で何点 1(とてもかんたん)~100(非常に難しい)	コメント等あれば記入してください ____点 井戸端会議的なグループなので、誰にでも始められるが、対人関係が下手な人を対象とするため、よほど慎重にやらないと、欠席者、中断者が続出し、グループが成り立たない。その意味では、スーパーバイザー(参加者の病理を読む人)がいるとやりやすい。又、参加者を集めるのに保健師の力量も問われる。
効果の実感/おすすめ度 100点満点で何点 1(おすすめできない)~100(超おすすめ)	コメント等あれば記入してください ____点 ほとんど全参加者が「自分と同じ悩みを持つ人がいることを知ってホッとした」という感想を持つ。閉じこもり、自己嫌悪に陥っている母親たちにこの体験をさせることは大切だと考える。
課題/苦勞すること (選択して下さい・複数回答可)	<input checked="" type="checkbox"/> 技術的に高度である <input checked="" type="checkbox"/> 所内の理解を得るのが困難 <input checked="" type="checkbox"/> 対象者の選定が困難 <input checked="" type="checkbox"/> 予算の確保が困難 <input checked="" type="checkbox"/> 他機関との連携が困難 <input checked="" type="checkbox"/> その他(具体的に記入してください)：上記の課題をどの機関も多かれ少なかれ抱えているが、回数を重ね、実績を積む中で一つずつ解決しているのが実情である。
向いているケース	発見しても関わり方のむづかしいケース。 他の子育て支援につながりにくいケース ケースの全容が見えにくい子どもに何らかのゆがみが見えるケース
うまくいくためのポイント	・保健師の力量(まず発見、そしてケースをグループにつなぐまでのケースへの関わりができること。)特に、何のために通所するのかを母親に理解させることができるかどうか通所のモチベーションにつながる。
備考：	このグループの大きな特徴は、1クール8回~10回の短期のグループであることと、あえて自己洞察を積極的に深めないことである。 虐待する母親たちのケアが近年大きな課題となってきたが、この母親たちの中には、何らかの病理を有するものも多く、その治療は容易ではない。神経症レベルの人たちは、自己洞察を深め、自分の問題を意識化させることで母親としての機能を回復させることもある程度可能である。しかし病理の重い人の治療はむづかしく、フリートークのグループを長期に続けると自己洞察が進みすぎ、自我機能が弱まり現実検討力が低下する。母親たちは自分の内面にのみ関心がいき母親としての役割が果たせなくなり、グループに際限なく依存する事態がおきがちである。このことから子育て真最中の時期に自己洞察を促すような治療に結びつけることは慎重を要する。むしろこの時期の母親たちには母親としてどれだけ機能できるかを査定して、不足分を社会資源で補いながら子育てを支援していくことが賢明であると考えられる。うまく支援していくと母親たちは子育てしながら成長していくものでもある。 以上の考えから、このグループは、あえて短期のグループとしている。同じ悩みを持つ人たちを集めてフリートークの場を提供するので、自ずから核心に触れる話題が多くなる。しかしそれを掘り下げるのではなく、同じ悩みを持つ人がいることを知り、又自分の問題が何であるかに気づく程度の場となっている。 グループの効果としては次のような点が挙げられる 1. 孤立解消の一步となる 2. グループへの信頼感が関係機関への信頼感へとつながる。 グループ後の処遇をともに考えることが出来る SOSを出せるようになる 3. 神経症レベルの人は、グループを数クール継続することで治療効果が得られる なお、個人の生育歴に触れないと次のステップに移行できない人は、併行して個別対応を行う必要がある。

実 際 編

<実績>

【協会からスタッフを派遣したグループ……いずれも大阪府下】

注：A～Fの府立保健所は、グループ予算削減のため、あるいは保健所統廃合のためグループ廃止

	実施機関	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19
1	A保健所	○	○	○	○	○				
2	B保健所		○	○	○	○	○	○		
3	C保健所				○	○	○	○		
4	D保健所・保健センター					○	○	○	○	○
5	E保健所				○	○	○	○	○	
6	F保健所・保健センター								○	○
7	G市保健センター ①		○	○	○	○	○	○	○	○
8	②						○	○	○	○
9	③							○	○	
10	H市保健センター ①		○	○	○	○	○	○	○	○
11	②				○	○	○	○	○	○
12	③				○	○	○	○	○	○
13	④									○
14	⑤						○	○	○	○
15	I市									○

【協会からスーパーバイザーを派遣したグループ（年4回程度）…いずれも他府県】

		H15	H16	H17	H18	H19
1	I保健所			○	○	
2	J保健所	○	○	○		
3	K保健所	○	○	○	○	○
4	L保健所	○	○	○	○	○
5	M保健所			○		
6	N保健所			○	○	○
7	O保健所				○	○
8	P保健所			○	○	

<実施日程>

- 事例選定会議
- グループセッション 月2回 8回～10回
午前 10時～11時半
毎回セッション終了後カンファレンス 午後数時間
- グループのまとめと処遇検討のための会議

<実施場所>

保健センター、子育て支援センターなど
母親グループと子どもグループの2部屋を準備
毎回同じ部屋を使用出来るように確保
子どもの声が気にならない程度の距離が望ましい

<実施内容>

緊張して来所する人が多いので、セッション前後の接し方にも細心の注意を払う。

母親グループ 茶（あるいは茶菓の用意）

- 開始時間まで子どもグループの部屋で待機し、10時に一斉に母親の部屋へ入る。
- ファシリテーターとコ・ファシリテーター（1人～2人）が同席する。
ファシリテーターはグループの進行役を勤め、コ・ファシリテーターは参加者の細かい観察と、会話がスムーズに進むように、ファシリテーターの補助的な役割をする。
- グループのはじめに約束事を確認する。
 - イ. グループ内の内容は、外ではしゃべらない。
 - ロ. グループ参加期間中は、グループ外でのメンバー同士の交流をしない。
 - ハ. 他人の話を最後まで聞き、批判したり、非難したりしない

- ・安心感と安全感と安堵感を得られるようなグループ作りを心がける。
 - 暖かい雰囲気の部屋作り
 - 話しやすい雰囲気作り
 - 自己洞察が進み過ぎて不安感を増幅させないように配慮
 - 極端に緊張している人、動揺の激しい人には一対一で対応するなど特別の配慮

子どもグループ	子ども2人に1人以上のスタッフが入る
10:00	母親と分離 自由遊び…保育ではないので、遊びを誘導しない スタッフが子どもの動きに合わせて、子どもの気持ちを読み取りながら、寄り添う。(子どもの内面に寄り添う) 情緒的に問題を抱える子どもには担当者を決めてかかわる
11:00	おやつ 手遊びや紙芝居など簡単な設定保育 現実的な対応をすることで現実感を取り戻す
11:30	母親のお迎え

セッション終了後のカンファレンス・・・グループ実施上欠かせない

セッション終了後、逐語録的な記録をとりながら数時間かけて各ケースの検討をする。スタッフは無論のこと、必要に応じてケースに関係するスタッフも参加。母親の話した内容、表情、服装、挙動、子どもの扱い、母と子の関係性、子どもの状態、遊びの内容などあらゆる側面から、全体像の把握に努める。スタッフ全員の情報を総合すると、母親の外見や話す内容とは矛盾する全体像が浮かび上がることもまれではなく、ケースの全容が見えてくる。その内容を皆で共有し、次のセッションに臨む。緊急にケースワークの対応が必要な場合には、極力母親の了解をとって、担当者に介入してもらおう。欠席、遅刻が目立つ人には、ケース担当者にグループの感想を聞くなどして、無理のない範囲で参加を勧めよう。

<スタッフの役割>

母親グループ

過去に被虐待歴のある人、現在子どもに対して虐待に近い扱いをしていて非難されるのではないかとビクビクしている人、子育てが苦痛で最低限の世話はするが、情緒的には全くのネグレクト状態の人、自分の精神状態を保つだけが精一杯の人など、参加者はさまざまである。共通しているのは自己評価が極端に低く、対人関係が苦手でこのような小グループ参加を最も苦手とする人たちである。従って、とりあえず休まずに参加できたら、このグループの目的を達したといってもよい。

ほとんどの母親は身奇麗にしてにこやかに現れ、一見ならんら問題を感じさせない母親たちである。よほど細心の注意を払わないと何も見えてこないばかりかグループ参加がかえって傷つき体験となる。通り一遍の対応をしていると、もっともらしい理由をつけて遅刻、欠席、中断が続出しグループとして継続できなくなる。

従ってスタッフの役割は、上記のカンファレンスを丁寧にするすることで、参加者の気持ちを汲み、参加率のよいグループ作りをすることである。このスタッフの細やかな心遣いが結果的に母親たちの心を開かせその後の関係機関への信頼感につながっていく。

子どもグループ

そのほとんどが3才までの乳幼児である。したがってその課題は母親への基本的な信頼感(アタッチメント)の成立の有無である。子どもの表現に対して恒常的な対応が出来ない母親が多く、混乱している子どもが多い。母親との分離に大声で泣きはするが、母親との再会を決して喜ばない子、いろいろと感じてはいるが、全く無表情を装っている子、来るたびにその様相が変わり、その間の母親の状態をそのまま映し出している子などさまざまである。情緒的な混乱は身体的虐待に劣らぬ被害状況を呈する

このグループにおけるスタッフの役割は、その場をいかに楽しませるかではない。子どもの悲しみを悲しみとして、怒りを怒りとして受け止め寄り添うことである。子どものわずかな表現をもキャッチして返すことでバラバラになった心的世界を纏め上げることである。子どもが小さいだけにこの短期のグループでもその効果はある程度期待できる。スタッフ

の恒常的な関わりの中でスタッフへの期待感が芽生え、それは母親への期待感となり、母親の関わりに笑顔で反応し始める。このグループで落ち着きを取り戻した母親は、その子どもの反応に母親自身が癒され、関係が好転することもまれではない。

ケース処遇

このグループのみで治療効果の上がるケースもあるが、多くのケースはこのグループを出発点として次の処遇へとつながっていく。したがってこのグループで明確になったケースの全容を担当者に伝え、次の処遇を提言していくのもスタッフの役割である。

<ケースの概要と導入の過程>

事例：Xグループ……事例は実際例ではなく、合成したものである。

スタッフ 母親グループ・・・保健師2名 子育て支援センター保育士1名
 子どもグループ・・・協会スタッフ1名 家庭児童相談員1名 保健師1名
 子育て支援センター心理1名 保育士1名

場所 子育て支援センター

参加者	ケースの状況	ケース展開
① 母親 …全てに投げやりな感じ。まるで荷物を抱えるように児を抱っこ。表情乏しく知識は豊富だが、現実感に乏しい。 児 …1才半男 発育の遅れ 人に關心なく、無表情。わっと泣くかと思うとケロッと泣き止む。	子育て支援センターを渡り歩くが、他の母子との交わりもなく、母子共奇異な印象を受ける。ケースの全容がつかめない。	母親 当初は緊張が高く、グループになじめない様子であったが、次第に慣れ無欠席。表情も柔らかくなり児と向き合えるようになる。途中、担当者にDVの悩みを相談し始める。グループ終了後2クール目も継続参加 児 回を追う毎に急激な変化。見違えるほどに表情よくなり、発語増加。母親を求めるようになる。
② 母親 …極端な対人緊張あり。子どもにどう接していいかわからず、自然な抱っこが出来ない。子どもに「いらいらする」 児 …3才女 ことばのみ遅れあり多動 感情表現できず、人に近づかない	父親働かず、母親の貯金を崩して生活しているというが定かではない。親子3人閉じこもり。 母親、実家との関係悪い	母親 当初は表情硬く、ほとんどしゃべらなかつたが後半から笑顔も見られ会話に入り始める。 児 は特定のスタッフとの間で急激な変化。発語も増え自然体で振舞えるようになる。幼稚園申し込み。
③ 母親 …一見ならん異常を感じさせない。周囲に気を遣い、人当たりが良い。 児 …10ヶ月男 表情乏しく、動きも乏しい。	うつ傾向強く、家事がほとんどできていない。児はネグレクト状態。精神科クリニックから連絡あり。	母親 前半は休み勝ち、遅刻も多い。来るときはきれいに化粧をしてくる。緊張高く、懸命に他人に合わせようとする。児の相手ができないことへの罪悪感が強い。 児 母親の精神状態を毎回映し出し、毎回様子が異なる。保育所申請。
④ 母親 …被虐待歴あり、感情の起伏が激しい、「子どもかわいくない」ストレスがたまると児をのしり叩く。 児 …1才5ヶ月女 言葉未 人懐こい	母親一人の育児はむづかしい面があり、関係の悪い実母が手伝う。	母親 出席率もよく、赤裸々に家庭状況等よくしゃべったが、途中子どもへの虐待明らかとなり、児相を含め分離を視野に協議 児 スタッフとの関係ができるまでに中断となる
⑤ 母親 …育児のストレスで蕁麻疹が出ると言い2年生の長男に子守をさせパート勤務、長男には辛く当たってきたという 次男 …2才7ヶ月男 特に問題なし	幼少期他家へ預けられ、実母との間に常に緊張感。 近所との関係悪い	母親 「虐待しているから呼ばれたのか」とグループに警戒的だったが、後半すつかり打ち解け、参加を楽しみにしている。長男との関係も赤裸々に語りだす。グループ終了後、学校と連携し、保健師が継続フォロー。
⑥ 母親 …軽い知的遅れがある。母親自身がネグレクトの状態であったため、子どもの育児もわからない。 児 …2才4ヶ月双子の男女 極端に小さい。一人は自傷行為あり。一人はぬいぐるみにしがみつこうように母親にしがみつく。	父方祖父母と同居 父親は遊び歩き、働かない。	母親 当初言葉も少なく、幼い印象。次第に慣れてグループへの依存大きくなり、早くから来所。スタッフとの会話を楽しみだす。 児 子どもは二人とも不安げに母親にしがみついていたが、慣れるに従い、スタッフとの交わりを楽しみだし、子どもらしく変化。終了後子育て支援センターがフォロー。

—ある日の様子—

グループの具体的状況

集まったメンバーにより、その流れは一様ではないが、概ねその流れには共通項がある。どこかのセッションで1度は暴露的に、子どもに対するあるいは自身の過去に受けた虐待体験の話が噴出する(ほとんどの場合1、2回目のセッション)。その内容はケース担当者も知らないほどの内容のことが多く、スタッフを驚かせる。セッション後はしゃべった人もしゃべらなかつた人にも何らかの動揺が走り、次のセッションに欠席者が増えることもある。しかしこのような話題が延々と続くわけではなく、安全弁が働き、次の回は非常に無難な話に終始することが多い。

他に夫との関係、姑問題、子どものやりにくさ、近所づきあいなどが話題となり、それが自分の生活を見直すきっかけとなったり、日常の些細な話も最後まで聞いてもらえ、時には自分の話が誰かの役に立つ体験をしたりもする。何を話しても、共感されることはあっても、批判、非難めいたことは一切いわれず、最後まできちんと受け止めてもらった体験は一人一人の母親にとって貴重なものと見え、凝集性の高いグループが出来上がる。

1 クール終了後の感想・・・母親たちのアンケートの中から感想を拾うと

- ・自分だけがおかしいと思っていたが皆同じように悩んでいるのを知ってホッとした。
(これはどのグループでも聞かれる一番多い感想である)
- ・シビアな内容を人前でしゃべるのを聞いてはじめビックリしたが、その内容を皆が暖かく受け止めるのを聞いて自分のことのようにうれしかった。
- ・こんな話は、普段の付き合いの中ではなかなかできないのでよかった。
- ・子どものいない所で話せたのがよかった。
- ・母親たちだけでなく、スタッフがいることで安心して話せた。
- ・その日の話題によっては帰宅してから考え込むこともあったが、次までの2週間に気持ちの整理がついた。
- ・もっと続けてほしい。

<特記事項>

このグループは、プログラムのあるグループのように簡単には効果測定できない難しさがある。それは母親の持つ問題の種類や質によってグループから得られるものがそれぞれ異なるからである。

母親たちがグループで体験することは概ね次のようなものであると考えられる。

集団に仲間として受け止められた体験

自分と同じような体験をした人が他にもいることを知る体験

気持ちや感情をことばで表現する体験

他の人の話を聞くことで、自分の問題に気づく体験

安全なミニ社会の体験

これらの体験は、フリートークのグループでのみえ得られるものであり、閉じこもりがちの人には貴重な体験となる。

<研究班の追記>

- 本プログラムは、虐待によって分離ということに至らないように、予防のためのプログラムである。虐待は何よりも予防が大事であり、あくまで母子保健分野で行なうグループとして考えている。母子保健の分野は健診などの機会ですべて把握ができる唯一の法的な機関であるので、予防のための対応を行う上で重要である。日常生活を上手く行なうことをサポートするという点で、洞察を深めるような治療的なかわりはない。協会独自でやれないかとも問い合わせられ、地元と離れたところではなしもあったが、このようなサポートは地域に根ざさないといけないので、本協会が独自で行なうものではなく地域の母子保健機関が行なうものと考えている。地域の資源の中で育ててもらうことが必要。また、本プログラム終了後は、次の援助につなぐことが重要であるため、その手立てを必要とする。
- また、グループが有効に機能するには、きちんと個別で対応してもらうことが重要である。グループだけでなく、個別に保健師等と深い話ができていたケースもあり、そのようなケースは効果的な支援ができていた。グループと個別対応はペアとして考えている。
- 本プログラムは回数が限定されているが、そのことが現実適応の機能を高めている側面がある。

<研究班としてのコメント>

- このプログラムを要保護児童対策地域協議会が行うことの提案は画期的である。予防の段階でのチーム援助であり、児童福祉所管課と母子保健所管課を中心となり、地域が一体となって予防に力を入れるという発想は重要である。予防に力を入れることは長期的に見ると事業効率性は高いと思われ、また、支援に関わる人の達成感にも結びつくことで動機付けにもなるものと思われる。
- 虐待ケースは支援をつなぐことが重要である。次の援助につなぐことが必要。多職種が関わることのメリットがある。
- 予防の観点（母子保健の観点）が重要である。保健師が中心となって活躍する母子保健の分野は、公的機関として全数把握ができる利点を持っている。

援助プログラム事例(2)

2 ソーシャルワークの枠組み設定自体を目的とするもの

【事例番号6：神奈川県相模原児童相談所】

アウトライン編	
プログラム名	家族合同ミーティング
ベースとしている技法	特になし
実施主体	神奈川県相模原児童相談所
対象者	分離中の親または親子と施設を含む関係機関
個人/グループ人数	個人
体制(係わる職員)	<input checked="" type="checkbox"/> 児童相談所単独 <input type="checkbox"/> 他機関との協働 ・どのような機関ですか? () ・予算(謝礼等)は? () ・契約の形態は? () ・具体的に記入してください
プログラムの概要(基本的な考え方)	家族(親、親族等)・本人(年齢・本人の意思等により参加しないこともあり)・施設・児童相談所・その他関係機関が一同に会し、目標や支援計画、支援内容について話し合いを行う
内容(ワーク名/ねらい)	・家族も施設も児童相談所もみな対等な立場であること(中立の立場で親子支援チームが関わることで、より場の構造ができる) ・家族が子どものことを一番分かっているというワンダウンポジションで実施 ・この場の人すべてが、子どものために集まったチームであるという意識づけ
回数(開催頻度)	随時
期間(1クール)	面会、外出、外泊の節目の時期が多いが、開催したい要望が家族、施設等からあればいつでも
開催場所	児童相談所の会議室(広めの部屋)または施設内の会議室
開催時間(所要時間)	1回につき 1時間30分から2時間
期待できる効果	・親の自尊感情の回復(エンパワメント) ・子どもの自尊感情の回復 ・親・子ども・施設・関係機関間における情報を共有し、共通の目的を持つ(協働)
プログラム適用の時期(選択して下さい・複数回答可)	<input type="checkbox"/> 初期介入時 <input checked="" type="checkbox"/> 一時保護中 <input checked="" type="checkbox"/> その他(具体的に記入してください) <input checked="" type="checkbox"/> 施設等措置中 <input type="checkbox"/> 措置解除後
通常業務時間外(土日、夜間)の実施	通常は勤務時間内だが、家族が参加しやすいように設定するため、夜間、土日の対応もある
交通費等の支給等の参加者への配慮	なし
同時に行なうプログラム	
終了後に行なうプログラム	
導入のきっかけ	
技法・技術をどこで習得したか	
導入に伴う準備(期間、費用等)	
技術的な難易度(主観で)	コメント等あれば記入してください
100点満点で何点	<u>80点</u>
1(とてもかんたん)~100(非常に難しい)	司会が会話を促進するための専門的な面接技術が必要
効果の実感/おすすめ度	コメント等あれば記入してください
100点満点で何点	<u>90点</u>
1(おすすめできない)~100(超おすすめ)	
課題/苦勞すること(選択して下さい・複数回答可)	<input checked="" type="checkbox"/> 技術的に高度である <input type="checkbox"/> 所内の理解を得るのが困難 <input type="checkbox"/> 対象者の選定が困難 <input type="checkbox"/> 予算の確保が困難 <input type="checkbox"/> 他機関との連携が困難 <input type="checkbox"/> その他(具体的に記入してください)
向いているケース	・親、子ども、施設、児童相談所の目的がバラバラで支援がうまくいっていないケース ・早く子どもを返して欲しいと無理難題を訴える親 ・家族再統合の方向性が見えるが、なかなか進まない家族 ・その他 どんなケースでも
うまくいくためのポイント	事前の準備 ・ミーティング前に家族や施設など参加者に十分にミーティングの目的を説明する ・話しやすい場作り ・ミーティングの流れを提示(レジュメなど) ・記録の共有 ・ホワイトボードの活用(会話が見える形で進行する)
備考	

実 際 編

<実績>

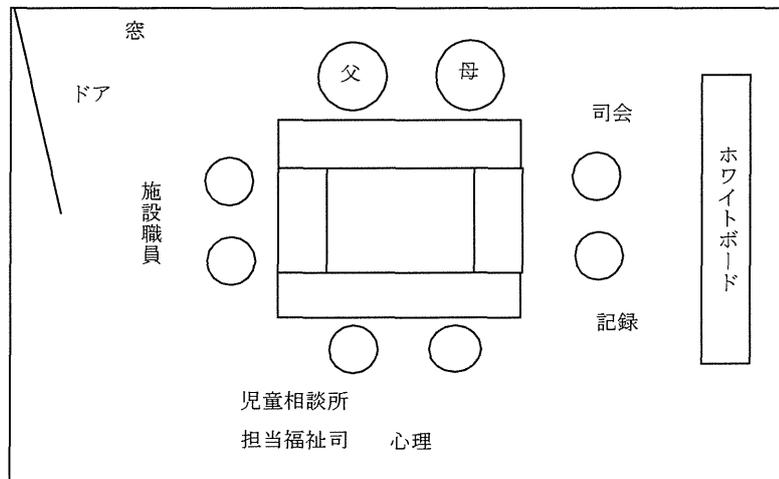
	実施回数	参加人数（実人数）	参加人数（延人数）
平成 17 年度			
平成 18 年度	4 回	14 人	20 人
平成 19 年度（12 月末現在）	16 回	39 人	56 人

<実施日程>

特に決まった形はない

<実施場所>

施設会議室（広めの部屋）



<実施内容>

支援プランの各期（面会・外出・外泊）の目標、プログラムについて、親、子ども（年齢や状況に応じて）、施設（担当者、心理、主任など）、児童相談所担当児童福祉司、児童心理司等で話し合いをする。親子支援チームは司会・記録としてミーティングの進行をするが、記録係も話し合いに参加する。司会者は WWW（SOSA の技法）やスケーリングなどを使って整理をする。ミーティング終了後は、記録を両親・施設に送付する。

<スタッフの役割>

親子支援チーム 1 名が司会（平行してホワイトボードに記録）

1 名が記録（会議録またはホワイトボードに記録） 記録も話し合いに参加する

☆準備するもの：ミーティングのレジュメ

（支援プランや支援のためのカレンダー・面会日誌、外泊計画表など）

ホワイトボード、カメラ（ホワイトボードの記録を写す）、お茶

<ケースの概要と導入の過程> 割愛

ーある日の様子ー

<外出期から家族宿泊室での体験宿泊に向けての話し合い>

ミーティング 30 分前に児童福祉司、親子支援チーム 2 人が施設に到着。施設担当職員と事前に簡単に近況を確認する。

14 時 ミーティング開始（レジュメ・外出計画表を配布する）（お茶をいれる）（しばらく雑談）

参加者：家族（略） 施設 担当 主任 FSW 児童相談所 地区担当児童福祉司 親子支援チーム A（司会） B（記録）

- | | |
|------------------------|-------------------------|
| 1 今日の話し合いの進め方（司会）（略） | 5 決まったこと（略） |
| 2 今日話したいこと（全員） | 6 今後の予定（略） |
| 3 最近の〇ちゃんの様子（施設、家族）（略） | 7 現状での家庭引き取りの可能性について（略） |
| 4 体験宿泊の感想（略） | 8 感想 |

ミーティング終了後、記録をまとめ家族に送付する

<特記事項>

【事例番号8：神奈川県厚木児童相談所】

アウトライン編	
プログラム名	家族支援のためのプラン
ベースとしている技法	独自
実施主体	神奈川県厚木児童相談所
対象者	家族再統合を目指す家族
個人／グループ人数	－
体制（係わる職員）	<input type="checkbox"/> 児童相談所単独 <input checked="" type="checkbox"/> 他機関との協働 ・どのような機関ですか？（児童福祉施設・関係機関・その他家族の支援機関） ・契約の形態は？（特に無し） ・予算（謝礼等）は？（特に無し） ・具体的に記入してください
プログラムの概要 （基本的な考え方）	親の実効ある変化のためには、親のストレングスに注目する必要がある、「エンゲージメント」という考え方がひとつのキーポイントになる。家族再統合を目指す際、親に「見通しを示す」ことで、「エンゲージメント」が成立し、親との協働が実現しやすくなる可能性がある（「見通し」とは、法的な制限だけでなく、何をすれば子どもに会えるかを示すこと）。
内容（ワーク名／ねらい）	<input type="checkbox"/> 「見通し」をフローチャートのように図式化し、親と共有する。 <input type="checkbox"/> 親の主体性を引き出すことが望ましい場合には、家族自身が参加する「合同ミーティング」などを設定する。
回数（開催頻度）	必要に応じて
期間（1クール）	規定なし
開催場所	ケース毎に設定
開催時間（所要時間）	規定なし
期待できる効果	<input type="checkbox"/> 「見通し」により、支援プラン参加動機が高まる。 <input type="checkbox"/> 必要な調査・アセスメントを示すことで、徐々に進んで行くことを理解してもらえる（段階的交流プログラム）。 <input type="checkbox"/> 家族と施設、児童相談所が、支援プランを共有することが出来る。 <input type="checkbox"/> 親自身が支援プランの作成に関わることで、問題解決の主体性を高めることができる。
プログラム適用の時期 （選択して下さい・複数回答可）	<input type="checkbox"/> 初期介入時 <input checked="" type="checkbox"/> 一時保護中 <input type="checkbox"/> その他(具体的に記入してください) <input checked="" type="checkbox"/> 施設等措置中 <input type="checkbox"/> 措置解除後
通常業務時間外(土日、夜間)の実施	必要に応じて決定
交通費等の支給等の参加者への配慮	なし
同時に行なうプログラム	特定のものはなし
終了後に行なうプログラム	特定のものはなし
導入のきっかけ	神奈川県中央児童相談所虐待対策支援課の取り組みを受けて。
技法・技術をどこで習得したか	神奈川県中央児童相談所虐待対策支援課からの情報・技術提供
導入に伴う準備（期間、費用等）	特になし
技術的な難易度（主観で） 100点満点で何点 1(とてもかんたん)～100(非常に難しい)	コメント等あれば記入してください <u>95</u> 点
効果の実感／おすすめ度 100点満点で何点 1(おすすめできない)～100(超おすすめ)	コメント等あれば記入してください <u>50</u> 点
課題／苦勞すること （選択して下さい・複数回答可）	<input checked="" type="checkbox"/> 技術的に高度である <input type="checkbox"/> 予算の確保が困難 <input checked="" type="checkbox"/> 所内の理解を得るのが困難 <input type="checkbox"/> 他機関との連携が困難 <input checked="" type="checkbox"/> 対象者の選定が困難 <input type="checkbox"/> その他(具体的に記入してください)
向いているケース	見通しを知りたがっている家族
うまくいくためのポイント	協働の関係を築きましょう。
備考	

【事例番号11：神奈川県厚木児童相談所】

アウトライン編	
プログラム名	FGC-Modification
ベースとしている技法	ファミリーグループカンファレンス
実施主体	神奈川県厚木児童相談所
対象者	当事者（児童・家族・親族・知人等） 関係者（児童福祉施設職員・関係機関職員） 児童相談所職員
個人／グループ人数	限定なし
体制（係わる職員）	■児童相談所単独 ←ケースによって ■他機関との協働 ←ケースによって ・どのような機関ですか？（児童福祉施設・他） ・契約の形態は？（なし） ・予算（謝礼等）は？（なし） ・具体的に記入してください
プログラムの概要（基本的な考え方）	当事者参画を軸とした、当事者と支援者による、再統合に向けた方向性や取り組み内容の、明確化および合意の場
内容（ワーク名／ねらい）	・支援者のエンパワー ・当事者タイムによる自己決定 ・保護者（家族）のエンパワー ・当事者／支援者双方の主体性の確認 ・児童のエンパワー
回数（開催頻度）	規定なし
期間（1クール）	規定なし
開催場所	児童相談所・児童福祉施設、関係機関
開催時間（所要時間）	1回90分～150分
期待できる効果	・当事者の再統合への動機・意欲の形成 ・当事者の自己決定支援とエンパワー ・当事者の自尊心と主体性の尊重 ・当事者による目標の明確化と当事者間の共有 ・当事者と支援者間の目標の共有 ・支援者の立脚点の明確化 ・指導から支援への関係性の転換 ・長期にわたる膠着状態からの脱却
プログラム適用の時期（選択して下さい・複数回答可）	<input type="checkbox"/> 初期介入時 <input type="checkbox"/> 一時保護中 <input checked="" type="checkbox"/> 施設等措置中 <input type="checkbox"/> 措置解除後 <input type="checkbox"/> その他（具体的に記入してください） 現状では措置中ケースを対象としているが、適用を広げられる可能性はあり。
通常業務時間外（土日、夜間）の実施	必要に応じて検討
交通費等の支給等の参加者への配慮	なし
同時に行なうプログラム	特定のものはなし
終了後に行なうプログラム	特定のものはなし
導入のきっかけ	厚生労働科学研究高橋班からの提起
技法・技術をどこで習得したか	高橋班による研修
導入に伴う準備（期間、費用等）	特になし
技術的な難易度（主観で） 100点満点で何点 1（とてもかんたん）～100（非常に難しい）	コメント等あれば記入してください <u>80</u> 点 形態にとらわれるとなかなか実施に至れない。 FGCの発想を参考に臨機応変に展開することが必要。
効果の実感／おすすめ度 100点満点で何点 1（おすすめできない）～100（超おすすめ）	コメント等あれば記入してください <u>80</u> 点 当プログラムの実施を通し、当事者の主体性が尊重されることで、結果的に予想以上に「当事者」の行動が顕在化することがある。
課題／苦勞すること（選択して下さい・複数回答可）	■技術的に高度である <input type="checkbox"/> 所内の理解を得るのが困難 ■対象者の選定が困難 <input type="checkbox"/> 予算の確保が困難 ■他機関との連携が困難 <input type="checkbox"/> その他（具体的に記入してください） 当事者参画の考え方を支援者間で共有しておく必要がある。
向いているケース	再統合（再統合の可能性）を視野に入れられるケース。 その他、当事者のエンパワーを必要としているケース。
うまくいくためのポイント	ケース担当者を最大の支援者として位置づけること
備考	ファミリータイムを演出してはいるものの、自己決定を認めることができる範囲には限界があるため、純然たるFGCと名乗ることは憚られます。よって、修正型FGCとしています。

【事例番号13：神奈川県厚木児童相談所】

アウトライン編	
プログラム名	合同ミーティング
ベースとしている技法	合同ミーティング神奈川モデル
実施主体	神奈川県厚木児童相談所
対象者	家族（主に保護者） 児童福祉施設（場合によっては関係機関） 児童相談所
個人／グループ人数	4名～
体制（係わる職員）	<input type="checkbox"/> 児童相談所単独 <input checked="" type="checkbox"/> 他機関との協働 ・どのような機関ですか？（主に児童福祉施設） ・契約の形態は？（児相との合意） ・予算（謝礼等）は？（特になし、場合によってはお茶菓子があった方がよい） ・具体的に記入してください （例）児童相談所；親子支援チーム（進行） 児童福祉司、児童心理司 児童養護施設；FSW、指導員、保育士、心理担当 家族；父、母、親族、児童本人、きょうだい等
プログラムの概要 （基本的な考え方）	<input type="checkbox"/> 支援プランを親と支援者側が共有し合うこと <input type="checkbox"/> 再統合プログラムのステップアップの時点で実施し、これまでの取り組み経過を共有し、小さな変化から相互に肯定的に評価し合う。
内容（ワーク名／ねらい）	<input type="checkbox"/> 当事者参加の中で方向性を確認する。 <input type="checkbox"/> それまでの「児童相談所担当者と親」「施設職員と親」という利害関係が生じやすい二者関係から、支援チームが介在することで三者関係を構築し、それぞれの主張を引き出し、議論を成立しやすくする。 <input type="checkbox"/> 他者の意見を聞くことが出来る場を設けることで、それぞれが自己の立場や意見を見直すきっかけになることもある。
回数（開催頻度）	必要に応じて開催
期間（1クール）	規定なし。再統合に向け、年単位になることもあり
開催場所	児童相談所・児童福祉施設・関係機関等公的機関
開催時間（所要時間）	60分～120分
期待できる効果	<input type="checkbox"/> 保護者が見通しを持って子どもとの交流等に取り組める。 <input type="checkbox"/> 施設・児相・保護者が目標に向かって一緒に取り組んでいるという感覚を持って、相談関係を築ける。 <input type="checkbox"/> それぞれが心配な点を出し合うことで、その解決に向けた話し合いが持て、現実的検討しやすい。
プログラム適用の時期 （選択して下さい・複数回答可）	<input checked="" type="checkbox"/> 初期介入時 <input checked="" type="checkbox"/> 一時保護中 <input type="checkbox"/> その他(具体的に記入してください) <input checked="" type="checkbox"/> 施設等措置中 <input checked="" type="checkbox"/> 措置解除後
通常業務時間外(土日、夜間)の実施	必要に応じて検討。土日に行う必要性が高い
交通費等の支給等の参加者への配慮	なし
同時に行なうプログラム	特定のものはない。段階的交流プログラムの一環としての実施が多い
終了後に行なうプログラム	特定のものはない
導入のきっかけ	当事者参画の時勢
技法・技術をどこで習得したか	独自
導入に伴う準備（期間、費用等）	特になし
技術的な難易度（主観で） 100点満点で何点 1(とてもかんたん)～100(非常に難しい)	コメント等あれば記入してください <u>80</u> 点
効果の実感／おすすめ度 100点満点で何点 1(おすすめできない)～100(超おすすめ)	コメント等あれば記入してください <u>100</u> 点 直接支援の最前面に立つ施設職員の方々にとって、了解しやすい展開がのぞめる。
課題／苦勞すること （選択して下さい・複数回答可）	<input type="checkbox"/> 技術的に高度である <input checked="" type="checkbox"/> 所内の理解を得るのが困難（合同ミーティングの結論を「所に持ち帰って検討」という構図に持ち込むことは好ましくないという観点から） <input type="checkbox"/> 対象者の選定が困難 <input type="checkbox"/> 予算の確保が困難 <input type="checkbox"/> 他機関との連携が困難 <input type="checkbox"/> その他(具体的に記入してください)
向いているケース	<input type="checkbox"/> 基本的には向いている・いないにかかわらず行う方が望ましい。 <input type="checkbox"/> 保護者の不信感が強いときに、疑心暗鬼を取り除く上で有効に機能することあり。
うまくいくためのポイント	<input type="checkbox"/> ホワイトボードをフルに活用し、参加者の意見を書き上げて行くことで、全参加者が参加感や、取り上げられた満足感を味わえるよう配慮すること。
備考	

援助プログラム事例（3）

3 職員・チームへのサポート、方針検討を目的に含むもの

【事例番号12：神奈川県厚木児童相談所】

アウトライン編	
プログラム名	あつカン・いいんだよ
ベースとしている技法	独自
実施主体	神奈川県厚木児童相談所
対象者	支援者（スタッフ）：児童相談所担当者（児童福祉司・児童心理司。保護所職員等） 施設職員（FSW、主任、保育士等） 関係機関（市町村児童担当係等） 当事者：保護者（現状での参加設定はまれ）
個人／グループ人数	1～
体制（係わる職員）	<p>■児童相談所単独 児童相談所単独実施が多い。構成：各担当者、各SV、親子支援チーム</p> <p>■他機関との協働</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どのような機関ですか？（ケースに関係している、今後関係して行く関係機関） ・契約の形態は？（随時召集） ・予算（謝礼等）は？（無し） ・具体的に記入してください
プログラムの概要 （基本的な考え方）	<p>○ケースの置かれている現状を確認し、共通理解を深め、今後の進め方を検討する。結論を急がず、語らいを通して、担当者をはじめとした参加者が、それぞれの気づきを増すことを目指す。</p> <p>○ケースカンファレンス</p> <p>○ケース分析とケース整理</p> <p>○激務に携わっているがために、内外から否定的なフィードバックを受ける機会が多くなりがちな直接担当者が、「それでいいんだよ」「それもいいんだよ」「そのままでもいいんだよ」「○○でいいんだよ」と、ケース展開に自信が持てるような整理が出来ることを目指している。</p>
内容（ワーク名／ねらい）	<p>○「本日のテーマ」を担当者に挙げてもらい、担当者の思いを聞く。</p> <p>○家族アセスメント</p> <p>○情報の整理（ジェノグラム、エコマップ等の作成）</p> <p>○虐待発生要因の仮説立て</p> <p>○支援プランの検討</p>
回数（開催頻度）	必要に応じて開催。月10ケース程度
期間（1クール）	規定なし
開催場所	児童相談所・児童福祉施設、関係機関。◎ホワイトボードは必須
開催時間（所要時間）	90～120分
期待できる効果	<p>○家族のアセスメント</p> <p>○情報整理</p> <p>○ケース分析</p> <p>○担当者・関係者のエンパワーメント</p> <p>○SV参加によるケース状況の共有</p> <p>○施設・関係機関職員の参加による連携の強化</p> <p>○話すことで呼吸（息）をし、生き生き！</p>
プログラム適用の時期 （選択して下さい・複数回答可）	<p>■初期介入時 ■一時保護中 ■施設等措置中 ■措置解除後</p> <p>□その他（具体的に記入してください）：いつでも・どこでも・誰とでも（ただし、実施には親子支援チーム介在を原則としている）</p>
通常業務時間外（土日、夜間）の実施	夜間あり 土日に関しては必要に応じて検討
交通費等の支給等の参加者への配慮	なし
同時に行なうプログラム	家族支援のためのチェックリスト
終了後に行なうプログラム	<p>「あつ感度」なる効果測定を行う（実施前後の比較）</p> <p>「次の一手」なる具体的行動目標をたて、『あつカン』が現実的 direct 支援に結びつくように心掛けている。</p>
導入のきっかけ	親子支援チームがケースに関与するに当たり、理解を深める必要があったため。
技法・技術をどこで習得したか	独自。経験＋実施後の反省を踏まえ、進化中。
導入に伴う準備（期間、費用等）	約1年間の実践の中で形成された。

技術的な難易度（主観で） 100点満点で何点 1(とてもかんたん)～100(非常に難しい)	コメント等あれば記入してください <u>75点</u> 優れたケース分析や判断が押し付けられるよりも、参加者の「参加感」「自己整理の達成感」が「あつ感度」を上げる！
効果の実感/おすすめ度 100点満点で何点 1(おすすめできない)～100(超おすすめ)	コメント等あれば記入してください <u>90点</u> 間接的とは言え、あつ感度の高まりは家族再統合支援の原動力ともなっている。
課題/苦勞すること (選択して下さい・複数回答可)	■技術的に高度である ■所内の理解を得るのが困難 □対象者の選定が困難 □予算の確保が困難 □他機関との連携が困難 ■その他(具体的に記入してください)：担当者多忙のため、日程調整が困難
向いているケース	担当者がケース整理したいと思ったとき 親子支援チームが家族再統合に向けたケース理解を深めたいと思ったとき
うまくいくためのポイント	参加者全員が意見を出しやすい雰囲気をつくること
備考	「あつカン・いいんだよ」は親子支援チームが主催するカンファレンスの愛称で、職員による応募で命名したものです。

<研究班としてのコメント>

本プログラムは、保護者に直接働きかけるものではなく児相スタッフを支援することを目的としたプログラムである。スタッフ支援は日ごろの業務の中で行われるべきものであるが、実際にはまとまった時間を確保することが困難なのが実情であろう。このような状況の中、あえて意図的にスタッフ支援をプログラムとして設定している点が特筆されるものである。煩雑な業務の中で一定の時間を確保しじっくりとケース整理を行い、次の一手を具体的に導き出す展開は担当者にとって非常に有意義なものであろう。

資料編

『あつカン・いいんだよ』実施例

「あつカン・いいんだよ」とは

- 主としてケース担当者がケースを整理すること、ケースの状況や担当者の整理を関係者で共有することを目的として開催するカンファレンスの愛称です。
- 対象となるケースは、特に限定されていません。しかし、とりわけ親子分離をした虐待ケースの再統合を考える場合、複雑な要因が絡むばかりか関係者も多く、整理に多大なエネルギーを割く必要が生じることから、有用性は増すと考えています。いつ何時でもケース展開の軸となるのはケース担当者であり、ケース担当者が迷いを払拭して見通しをもって踏み出せることは、再統合の第一歩といっても過言ではありません。できるだけ気持ちを軽く、できるだけ効率よく一歩を踏み出せるように皆でアイデアを出し合い、共有すること、それが「あつカン・いいんだよ」の目指しているものです。

「あつカン・いいんだよ」名称の由来

- この名称は、こうしたカンファレンスに対しより親しみが持てるように名前をつけようという機運が盛り上がり、所内公募で命名されたものです。
- 「あつカン」は文字どおり「厚木カンファレンス」の略です。一方で「いいんだよ」には、激務であるばかりか、危機管理上失敗が許されないようなストレス状況下にあるケース担当者が、「あつカン」で考えや思いを整理することを通して、少

しても気持ちを楽に持てるようになること、「ああ、これでもいいんだなあ」と思えるようになるといいなあ、「そう、それでもいいんだよ」と言ってもらえるといいなあ、という所員の思いが込められています。

「あつカン・いいんだよ」の構造

別紙『アウトライン編』参照

「あつカン・いいんだよ」のセッティング

- ① ホワイトボードの使用：情報はホワイトボード上に書き出す。
- ② 事前準備：日時・会場の調整・設定は親子支援チームが行う。資料の用意等、事前準備は一切行わない。担当者は当日“からだひとつ”で参加すればよい。

※ 資料を用意することは、負担増を避けるため、および「あつカン」の効果を高めるために、敢えて見合わせています。手元の資料を見たり、それに書き込んだりしながら話し合いを行うことは、同じものを見て共有しているようでいながら、実は別々のイメージを展開してしまっていることが多く、また、綿密な資料が、結果的に情報過多で議論が拡散することにつながるなど、皮肉な効果を生むことが少なくありません。そこで「あつカン・いいんだよ」では、とりあえず「本日のテーマ」にまつわる範囲で、出来るだけホワイトボード上に集約した情報で完結することを心掛けています。

「あつカン・いいんだよ」の流れ（様々なパターンがありますが、標準的なものです）

第1ステージ	① テーマの設定	○カンファレンスのテーマを担当者が提示します。 進行役：「本日のテーマは何にしましょう？」 担当者：「『ところでお母さんの本心は？』ってところかな」
	② 「あつ感度」の確認（実施前）	○当該ケースについての『スッキリ感』がどの程度なのか、確認します。 ○0～100点で、参加者それぞれが主観で得点を表明します。この得点は、情報量の多い少ないや理解の深さではなく、あくまで今後のケース展開に向けての『スッキリ感』です。知れば知るほど『モヤモヤ』してくることもあるので、その場合は「あつ感度」は低くなる、ということになります。 進行役：「あつ感度はどのくらいですか？」 担当者：「ん～、ちょっと混乱しててね、20点くらいかな」
第2ステージ	③ 家族状況の確認	○家族の状況を、ジェノグラムを描き出しながら確認して行きます。ジェノグラムとそこに付加された情報が、この後の検討の基盤となります。
	④ 経過の確認	○児童相談所が係属してからの経過のポイントを、時系列的に整理します。必要に応じて成育史に遡ったり、前回の既出事項を省略したりします。
	⑤ 家族の人物像の確認	○③～④の過程を通してケースの概要を再確認した上で、あらためて関係する個々の成員（本人、保護者、きょうだい、親族等）の人物像を確認します。検査・調査による客観的なデータから、“印象”まで、持っている情報を出し合います。 進行役：「『本人』はどんなお子さんですか」「継母さんの“ひととなり”を教えてください」
第3ステージ	⑥ テーマに沿った検討	○「本日のテーマ」を軸とした検討を行います。全くの自由討議ではなく、進行役が担当者を中心に発言を振ります。担当者以外の参加者は、適宜質問をしたり意見を述べたりします。発言内容のポイントをホワイトボード上に書き出します。 ○原則として、全ての参加者が発言しながら自ら整理をつけて行くことを目指しており、強引に結論を導いたり、援助方針等の決定を行ったりはしません。 ○誰でも意見を述べることができる一方で、他の参加者の発言を遮ったり、否定したりすることはしない、というのがお約束です。
第4ステージ	⑦ まとめ	○最後は担当者に自分の整理の到達点などを表明してもらい、まとめに代えます。不快感が残る点があれば、併せて言ってもらい、更に検討を試みます。
	⑧ 「次の一手」の確認	○「まとめ」は済みましたが、再度、具体的な「次の一手」を確認します。 進行役：「『あ、次の一手（厚木の一手）』はどうしましょう？」 担当者：「とりあえず、まずはお母さんに電話を入れようかな」 進行役：「いつごろ、入れられそうですか？」 担当者：「じゃあ、今日にでも・・・」
	⑨ 「あつ感度」の確認（実施後）	○最後に再度、参加者全員に「あつ感度」を確認します。整理について『スッキリ感』が増している人もいれば、ケースの重篤さが明らかになるにつれ『モヤモヤ感』が増す人もいます。いずれの変化も参加者全員で共有することを心掛けます。 担当者A：「不安に思ってたけど、結構しゃべってスッキリしたから、70点」 担当者B：「いやあ、こうして見てみると、再統合は前途多難だなあ、気が重くなっちゃったんで、15点」

【事例番号14：神奈川県厚木児童相談所】

アウトライン編	
プログラム名	再統合ヒアリング
ベースとしている技法	独自
実施主体	神奈川県厚木児童相談所
対象者	児童福祉施設措置中の全児童
個人／グループ人数	－
体制（係わる職員）	<input checked="" type="checkbox"/> 児童相談所単独 担当児童福祉司、子ども支援課長、子ども支援課長補佐、虐待対応班スーパーバイザー 親子支援チーム <input type="checkbox"/> 他機関との協働 ・どのような機関ですか？（ ） ・契約の形態は？（ ） ・予算（謝礼等）は？（ ） ・具体的に記入してください
プログラムの概要（基本的な考え方）	<input type="checkbox"/> 施設入所ケースについての現状、および家族再統合の可能性についての評価を定期的（年1回）に実施する。 <input type="checkbox"/> 家族再統合に向けた具体的第一歩を確認し、援助に結びつける。
内容（ワーク名／ねらい）	所定のヒアリングシートに沿ったインタビュー
回数（開催頻度）	年1回（ケース毎に／施設措置全ケース対象）
期間（1クール）	単回
開催場所	児童相談所
開催時間（所要時間）	10～60分（各ケース）
期待できる効果	<input type="checkbox"/> 家族再統合の可能性の見落としを極力防ぐことができる。 <input type="checkbox"/> 家族再統合に向けて、担当者親子支援チームで情報やスタンスを共有できる（親子支援チーム関与の可能性を確認することが出来る）。 <input type="checkbox"/> 再統合に向けた全ケースの動きを集中的に把握することが出来る。
プログラム適用の時期（選択して下さい・複数回答可）	<input type="checkbox"/> 初期介入時 <input type="checkbox"/> 一時保護中 <input type="checkbox"/> その他（具体的に記入してください） <input checked="" type="checkbox"/> 施設等措置中 <input type="checkbox"/> 措置解除後
通常業務時間外（土日、夜間）の実施	原則としてなし
交通費等の支給等の参加者への配慮	当事者の直接参画はなし
同時に行なうプログラム	なし
終了後に行なうプログラム	なし
導入のきっかけ	親子支援チーム設置後、家族再統合に向けたチームアプローチを有効に機能させるため。
技法・技術をどこで習得したか	独自
導入に伴う準備（期間、費用等）	なし
技術的な難易度（主観で） 100点満点で何点 1(とてもかんたん)～100(非常に難しい)	コメント等あれば記入してください <u>70</u> 点 膨大で、複雑なケースをコンパクトに確認して行くことはなかなか困難。
効果の実感／おすすめ度 100点満点で何点 1(おすすめできない)～100(超おすすめ)	コメント等あれば記入してください <u>70</u> 点 改めて確認されることも多く、やることの意味は決して少なくないが、労力がかかる。
課題／苦勞すること（選択して下さい・複数回答可）	<input type="checkbox"/> 技術的に高度である <input type="checkbox"/> 所内の理解を得るのが困難 <input type="checkbox"/> 対象者の選定が困難 <input type="checkbox"/> 予算の確保が困難 <input type="checkbox"/> 他機関との連携が困難 <input checked="" type="checkbox"/> その他（具体的に記入してください）：予定の調整、時間の確保
向いているケース	向き不向き関係なく全措置ケース対象
うまくいくためのポイント	笑顔で聞く
備考	

【事例番号19：三重県児童相談センター】

アウトライン編	
プログラム名	F S Wとの連絡会議
ベースとしている技法	
実施主体	主催：児童相談センター 協力：三重県児童養護施設協会
対象者	乳児院、児童養護施設に配置されているF S Wと児童相談所職員との連絡会議。
個人／グループ人数	2人（乳児院）＋11人（児童養護施設）
体制（係わる職員）	<input type="checkbox"/> 児童相談所単独 児童相談センターの職員が企画を行い、各児童相談所職員の参加を得て行う。 <input type="checkbox"/> 他機関との協働 ・どのような機関ですか？ ・契約の形態は？ ・予算（謝礼等）は？ ・具体的に記入してください
プログラムの概要 （基本的な考え方）	<input type="checkbox"/> 年4回開催 <input type="checkbox"/> 家族再統合等に係る施設と児相の役割分担を考える <input type="checkbox"/> 専任職員が少ない中で、実際的なF S Wの役割を考える。 <input type="checkbox"/> 本県のスタンダードを見出す。 <input type="checkbox"/> 研修等で意識高揚を図る。
内容（ワーク名／ねらい）	プログラムの概要と同じ。
回数（開催頻度）	年4回 （平成19年度は、7／4、10／12、1／21、3／3）
期間（1クール）	
開催場所	
開催時間（所要時間）	3時間程度
期待できる効果	すぐに、明確な役割分担を決定できる状況にはない。引き続き地道に連絡調整、情報共有、研修等を行っていく必要があると考える。
（以下：未記入）	

【事例番号18：三重県児童相談センター】

アウトライン編	
プログラム名	CAP児童養護施設プログラム
ベースとしている技法	同上
実施主体	主催：児童相談センター 実施主体：CAPみえ
対象者	児童養護施設への措置児童及び施設職員
個人／グループ人数	数人～10数名まで
体制（係わる職員）	<input type="checkbox"/> 児童相談所単独 <input type="checkbox"/> 他機関との協働 ・どのような機関ですか？（CAPみえ） ・契約の形態は？（特に契約書は交わしていない） ・予算（謝礼等）は？（1プログラム 3万円） ・具体的に記入してください
プログラムの概要 （基本的な考え方）	家族再統合を行う場合、子どもへのエンパワメントは不可欠である。長期養護児童を含めて、権利意識の高揚を図り、自己尊重のスキルを身につけさせる。 また、プログラムの理念を施設処遇に活かせるように施設職員の意識高揚を図る。
内容（ワーク名／ねらい）	プログラムの概要のとおり。
回数（開催頻度）	平成19年度 施設職員ワークショップのみ 5施設（各1回）
期間（1クール）	上記+子どもワークショップ 2施設 （施設職員ワークショップ：1回、子どもワークショップ：4グループ×1回）
開催場所	各施設
開催時間（所要時間）	2時間程度
期待できる効果	すぐに効果が得られるものではないが、施設職員がプログラムの理念等を処遇に活かし、今後につなげていくことが大切である。 このため、平成19年度実施内容等について、情報共有等のため報告会を開催する予定である。 子どもは、自己肯定感を高め、家庭復帰後においても自分を守る力を備えていけるようになることが目標となる。
（以下、未記入）	